

姫原西遺跡

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告 1

1999年3月

工国道工事事務所
教育委員会

『姫原西遺跡』正誤表

ページ	行	誤	正
例言 三 iv	10・19・29 行目 1 行目	足立克巳 設楽博巳	足立克巳 設楽博巳
本文 203	下から 11 行目	以下のとおりである。	以下のとおりである。 ⁽¹⁾
204	18 行目	わたっている。	わたっている。 ⁽²⁾
205	3 行目	絵画入り箱製品と	絵画入り箱製品と ⁽³⁾
"	4 行目	り板製品の 2 例	り板製品の 2 例 ⁽⁴⁾
"	8 行目	壺形土器があるが、	壺形土器があるが、 ⁽⁵⁾
"	9 行目	古い例である。	古い例である。 ⁽⁶⁾
"	13 行目	と言われている。	と言われている。 ⁽⁷⁾
"	下から 5 行目	を占めているが、	を占めているが、 ⁽⁸⁾
抄録	巻次	2	1
	シリーズ番号	2	1

姫原西遺跡

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告 1

1999年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

一般国道9号は、京都市を起点として山陰地方の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路です。

建設省松江国道工事事務所においては、出雲市内的一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、出雲バイパスの建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当出雲バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成8年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成8・9年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

1999年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所
所長 大石龍太郎

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局から委託を受けて、平成8年度より一般国道9号出雲バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。この報告書は平成8年度から9年度にかけて実施した出雲市姫原町地内姫原西遺跡の発掘調査結果を取りまとめたものです。

宍道湖西部に広がる出雲平野は、斐伊川・神戸川の沖積作用によって形成された島根県最大の平野で、古代出雲文化の形成・発展に重要な役割を果たしてきた地域です。特に平野の西部にあった神門水海という入り海（現在の神西湖もその一部）の周辺には、弥生時代以来、矢野遺跡をはじめ、多くの集落が形成され、南部丘陵には西谷墳墓群や大念寺古墳、上塙治築山古墳など、巨大な墳墓群が営まれています。

この度の調査では、弥生時代後期の遺物が大量に堆積した神戸川水系の旧河道や貝塚、古墳時代初頭の井戸、さらには中世後期の古墓などを発見しました。特に旧河道から出土した弥生時代後期終末の木製品は、農工具類から日用雑器類、そして祭祀具に至るまで多種多様な製品が確認されました。

本報告書においては、多様な出土遺物について未解明な点もありますが、本書が地域の歴史にとどまらず、日本古代史を解明していく手掛かりとして、また、郷土の歴史と文化財に対する理解と関心を高める一助として、役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にあたりご協力いただきました地元の方々をはじめ、建設省中国地方建設局松江国道工事事務所、出雲市教育委員会、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

島根県教育委員会教育長
江 口 博 晴

例　　言

1. 本書は島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局から委託を受けて、平成8・9年度に実施した一般国道9号出雲バイパス建設予定地内、姫原西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 姫原西遺跡は、出雲市姫原町216番地他に所在し、出雲バイパス建設工事に先だって実施した分布調査によって発見した遺跡である。
3. 調査組織は次のとおりである。(敬称略、職名等は当時)

調査主体　島根県教育委員会

平成8年度

- 事務局　勝部 昭（文化財課長）、森山洋光（同課長補佐）
　　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、古崎藏治（同課長補佐）、濱谷昌宏（同主事）
- 調査員　足立克巳（調査第4係長）、池淵俊一（主事）、間野大丞（同）、守岡正司（同）、田原淳史（同）、伊藤 智（同）、高塚久司（同）、田中強志（調査補助）、横山純子（同）、月坂雄一（同）、永戸麗子（同）、原 喜久子（同）
- 調査指導　池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（同、島根大学法文学部教授）、田嶋博之（愛媛大学法文学部助教授）、井上貴央（鳥取大学医学部教授）
- 整理作業　玉木順子、原 昭枝、西 郁子

平成9年度

- 事務局　勝部 昭（文化財課長）、島地徳郎（同課長補佐）
　　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、古崎藏治（同課長補佐）、濱谷昌宏（同主事）
- 調査員　足立克巳（調査第4係長）、間野大丞（主事）、池淵俊一（同）、伊藤徳広（同）、高塚久司（文化財保護主事）、細木啓義（同）、田中強志（調査補助）、月坂雄一（同）、永戸麗子（同）
- 調査指導　高安克巳（島根大学汽水域研究センター教授）、上原真人（京都大学文学部教授）
- 整理作業　原 昭枝、西 郁子、江角シゲ子、金築部子、藤江美穂、大田晴美、神谷登喜美、笠井文恵、三上恭子

平成10年度

- 事務局　勝部 昭（文化財課長）、島地徳郎（同課長補佐）
　　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、秋山 実（同課長補佐）、松本岩雄（同）、川崎 崇（同主事）
- 調査員　足立克巳（主幹）、間野大丞（主事）、細木啓義（文化財保護主事）、田中玲子（調査補助）、月坂雄一（同）、小田川悠美（同）
- 調査指導　光谷折氏（奈良国立文化財研究所発掘技術研究室長）
- 整理作業　神谷登喜美、多久和文子、錦織美千恵、景山光子、瀬川恭子
- 指導助言　小林 克（文化庁記念物課文化財調査官）、森田 稔（文化庁美術工芸課文化財調査官）、金子裕之（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター考古計画研究室長）、肥塚隆保（同遺物処理研究室長）、岩永省三（同主任研究官）、佐藤昌憲（京都工芸総合大学名誉

教授)、春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授)、設楽博巳(同助教授)、藤尾慎一郎(同助手)、徳岡隆夫(島根大学汽水城研究センター長)、渡邊貞幸(同法文学部教授)、水野正好(奈良大学学長)、笠原潔(放送大学助教授)、宮本一夫(九州大学文学部助教授)、高橋克壽(京都大学大学院助手)、三宅博士(安来市教育委員会和銅博物館係長)

調査協力 島根県教育庁文化課古代文化センター、八雲立つ風土記の丘資料館、米田克彦、岡美登、鷲谷和彦、安川満、岡崎正雄、中村弘、藤田淳、千家和比古、岡部裕俊、徳永貞紹、水島稔夫(故人)

4. 現場の発掘作業(発掘作業員の雇用等)については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、徳中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から徳中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は以下のとおりである。

社団法人中国建設弘済会島根県支部

布村幹夫(現場事務所長)、中島勉(技術員)、松近秀夫(同)、須藤美奈子(事務員)、篠原律子(同)

5. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

P…ピット、SB…掘立柱建物跡、SK…土坑、SD…溝、SA…刪、SX…その他

6. 本文中の挿図の方位は国土調査法による第III座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

7. 挿図の縮尺は、遺構図については遺構の種類ごとに縮小率を描えるよう努めたが、全体的には統一を図っていない。遺物については、基本的に弥生土器は1/4、木製品は1/4ないし1/6、その他については1/3で掲載するよう努めた。

8. 本書に掲載した遺跡位置図は建設省国土地理院の地形図を使用した。

9. 本書に掲載した遺物の実測については、調査員のほか、米田克彦(現岡山県古代吉備文化センター主事)、横野純弥(調査補助)、神谷、錦織、景山、瀬川が行い、浮写は多久和、神谷、錦織、景山、瀬川が行った。

10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、足立と広江耕史(文化財課文化財保護主事)が行った。

11. B区貝塚資料について、貝類については島根大学汽水城研究センターの高安克巳教授に、昆虫化石については愛知県立明和高等学校の森勇一教諭に分類と分析をお願いするとともに、種子については、蒜山地質年代学研究所(担当松昌彦)に委託して分析を行った。また、B区旧河道内に堆積した土壤の花粉分析と珪藻分析を川崎地質株式会社関西支社(担当渡邊正巳)に委託して実施した。分析結果については、第4章・第5章にそれぞれ報告を掲載した。

12. 本遺跡の木製品のうち、年輪年代の判明しそうなものについては奈良国立文化財研究所光谷拓実室長に年代測定をお願いした。また、木製品に塗布された漆等については同研究所客員研究員の佐藤昌憲氏に分析をお願いした。なお、本文中に明記した木製品の樹種は、株式会社吉田生物研究所に鑑定を委託したものである。

13. 本遺跡の出土遺物並びに本遺跡調査に関する写真・実測図等の資料は、松江市打田町33番地島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14. 発掘調査に際しては、建設省松江国道工事事務所をはじめ、出雲市、出雲市教育委員会、四格公民館など、関係各機関から多大な協力を頂いた。記して深甚の謝意を表します。

15. 本書の編集執筆は上記調査員の協力を得ながら足立が行った。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(1)
第2章 姫原西遺跡の位置と環境	(2)
第1節 地理的・歴史的環境	(2)
第2節 四絡遺跡群の中の姫原西遺跡	(6)
第3章 遺跡の調査	(8)
第1節 調査の経過と概要	(8)
1 トレンチ調査と調査区の設定	(8)
2 調査の経過と概要	(9)
第2節 調査の結果	(10)
1 A・C区の調査	(10)
(1)弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構と遺物	(10)
(2)奈良時代の遺構と遺物	(37)
(3)中世の遺構と遺物	(38)
2 B・BW区の調査	(55)
(1)遺構	(61)
(2)貝塚	(73)
(3)自然河道内出土遺物	(79)
第4章 貝塚出土遺物の分析	(155)
第1節 出雲市姫原西遺跡出土の貝類について	(155)
第2節 姫原西遺跡貝塚出土の種子について	(167)
第3節 島根県姫原西遺跡から産出した昆虫化石群と古環境	(183)
第5章 姫原西遺跡における花粉・珪藻分析	(191)
第6章 まとめ	(203)

挿図目次

第1図	姫原西遺跡の位置	3
第2図	姫原西遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	四絡遺跡群と姫原西遺跡の位置関係	6
第4図	バイパス予定地と遺跡の位置関係	7
第5図	トレンチ調査の位置	8
第6図	調査区の配置図	9
第7図	A・C区遺構配置図	11~12
第8図	SB01・02実測図	13
第9図	SB03・04実測図	14
第10図	SB05・06実測図	15
第11図	SB07・08実測図	16

第12図	掘立柱建物跡出土土器実測図	16
第13図	SB09・10実測図	17
第14図	SB11・12実測図	18
第15図	SB13・14実測図	19
第16図	SB15・16・17実測図	20
第17図	SA01・02並びにP1遺物出土状況実測図	21
第18図	SA01内P1出土遺物実測図	21
第19図	SK11及び木組内遺物出土状況実測図	22
第20図	SK11出土遺物実測図(1)	23
第21図	SK11出土遺物実測図(2)	24
第22図	SK17実測図	25
第23図	SK17出土遺物実測図	26
第24図	SK19実測図	27
第25図	SK19木組実測図	27
第26図	SK19遺物出土状況実測図	28
第27図	SK19山上遺物実測図(1)	29
第28図	SK19出土遺物実測図(2)	30
第29図	SK19山上遺物実測図(3)	30
第30図	A・AN区弥生時代の土坑実測図(1)	32
第31図	A・AN区弥生時代の土坑実測図(2)	33
第32図	A・AN区弥生時代の土坑出土遺物実測図(1)	34
第33図	A・AN区弥生時代の土坑出土遺物実測図(2)	34
第34図	A・AN区弥生時代の溝状遺構実測図	35
第35図	C区P1及び出土土器実測図	36
第36図	A区SD01実測図	37
第37図	A区SD01出土土器実測図	37
第38図	A・AN区中世の土坑実測図(1)	38
第39図	A・AN区中世の土坑実測図(2)	39
第40図	A・AN区中世の土坑出土遺物実測図(1)	40
第41図	A・AN区中世の土坑出土遺物実測図(2)	41
第42図	C区1号古墓実測図	42
第43図	C区1号古墓人骨並びに副葬品出土状況実測図	43
第44図	C区1号古墓底部竹組実測図	43
第45図	C区1号古墓山上遺物実測図	44
第46図	C区SK20及び出土土器実測図	46
第47図	C区2号古墓上器出土状況及び土器実測図	47
第48図	C区2号古墓人骨山上状況実測図	47
第49図	C区3号古墓遺物出土状況実測図	48
第50図	C区3号古墓小箱及び底部竹組実測図	48
第51図	C区3号古墓出土土器実測図	49
第52図	A・C区中世の溝状遺構実測図	50
第53図	A・C区中世の溝状遺構出土遺物実測図	51
第54図	A区SX01～03実測図	51
第55図	A～C区遺物包含層出土遺物実測図(1)	52
第56図	A～C区遺物包含層出土遺物実測図(2)	53
第57図	B・BW区遺構配置図	56
第58図	B・BW区上層実測図	57～58

第59図	B区大溝実測図	59
第60図	B区大溝出土土器実測図	59
第61図	B区1号橋実測図	60
第62図	B区1号橋と土層の関係図	61
第63図	B区2号橋実測図	62
第64図	B区3号橋実測図	63
第65図	BW区4号橋実測図	64
第66図	BW区4号橋と土層の関係図	64
第67図	BW区5号橋実測図	65
第68図	B区1号杭列及び底部木組実測図	66
第69図	B区2・3号杭列実測図	67
第70図	B区4号杭列実測図	68
第71図	B区5号杭列実測図	69
第72図	B区6号杭列実測図	70
第73図	BW区7・8号杭列実測図	70
第74図	BW区9号杭列実測図	71
第75図	BW区10号杭列及びSD21実測図	72
第76図	BW区SD21川土土器実測図	72
第77図	BW区SK21実測図	73
第78図	BW区貝塚の調査グリッドと分析試料の採取箇所	73
第79図	BW区貝塚各貝層の堆積範囲図	74
第80図	BW区貝塚上層及び遺物出土状況実測図	75
第81図	B・BW区9層出土器実測図	76
第82図	B・BW区大溝及び大溝下面土器出土状況	77
第83図	B・BW区大溝及び大溝下面出土土器実測図(1)	78
第84図	B・BW区大溝及び大溝下面出土土器実測図(2)	79
第85図	B・BW区10a層(12層を含む)出土状況	80
第86図	B・BW区10a層(12層を含む)出土土器実測図(1)	81
第87図	B・BW区10a層(12層を含む)出土土器実測図(2)	82
第88図	B区10b層出土器出土状況	84
第89図	BW区10b層土器出土状況	85
第90図	B・BW区10b層出土土器実測図(1)	87
第91図	B・BW区10b層出土土器実測図(2)	88
第92図	B・BW区10b層出土土器実測図(3)	89
第93図	B・BW区10b層出土土器実測図(4)	90
第94図	B・BW区10b層出土土器実測図(5)	91
第95図	B・BW区10b層出土土器実測図(6)	92
第96図	B・BW区13・14層出土土器実測図	93
第97図	BW区貝塚川上土器実測図(1)	94
第98図	BW区貝塚出土土器実測図(2)	95
第99図	B・BW区10c・10d・14層土器出土状況	96
第100図	B・BW区10c層出土土器実測図(1)	97
第101図	B・BW区10c層出土土器実測図(2)	98
第102図	B・BW区10d層出土土器実測図	99
第103図	B・BW区17・11層土器出土状況	101
第104図	B・BW区17層出土土器実測図(1)	102
第105図	B・BW区17層出土土器実測図(2)	103

第106図	B・BW区17層出土土器実測図(3)	104
第107図	B区1・2号橋木組下出土土器実測図	105
第108図	B・BW区11層出土土器実測図(1)	106
第109図	B・BW区11層出土土器実測図(2)	107
第110図	B・BW区大溝下面及び10a層木製品出土状況	108
第111図	B・BW区人溝下面出土木製品実測図	109
第112図	B・BW区10a層出土木製品実測図	110
第113図	B・BW区10b層木製品出土状況	112
第114図	B・BW区10b層出土木製品実測図(1)	113
第115図	B・BW区10b層出土木製品実測図(2)	114
第116図	B・BW区10b層出土木製品実測図(3)	115
第117図	B・BW区10b層出土木製品実測図(4)	116
第118図	B・BW区10b層出土木製品実測図(5)	117
第119図	B・BW区10b層出土木製品実測図(6)	118
第120図	B・BW区10b層出土木製品実測図(7)	119
第121図	B・BW区10b層出土木製品実測図(8)	120
第122図	B・BW区10b層出土木製品実測図(9)	121
第123図	B区14層出土木製品実測図	122
第124図	BW区貝塚出土木製品実測図	123
第125図	B・BW区10c・10d層木製品出土状況	125
第126図	B・BW区10c層出土木製品実測図(1)	126
第127図	B・BW区10c層出土木製品実測図(2)	127
第128図	B・BW区10c層出土木製品実測図(3)	128
第129図	B・BW区10c層出土木製品実測図(4)	129
第130図	B・BW区10c層出土木製品実測図(5)	130
第131図	B・BW区10d層出土木製品実測図(1)	131
第132図	B・BW区10d層出土木製品実測図(2)	132
第133図	B・BW区10d層出土木製品実測図(3)	133
第134図	B・BW区17層木製品出土状況	135
第135図	B・BW区17層出土木製品実測図(1)	136
第136図	B・BW区17層出土木製品実測図(2)	137
第137図	B・BW区17層出土木製品実測図(3)	138
第138図	B・BW区17層出土木製品実測図(4)	139
第139図	B・BW区17層出土木製品実測図(5)	140
第140図	B・BW区17層出土木製品実測図(6)	142
第141図	B・BW区17層出土木製品実測図(7)	143
第142図	B・BW区17層出土木製品実測図(8)	144
第143図	B・BW区17層出土木製品実測図(9)	145
第144図	B・BW区11層木製品出土状況	147
第145図	B・BW区11層出土木製品実測図(1)	148
第146図	B・BW区11層出土木製品実測図(2)	149
第147図	B・BW区11層出土木製品実測図(3)	150
第148図	B区1・2号橋内出土及びその他の木製品実測図	151
第149図	B区出土石器実測図	152
第150図	BW区貝塚出土ガラス小玉実測図	153

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は、昭和41年に1次改築を完了したが、その後の交通量の増加に伴い、各所で交通渋滞が発生していた。特に出雲市内は近年都市化が急速に進み、現在の国道9号は朝夕はもとより、日中においても慢性的な渋滞による影響で、幹線道路としての機能が麻痺状態に達していた。出雲バイパスはこうした現状に対処するため、昭和55年と昭和58年に都市計画決定されたものである。当初は、起点を簸川郡斐川町併川、終点を出雲市高松町とした延長7.9kmの4車線道路として計画されたが、その後斐川町内の混雑緩和を図るために、斐川町富村まで事業区間がさらに0.3km延伸されている。

こうした中で、埋蔵文化財との調整が具体化したのは、平成3年度である。出雲市内の国道9号を所管する松江国工事事務所は、平成3年9月24日付けで島根県教育委員会に出雲バイパス建設予定地内の遺跡の有無を照会してきた。これに対して県教委文化課は、平成5年2月に予定地周辺の分布調査を実施し、出雲市姫原町上ノ島西遺跡、出雲市小山町藏小路西遺跡、出雲市渡橋町渡橋沖遺跡、出雲市天神町天神北本町遺跡、出雲市白枝町白枝遺跡の5遺跡を発見するとともに、要注意箇所4箇所をそれに追加して、平成5年3月31日付けで遺跡の存在と文化財保護法上の諸手続並びに取り扱いについて協議が必要な旨回答した。

ところで、この出雲バイパスが通過する出雲市街地は、出雲市が事業主体となって昭和62年度から実施している土地区画整理事業の対象地となっており、バイパス建設も当然区画整理事業の計画の一部に組み込まれる形で設計されていた。これらの事業に加えてさらに、かねてより県立病院の施設整備と充実を図ることを計画していた島根県健康福祉部が、同区域内、姫原町地内のバイパス隣接地に県立中央病院の移転・新築を計画し、平成5年8月に埋蔵文化財調査の必要性について県教委文化課に問い合わせてきた。文化課では同年2月の分布調査の結果を踏まえ、中央病院建設予定地内の試掘調査が必要な旨回答した。この中央病院の移転・新築は島根県の第2次中期計画の中でも最重要プロジェクトのひとつにあがっており、平成11年開院に向け、埋蔵文化財との調整も緊急を要したが、一般国道9号安来道路や斐伊川放水路事業に手を取られていた県教委文化課ではこれに対応することができなかった。そのため、関係機関で協議した結果、バイパス予定地も含め、土地区画整理事業の主体者である出雲市が、区画整理事業の一環として確認調査を行うことになり、出雲市教育委員会が平成6年、上ノ島西遺跡の確認調査を実施した。トレンチ調査の結果、遺構遺物は発見されず、中央病院予定地とその周辺については、平成7年工事が着手された。

土地区画整理事業内の工事に着手した松江国工事事務所は、引き続き直轄事業となるその西方のルート1.4km区間にについて平成7年度からの調査着手を希望したが、協議を重ねた結果、平成7年度末から第一次調査に着手し、翌8年度から本格化させることで合意に達した。これにより、平成7年12月27日付けで工事事務所から文化財保護法57条の3の発掘届けが提出され、文化課は、翌平成8年1月26日付けで98条の2の発掘届けを提出するとともに、2月からルート東端の要注意箇所としていた姫原西遺跡から第一次調査にはいった。

しかし、実際には、工事事務所の思惑通りに用地買収が進まず、工事予定地内に未買収地が虫食い状に残っていたため、平成8年度に姫原西遺跡と藏小路西遺跡の一部、平成9年度に蔵小路西遺

跡の残部と渡橋沖遺跡の調査を行うことに計画を変更したが、それにも変更が生じ、渡橋沖遺跡の一部はさらに平成10年度に持ち越すことになった。

第2章 位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

姫原西遺跡の所在している出雲平野は、第1図で見るように島根県内で最大の沖積平野である。そもそも島根県は中国山地に沿って細長い地勢をしており、県境を境にして瀬戸内側の比較的平坦な高地から、急峻な渓谷へと激変する。したがって、沖積地も大きな河川の流域や海岸近くの平野部に形成されるのみで、県下全体を見渡しても出雲・簸川平野を除いて格段に大きな平野は見当たらない。しかし、その出雲・簸川平野も現在のような景観になったのは近世以降である。中世に発達した野だらが近世に至って高廻たらとして完成し、これに伴って多量の砂鉄を求めて鉄穴流しを行い、多くの山々を崩していった結果、大量の土砂が河口に流出したのである。

出雲平野が形成されたのは、縄文時代前期頃と考えられている。旧石器時代に陸続きだった北山山系は縄文海進によって一旦半島化するが、縄文海進のピークを迎えた縄文時代前期初頭（約6000年前）以降、中国山地から流れ出す斐伊川・神戸川によって多量の砂粒が供給され、三角州を形成して再び陸続きとなったのである。出雲平野はその後も、活発な火山活動を続けていた三瓶山の影響を大きく受けているようで、出雲市小山遺跡のボーリング調査と土壤分析結果では、ハンノキ類やアシなど、温帯を推定させる花粉化石群が含まれた粘土層のうえに、約4800年前に降下した角井降下火山灰とみられる火山灰質シルト層が発見されるとともに、その上層には約3700年前に降下した大平山火山灰起源の川砂が堆積していることが判明した。この大平山火山灰の川砂が矢野遺跡や小山遺跡のある微高地を形成した神戸川層であることはほぼ間違いないところで、その年代は約3700年以降ということになる。矢野遺跡からは縄文時代後期後半の櫛現山式土器も採集されており、出雲平野の土器の出土状況も、神戸川上流の縄文遺跡の層準と同じ変化を示すことがわかる。おそらく、後期から晩期には出雲平野中央部もかなりのところ、陸地化していたことが推定される。三瓶山の火山活動は大平山火山灰の時期をもって休止し、神戸川・斐伊川の冲積作用もおちついて、『山雲國風土記』が編纂された奈良時代は、風土記の記述にあるような神門の入り海も縄文から弥生時代にかけての時期と極端に違わなかつたと推定される。

神門の入り海周辺の縄文時代後期から晩期にかけての遺跡についてはまだ不明な点が多い。湖陵町御領田遺跡では後期中葉の縁帶文土器（崎ヶ鼻式土器）期の方形の竪穴住居跡が発見されているが、集落等については明らかになっていない。前述の矢野遺跡のほか、大社町大社境内遺跡、原山遺跡などでも後期から晩期にかけての土器が出土している。また、姫原西遺跡の西隣、蔵小路西遺跡の調査でも晩期終末の突帶文土器が出土している。弥生時代になると拠点的な集落を中心にいくつかの集落群が形成される。弥生時代の最も古い拠点集落は、矢野遺跡や大社境内遺跡、湖陵町の三部竹崎遺跡などで、前期の古段階の土器などが出土している。中期後半になると、天神遺跡や古志木郷遺跡、知井宮多聞院遺跡などの拠点的集落が、入り海南岸に営まれるようになる。特に最近の調査で、前二遺跡に環濠が巡っていたことが判明したほか、古志木郷遺跡の西隣に位置して

いる下古志遺跡でも同時期の三重の環濠が発見され、中期以降、環濠集落を中心としていくつかの集落が集まつた集落群が複数存在していたことが明らかになってきた。後期、これら出雲平野の諸集落はさらに継続、発展していったと考えられるが、この時期はまた、斐川町荒神谷遺跡や加茂町の加茂岩倉遺跡、大社町命主神社境内遺跡など青銅器祭祀が執り

行われた時期であり、後期後半には西谷埴墓群のような巨大な首長墓が出現することも考えあわせ、弥生社会の発展を考えるうえで、最も重要な地域として位置付けることができる。

その諸集落の生産基盤は神戸川・斐伊川河口の三角州を利用した水田經營と考えられるが、集落内から発見される貝塚から、食生活の一部を日本海や入り海の魚介類に依存していた姿も明らかになりつつある。神門の入り海の南側、多聞院遺跡では、汽水産のヤマトシジミを主体に、カラスガイ、オオタニシなどの淡水産、ハマグリ、ハイガイ、マガキ、サザエが混じり、矢野遺跡でもヤマトシジミを中心にオオタニシ、カワニナ、サルボウなど20種類近い貝類が出土している。

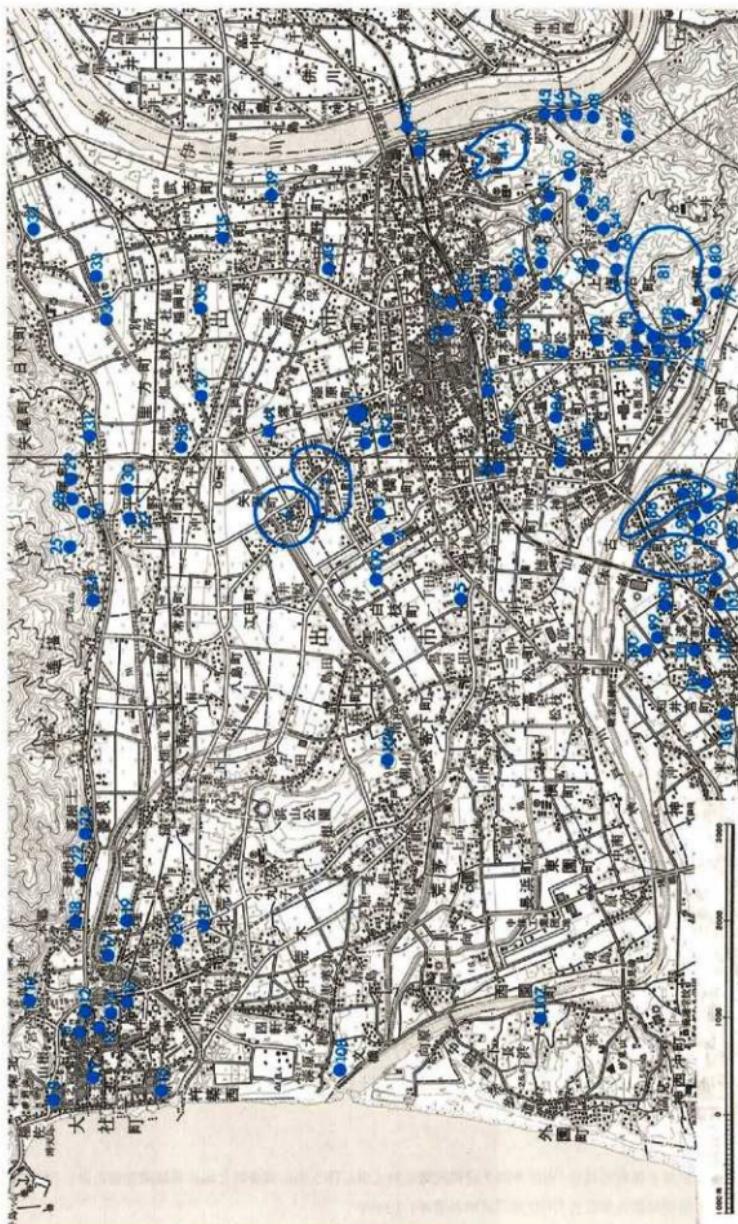
古墳時代の集落は、基本的に弥生時代の集落が踏襲、継続されたと考えられるが、社会は大きく政治権力が確立していく部族社会へと変換していく。平野周辺の丘陵には、首長層の墓が次々と築かれるようになり、前期古墳として北辺に前方後円墳の大寺古墳（全長52m、竪穴式石室）、南辺には円墳の山地古墳（全長24m、組合式木棺）が築かれる。中期古墳はあまり知られていないが、北光寺古墳がそうだと考えられている。後期には東部の意宇平野と雄を争うように大念寺古墳（前方後円墳、全長92m）、上塩治築山古墳（円墳？）、妙蓮寺山古墳（前方後円墳、全長50m）などの大古墳が築かれるとともに、神門横穴墓群（100穴以上）、上塩治横穴墓群（170穴以上）といった大横穴墓群が築かれる。



第1図 姫原西遺跡の位置

参考文献 出雲市教育委員会『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第2地点発掘調査報告書』1998年
島根県教育委員会『出雲神庭荒神谷遺跡』1996年

第2図 姫路西道路と周辺の道路 ($S=1:50,000$)



第1表 姫原西遺跡周辺の遺跡一覧表

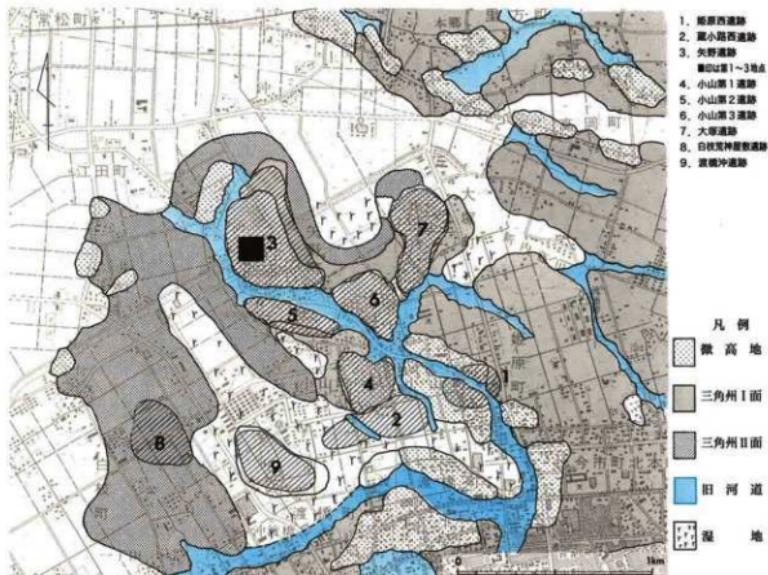
No.	遺跡名	種別	遺跡名	種別	遺跡名	種別	遺跡名	種別	遺跡名	種別
1	施原西遺跡	路	38	高浜I遺跡	地	75	半分古墳	地	古墳・散布地	地
2	施原西遺跡 施原小塙西遺跡	路	39	野村遺跡	地	76	三田谷I遺跡	地	古墳・散布地	地
3	渡柳沖遺跡	路	40	太波遺跡	地	77	三田谷II遺跡	地	古墳・散布地	地
4	天神北木町遺跡	路	41	大槻遺跡	地	78	三田谷III遺跡	地	古墳・散布地	地
5	白枝遺跡	路	42	紫伊川新橋遺跡	地	79	光明寺古墳	地	古墳・散布地	地
6	矢野遺跡	路	43	石手手遺跡	地	80	光明寺古墳群	地	古墳(36支)地	地
7	小山遺跡	路	44	西谷原塚群	地	81	上郷治橋六塚群	地	古墳・散布地	地
8	饭ノ宮台場跡	路	45	原岡岩松跡	地	82	資橋遺跡	地	古墳・散布地	地
9	智頭寺古墓	路	46	長岡根I遺跡	地	83	真庭I遺跡	地	古墳・散布地	地
10	出大社坂内遺跡	路	47	長岡根II遺跡	地	84	真庭II遺跡	地	古墳・散布地	地
11	越前塚塚原跡	路	48	梅垣山古墳	地	85	坂治小学校付近遺跡	地	古墳・散布地	地
12	柴光寺跡	路	49	現山櫛穴遺跡	地	86	弓削遺跡	地	古墳・散布地	地
13	南藏山経塚	路	50	閑原岩塚跡	地	87	古志本郷遺跡	地	古墳・散布地	地
14	因幡山岩塚	路	51	長者原塚寺	地	88	古志本郷遺跡	地	古墳・散布地	地
15	西藏山遺跡	路	52	智頭古墓	地	89	大隅古墳	地	古墳・散布地	地
16	高塚台塚跡	路	53	上浜I遺跡	地	90	古志遺跡	地	古墳・散布地	地
17	乙見塚塚原跡	路	54	上浜II遺跡	地	91	古志遺跡	地	古墳・散布地	地
18	修理免本郷遺跡	路	55	上浜III遺跡	地	92	下古志遺跡	地	古墳・散布地	地
19	原山遺跡	路	56	智頭山古墳	地	93	下古志遺跡	地	古墳・散布地	地
20	南原遺跡	路	57	大念寺古墳	地	94	行寺遺跡	地	古墳・散布地	地
21	中分日塚	路	58	幡野柿平宮跡	地	95	田畠遺跡	地	古墳・散布地	地
22	美松遺跡	路	59	平家女城跡	地	96	妙見寺古墳	地	古墳・散布地	地
23	西御山古墳群	路	60	久都留櫛穴墓	地	97	宝塚古墳	地	古墳・散布地	地
24	龜谷遺跡	路	61	下浜遺跡	地	98	下古志遺跡	地	古墳・散布地	地
25	蛇山櫛跡	路	62	向山城跡	地	99	阿波蛇寺古墳	地	古墳・散布地	地
26	石臼古墳	路	63	下浜古墳	地	100	保榮寺付近遺跡	地	古墳・散布地	地
27	高原II遺跡	路	64	下浜金輪明山遺跡	地	101	東原遺跡	地	古墳・散布地	地
28	大浦山古墳	路	65	智頭古墳	地	102	芦添遺跡	地	古墳・散布地	地
29	龜貝谷遺跡	路	66	大井谷塚跡	地	103	天神山古墳	地	古墳・散布地	地
30	里方八石原遺跡	路	67	大井谷塚跡	地	104	知知乎付近遺跡	地	古墳・散布地	地
31	前口遺跡	路	68	角田遺跡	地	105	萬見遺跡	地	古墳・散布地	地
32	御善寺古墳跡	路	69	宮窓遺跡	地	106	上長浜遺跡	地	古墳・散布地	地
33	山神川山川山遺跡	路	70	寺門寺遺跡	地	107	深葉古墳	地	古墳・散布地	地
34	里方別所遺跡	路	71	寺門寺遺跡	地	108	深葉台場跡	地	古墳・散布地	地
35	松原古墳	路	72	高地山古墳	地	109	白枝遺跡	地	古墳・散布地	地
36	相阿良遺跡	路	73	半分城跡	地					
37	高岡遺跡	路	74	半分瓦塚跡	地					

第2節 四絡遺跡群の中の姫原西遺跡

姫原西遺跡は、出雲市姫原町地内にあり、前述の矢野遺跡や小山遺跡の南東方向に位置している。この矢野遺跡や小山遺跡は、出雲考古学研究会の詳細な分布調査の結果、出雲市矢野町から小山町にかけて、矢野遺跡で5地点、小山遺跡で3地点にわたって広がっていることが確認されており、同研究会によって、四絡小学校遺跡や大塚町の大塚遺跡とあわせて四絡遺跡群という一大集落遺跡として紹介され、以後出雲平野を代表する集落遺跡として認知されるに至っている。四絡遺跡群が所在するこの四絡地区は、現在では住宅が密集してきて周辺の地形をみてとることが難しくなってきているが、もともと周囲の水田よりも1m程度高い微高地に立地している。

矢野遺跡では1953年の旧島根考古学会の発掘調査以来、これまで9回にわたってトレンチ調査が行われており、弥生時代の貝塚や弥生後期の土墳墓、遺物では縄文時代後期後半から平安時代にわたる土器や、弥生時代後期の特殊土器、玉作関係遺物などが発見されている。また、出雲市教育委員会が実施した出雲ドーム建設に伴う第2地点の調査では、微高地からはずれたいわゆる低湿地にあたると考えられていた地点からも14～15世紀の屋敷地が確認され、かなりの広範囲にわたる長期継続形集落であったことがわかった。

小山遺跡でも1989年の出雲集落遺跡研究会による第1地点のトレンチ調査以来、4回にわたって発掘調査が行われており、第1地点では弥生後期の溝状遺構や中世の鉄滓が、第3地点では弥生時

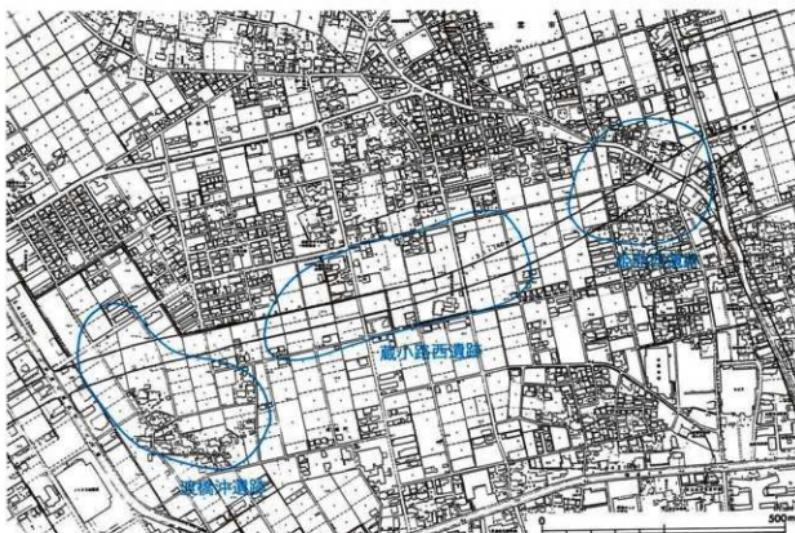


第3図 四絡遺跡群と姫原西遺跡の位置関係（田中義昭 1996を改変）

代の環濠状の大溝が確認されている。特に注目されるのは、前述したように第2地点のボーリング調査結果と土壤分析の結果で、約4800年前頃には標高0程度まで土砂が堆積していて沼地化していたこと、約2450年前頃までは矢野町、小山町周辺に微高地が形成されていた可能性が強いことが指摘されたことである。約2450年前頃までに形成された微高地というのが、約3700年前に噴火した三瓶山の大平山降下火山灰を起源とする砂でできていることも前述したとおりである。

上述のような出雲平野の地形に関する研究については林正久氏の業績によるところが多いが、田中義昭氏は同氏の地形分類図をもとに、四絡遺跡群の各遺跡が神戸川の旧河道に沿ってできた微高地の上にびったりと乗っていることを具体的に提示した。第3図は田中氏が作成した四絡遺跡群の分布図をさらに建設省国土地理院の25,000分の1地図に落としたものである。図中央の3~7が四絡遺跡群内の各遺跡で、8はその西方の三角州Ⅱ面上に立地する白枝荒神屋敷遺跡である。四絡遺跡群の中央を南東から北西に向かって流れているのが神戸川の旧河道で、現地形で言えば主要地方道遙堪今市線にびったり一致する。四絡遺跡群はまさに神戸川の一枝流に形成された自然堤防そのもの上に立地しているといえ、現在に至っても集落の立地条件は古代と変わっていないといえる。このことは出雲平野の集落形成を考えるうえでの重要な要素であり、埋蔵文化財の発掘調査においても遺跡の有無や性格を考えるうえで貴重なヒントを与えるものである。

今回建設されることになった出雲バイパスは、この四絡地区の自然堤防の南端をかきめる形で計画されており、先に行った分布調査の結果もさることながら、第1次調査にはいる前に、遺物が採集されなかった地点についてもこの地形分布を考慮にいれて、遺跡の範囲の再検討を行った。第4図の遺跡の範囲はその検討結果から導き出したものである。



第4図 バイパス予定地と遺跡の位置関係

第3章 遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要

1. トレンチ調査と調査区の設定

上述のようにして遺跡の性格を考えた場合、姫原西遺跡では弥生時代以降の集落跡と神戸川の旧河道などを想定することができた。姫原西遺跡の第1次調査は藏小路西遺跡の第1次調査とあわせ、平成8年2月26日から3月7日まで、上記の点に留意しながら、バックホーによる掘削と土層観察を中心に行なった。遺跡西端の水田に一部未買収地が残ったため、その部分については同年4月17日以降、断続的に実施した。

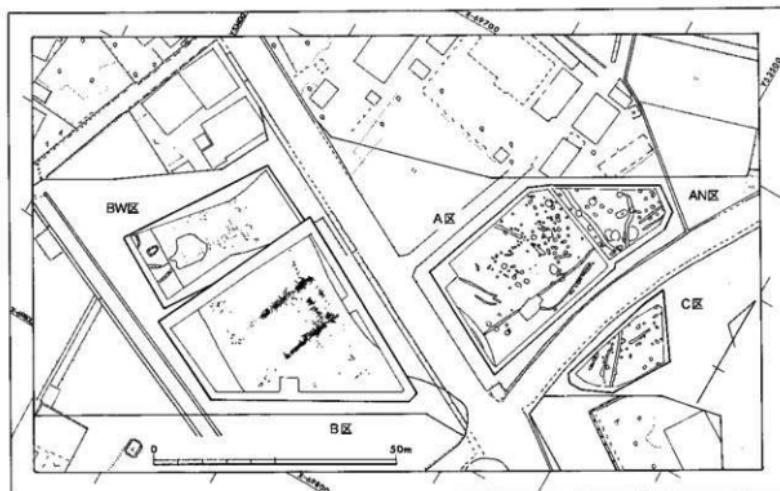
トレンチは水田の畠、あるいは宅地の敷地ごとに任意に設定したが、各畠ごとに最低1箇所は設定するよう努め、面積の広い畠に関しては2箇所設定することにした。そして、最終的にルート内の300mの区間に全部で16個のトレンチを設けることになった。

調査の結果、第5図第1トレンチで耕作土直下より須恵器・陶磁器が、またその下の灰色泥層から弥生土器片が出土し、第2トレンチでは遺構・遺物は発見されなかったものの、第1トレンチの遺物包含層と同一の土層が発見された。また、主要地方道塩堺今市線を挟んだ西側の第4トレンチでは耕作上下の灰色ないし青灰色土層より弥生中期後半の土器が、第5トレンチでは時期がわからなかつたもののやはり弥生土器片が出土したほか、第6トレンチからは自然流路とそれに伴う杭列遺構・遺物包含層を検出した。この自然流路は、青灰色の混砂土を掘り込んで北西から南東の方向に伸びていることが判明した。また、遺物包含層は2層あり、弥生時代後期の壺形土器、鼓形器台などが出土した。

そのほかの第2および第7トレンチ以西では、遺構・遺物とも発見されなかつた。



第5図 トレンチ調査の位置 S=1:2,500 (黒く塗りつぶしたトレンチが遺物出土地点)



第6図 調査区の配置図 (S=1:1,000)

このトレンチ調査の結果をもとに、主要地方道を挟んで、A区・B区の二つの調査区を設定し、平成8年5月21日から第2次調査にはいった。

2. 調査の経過と概要

第2次調査はA区から着手したが、掘り出した土の置き場を確保するため、南北の2区に分けて調査せざるを得なかった。そのため、最初に調査した南側をA区、北側をAN区と呼び分けた。A区・AN区からは弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物跡14棟以上や井戸3基をはじめ、溝状遺構、中世の井戸、土坑、性格不明遺構等を確認した。また、A区を調査中、調査区の東側にも遺構の広がりが推測されたため、市道を挟んだ東側にトレンチを入れたところ、A区と同様に柱穴や弥生土器を発見したため、その一画だけC区として追加調査を行い、中世の古墓3基、古墓に伴う土坑1基、溝状遺構等を発見した。

B区は平成8年9月中旬から東側の約2/3について着手したが、着手直後、松江国道工事事務所が所管している一般国道9号松江道路西地区工事区内の、八束郡玉湯町布志名で布志名焼の窯跡が不時発見されたため、急速その調査にはいることになり、B区の調査は調査主担当不在のまま細々と継続することになった。約40日後の10月末日布志名焼窯跡の調査がやっと終了し、出雲バイパスに復帰したものの、B区の調査はこれが書いて結局平成9年1月31日まで、当初計画を1ヶ月上回る日程で終了した。B区の西側1/3については用地内にあった民家の移転が遅れ、結局平成9年度に先送りされ、平成9年4月7日から同年6月27日まで3ヶ月間実施した。B区では神戸川の旧河道を検出するとともに、弥生時代終末期頃と考えられる木橋や護岸施設、さらにはそれらに伴って大量の土器や木製品が出土した。翌年のBW区の調査でも木橋や護岸施設が確認されるとともに、弥生時代後期後半の貝塚も発見された。

第2節 調査の結果

1. A・C区の調査

A区は発掘調査前は標高5.3mの水田で、基本的な層序は地表面から順に、耕作土（第1層）、灰色ないし灰褐色の砂混じりの床土（第3層）、茶色砂（第5層）、茶色土（第8層）、黒灰色砂質土（第19層）、黒灰色細砂（第23層）、青灰色粘質土（第25層）となる。茶色砂は近世以降の地表層と考えられ、厚さは5cmから10cmと薄いが、畑などで開墾されたのか下面にはかなりの凹凸が認められる。茶色土および黒灰色砂質土は当遺跡の中心的な遺物包含層で、弥生時代から古墳時代初頭の遺物を中心として中世以降の陶磁器や古銭等も含んでいる。その下の黒灰色細砂・青灰色粘質土が基盤層で、黒灰色細砂はA区北半からAN区にかけて薄く堆積している。青灰色粘質土は少し掘り下げたりA区南半では細砂に変化し、空気に触れるとすぐに酸化して黄灰色に変色する。A・C区の遺構は、これよりも上層で確認したものもあるが、基本的にこの基盤層の上面で検出しており、標高はほぼ4.8mである。

AN区も基本的にA区と同じ層順を示すが、第3層と第5層の間に洪水によると考えられる黄灰色の荒砂の堆積が観察された。C区は調査前はバラス敷の駐車場であったが、もともとA区よりも若干標高の低い水田であったようで、茶色土の遺物包含層は見られなかった。

なお、A区茶色土を掘り下げ中に調査区北半で、南北方向に伸びる水田の畦畔らしき土色の変化に気づき、精査してその検出を試みたが、南に追っていくうち線が不鮮明となり、途中で検出を断念した。

A～C区の基盤層上面で確認した遺構は、弥生時代後期から古墳時代初頭のものが掘立柱建物跡14棟以上、井戸跡3基、溝状遺構8本で、その他に奈良時代頃と思われる溝状遺構1、中世の井戸跡4、古墓3、土坑3、性格不明遺構3等がある。以下に各遺構について、時代を追ってA～C区まとめて報告する。

（1）弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構と遺物

弥生時代から古墳時代初頭の遺構はA～C区の全域に広がっており、特にA区北半で掘立柱建物跡が集中して確認された。掘立柱建物跡は基本的に1間×2間または1間×1間の小形のもので、1間×2間のものは長軸を南東から北西の方向に向けるものが多い。井戸跡は木組みの井戸枠をもつもので、いずれもAN区南半で検出した。

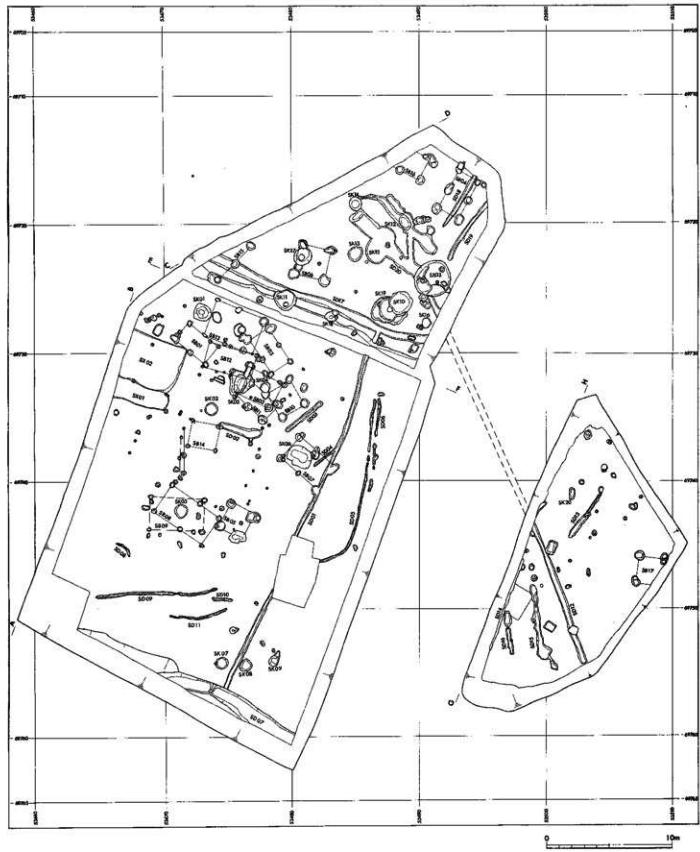
①掘立柱建物跡

SB01（第8図上、図版3-1）

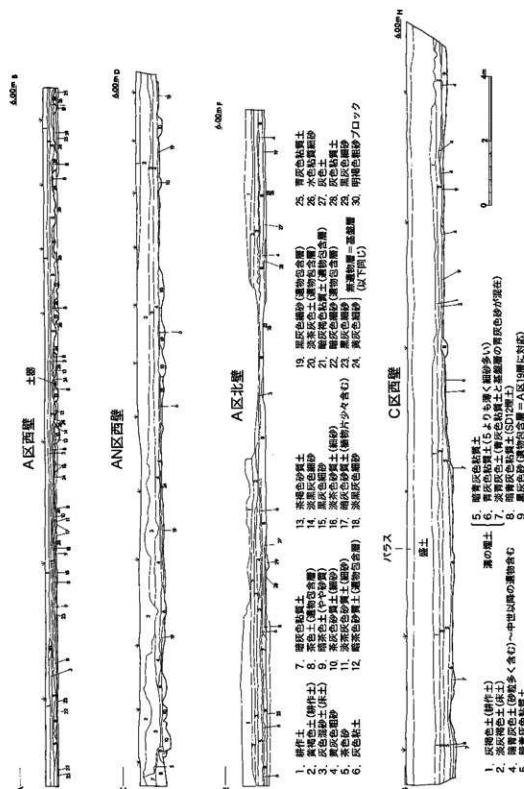
A区北西隅で検出した建物跡で桁行2間（2.90m）×梁間1間（1.70m）である。建物の軸方向はN-50°-Wで、桁行の柱間距離は真芯距離（以下、建物および柱間の寸法についてはすべて同じ）で1.40～1.50m前後である。柱穴は掘り方不整円形ないし梢円形であるが大きさはまちまちで、最大で40cm、最小で30cmである。柱穴の深さも20～25cmと浅く、直径15cmの円形の柱痕跡を確認した。遺物は柱穴内から弥生土器の小片が出土したが、時期を特定するまでには至らなかった。

SB02（第8図下）

SB01のすぐ南東側で検出した建物跡で、建物の軸方向もSB01に近いN-61°-Wに向いている。



第7図 A・C区遺構配置図



第7図のb

桁行2間(2.80m)×梁間1間(2.10m)で、桁行の柱間距離は1.25～1.55mである。柱穴は掘り方不整円形で、直径25～40cm、深さは15～20cmである。南西隅の柱穴が土坑SK05に切られているほか、他の柱穴から弥生土器小片が出土している。

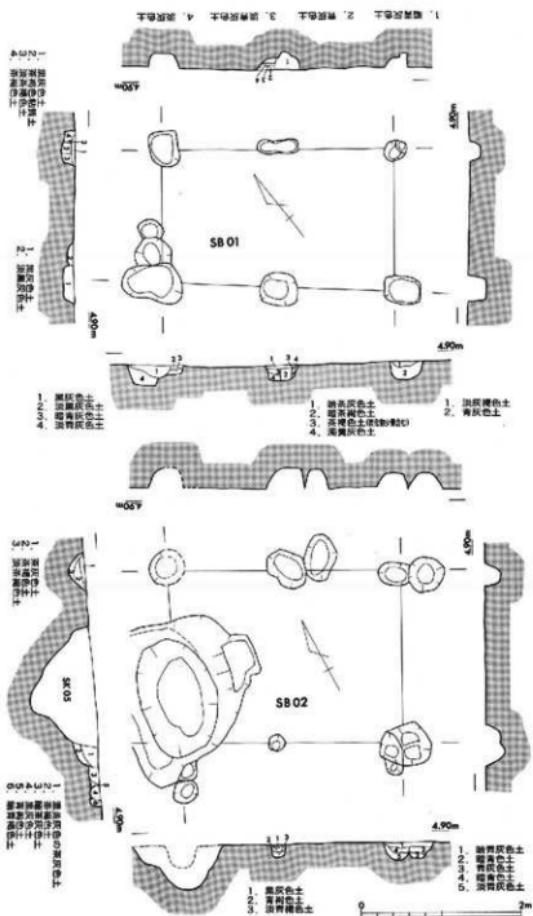
SB03(第9図上、図版3-1)

SB03はSB01の東側で検出した桁行2間(3.10m)×梁間1間(1.75m)の建物跡である。建物の軸方向はN-33°-Wで、桁行の柱間距離は1.80～1.30mである。柱穴は掘り方不整円形で、直径は最大で55cm、最小で35cm、柱穴の深さは20cm前後である。

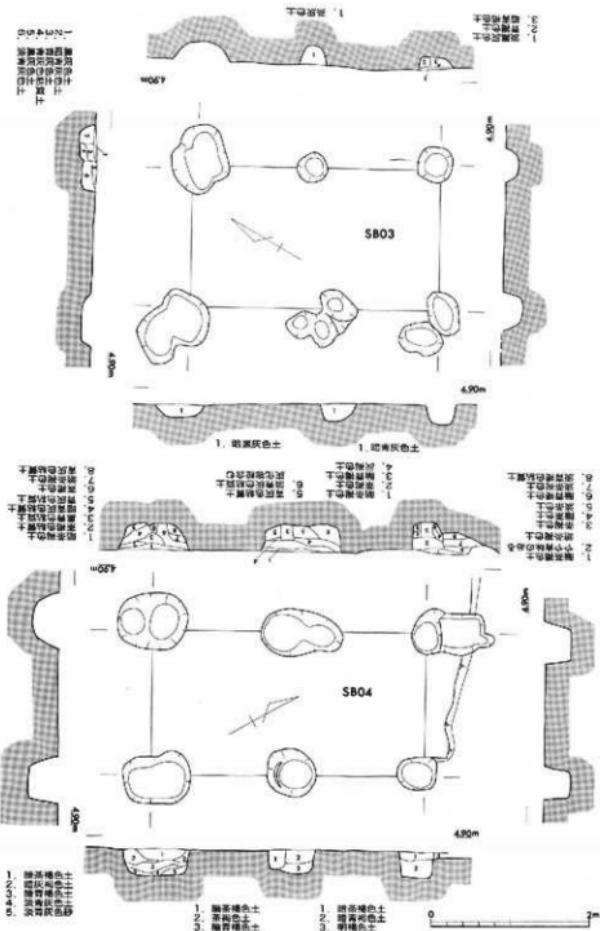
第12図5は南東隅の柱穴から出土した壺形土器で、口縁が大きく外反しながら立ち上がる。ほぼ草田4期に併行すると考えられる。

SB04(第9図下、図版4-2)

AN区北東端で検出した桁行2間(3.40m)×梁間1間(1.80m)の建物跡で、北側の柱穴がかろうじて調査区内に収まっていた。建物の長軸方向はN-31°-Eで、これまでの建物跡とは軸方向が直交する形になっている。ほぼ同じ位置で一度建て直しを行っており、柱穴はどちらも直径45～55cmの掘り方円形の穴である。柱穴の深さは35cm前後としっかりしているが、土層断面でみると柱の太さは約15cmでその他の建物と比べて大差ない。柱穴が重なってはいるものの配列から桁行の柱



第8図 SB01・02実測図



第9図 SB03・04実測図

間距離が推定可能で、二棟の各辺とも1.70mと均一である。

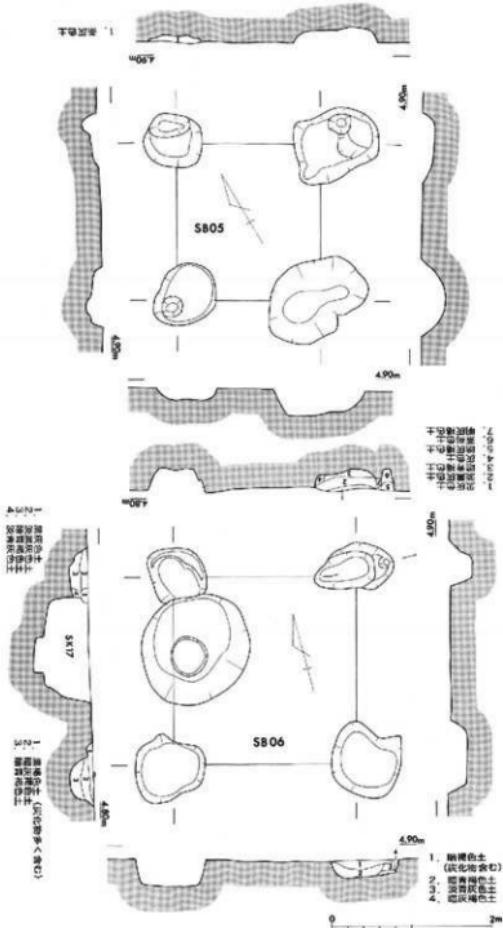
柱穴内から弥生土器の小片が多く出土しているが、図化できたのはわずか2点である。第12図1・3はともに壺形土器の口縁部で、口縁端部の文様帶を幅広く作り出し、1は平行沈線文、3は擬四線文で表面を飾る。3は弥生時代後期初頭の土器で、最近の土器編年では門生黒谷Ⅲ遺跡の門生Ⅰ期新段階に相当すると思われる。1はいわゆる九重式土器ないしそれよりも若干古い形態を示す土器である。

SB05 (第10図上、図版
3-3)

A区中央部で検出した
1間×1間の建物跡で、
柱間距離は1.80m×1.95
mである。同じ位置で一
度建て直しを行ったよう
で柱穴が重なった状態で
検出されている。穴の直
径は60cmから80cmであ
るが、西側の2個は深さ
10~15cmでかなり浅い。
遺物は土器片が少量含ま
れていた。

SB06 (第10図下)

AN区西半で検出した
1間×1間の建物跡であ
る。柱間距離は2.30m×
2.30mで、各々の柱穴が
掘り直されていることか
らここでも同じ位置で一
度建て直しを行ったこと
が考えられる。柱穴の大
きさは直径50~70cm、
深さは約30cmである。
若干土器片を含んでお
り、第12図6は脚付の
壺の脚部である。図中の
SK17から出土した土器
よりも時期的に古い可
能性が強く、もしそうなら
ばこの建物がSK17と異

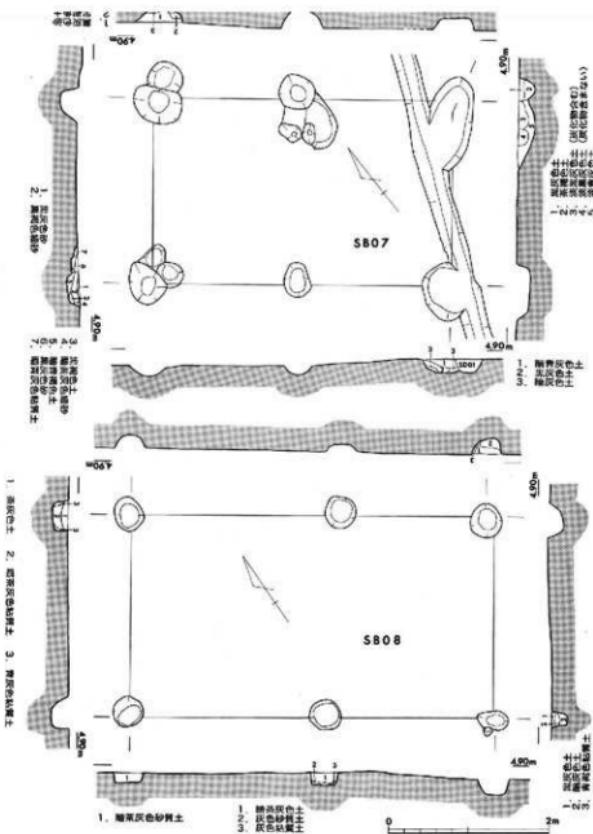


第10図 SB05・06実測図

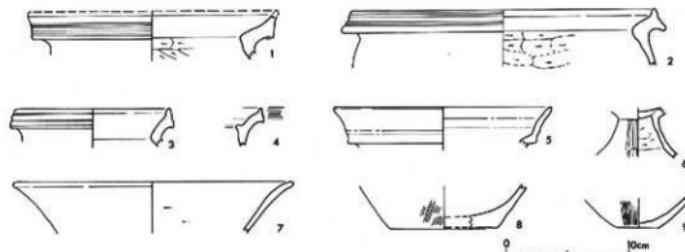
なった時に営まれたと判断されるが、図でも明らかなように建物の内側にSK17の井戸枠が収まっていることから、SK17との密接な関係も推定され、あるいはこの建物が井戸にかけた覆屋のよ
うなものであった可能性もある。

SB07 (第11図上)

A区北半で検出した桁行2間(3.70m)×梁間1間(2.30m)の建物跡で、長軸方向はN-50° - Wである。桁行の柱間距離は1.80m~2.00mで、柱穴の大きさは直径が40cmから60cm、深さは20cm



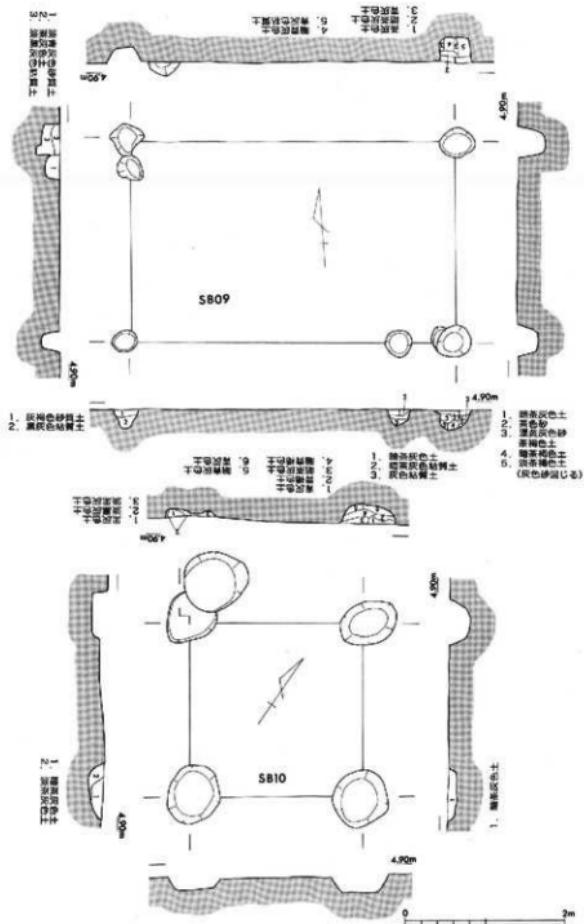
第11図 SB07・08実測図



第12図 据立柱建物跡出土土器実測図 (SB03:5, SB04:1-3, SB06:6, SB07:7, SB10:2-8, SB15:9, SB16:4)

から25cmである。第12図7は西隅の柱穴から出土した鼓形器台の受け部口縁部片で、復元口縁径25.2cmを測り、外表面はヨコナデ調整のみである。

第7図でみるように、土坑のSK06が建物内にちょうど取まるように検出されており、SB06の論法でいえばこのSB07とSK06も密接な関係があるということになるが、その場合の遺構の性格は定かでない。



第13図 SB09・10実測図

SB08 (第11図下、図版3-3)

A区中央SB05の西側で検出した桁行2間(4.50m)×梁間1間(2.50m)の建物跡で、長軸方向はN-54°-Wである。桁行の柱間距離は1.90m~2.40mで、柱穴の大きさは直径が40cm前後、深さは20cm前後である。桁行中央の柱穴が二辺とも南東側に寄っている。

SB09 (第13図上)

SB08に重複する1間×1間の建物跡である。長辺の柱間距離は4.00m、短边は2.50mである。SB08に近い大きさであるが桁行中央の柱穴がない。やや強引すぎる嫌いもあるがここでは一応1間×1間の建物跡としておく。長軸方向はN-86°-Wである。

SB10 (第13図下)

A区北半SB02に重なる形で検出した1間(2.15m)×1間(2.15m)の建物跡で、柱穴の大きさは直径が60~70cm前後、深さは10~30cmである。建物の南東辺とすぐ東側のSD03が平行していることから、何らかの関係が推定されるが、雨落ち溝とかではなさそうである。

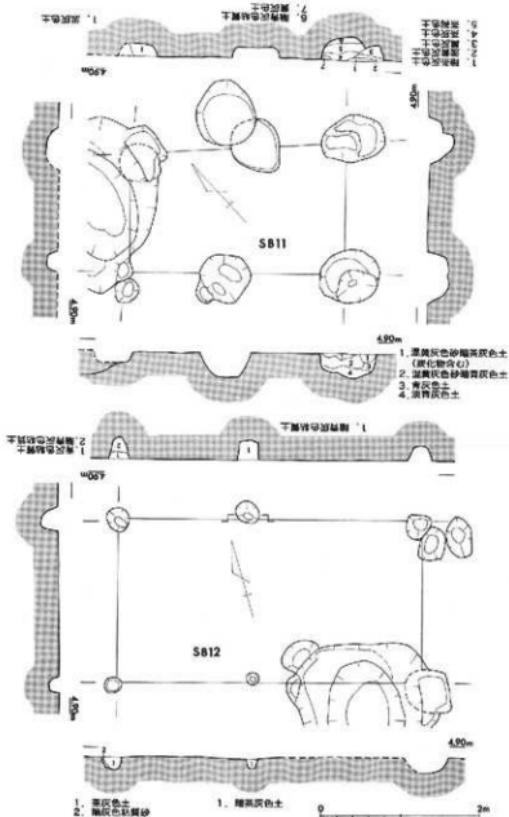
柱穴内から弥生土器片が出土している(第12図2・8)。2は後期初頭の壘形土器口縁部で、口縁端部に凹線文を施す。8は2と同一固体ではないが壘形土器の底部片である。

SB11 (第14図上、図版3-2)

同じくA区北半SB02に重なる形で検出した建物跡で、桁行2間(2.70m)×梁間1間(1.50~1.60m)、長軸方向N-46°-Wの小形建物である。柱穴の大きさは直径50cmから60cm、深さは20cmから30cmである。桁行南辺中央の柱穴には直径15cmの柱根が残存していた(図版4-1)。

SB12 (第14図下)

A区北半のSB01とSB02の

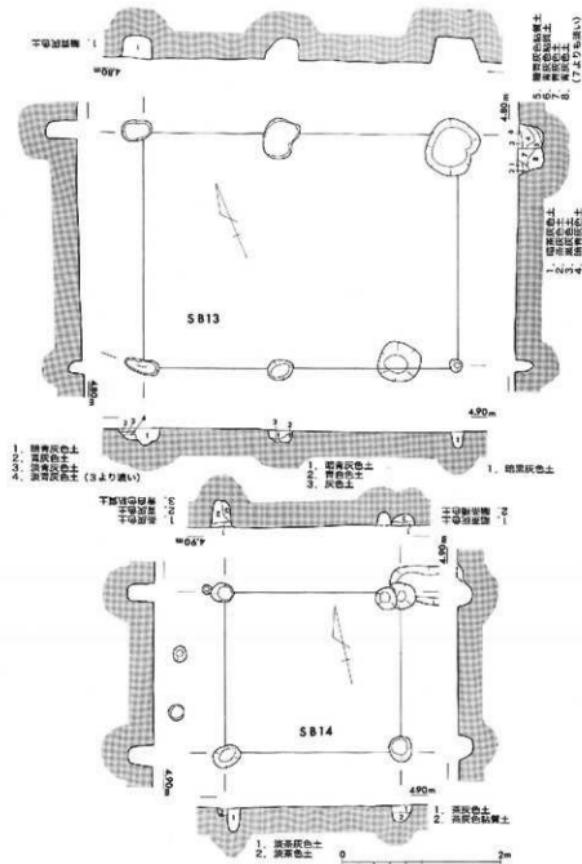


第14図 SB11・12実測図

間で検出した建物跡で、桁行2間(3.80m)×梁間1間(2.00m)である。長軸方向はN-74°-Wを指す。柱穴は小さいものが多く、直径20cmから30cm、深さは15cmから25cmである。

SB13(第15図上、図版3-1)

A区北端で検出した桁行2間(3.90m)×梁間1間(2.60m)の建物跡で、長軸方向はN-66°-Wである。桁行の柱間距離は1.70mと2.20mで、柱穴の大きさは直径が40cm～60cm、深さは20cm前後である。桁行南辺の柱穴に極めて小さいものがあるが、これは柱痕跡そのもので柱穴の掘り方自体を検出できていないことも考えられる。いずれの柱穴からも土器片が少量ずつ出土している。



第15図 SB13・14実測図

SB14 (第15図下)

A区中央付近で検出した1間(2.00m)×1間(2.10m)の建物跡である。柱穴は直径が20~30cmと小さいが、深さが25~30cmあり、しっかりしたものである。すぐ西側に柵列と思われるSA01・02が並んでいる。

SB15 (第16図上)

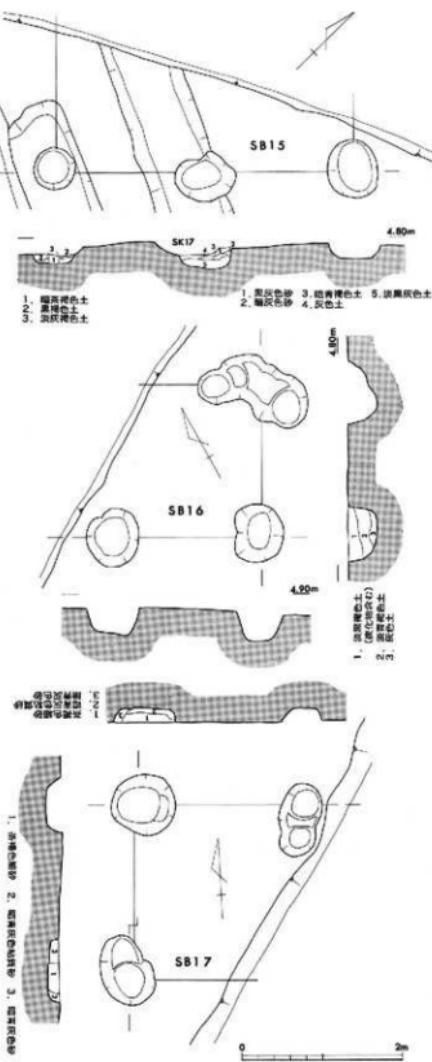
AN区西端で検出した3個の柱穴列で、桁行2間(3.70m)×梁間1間の建物跡になると思われる。軸方向はN-44°-EでSB04の向きに近い。柱間距離は1.80m前後で、柱穴の大きさは直径が50cm~60cm、深さは20cm前後である。西端の柱穴断面でみるとかぎり、柱の太さは15cmに満たない。東端の柱穴から出土した土器の底部(第12図9)は平坦面がしっかりと作り出されており、弥生時代後期後半の特徴をもつている。

SB16 (第16図中、図版4-3)

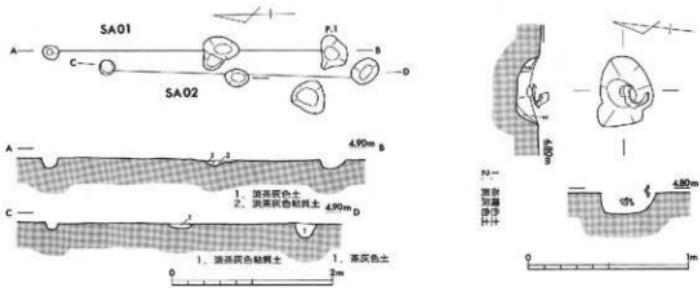
AN区北端で検出した3個の柱穴列で、1間×1間しか確認できていないが桁行2間×梁間1間の建物跡になると思われる。桁行の方向が北西に伸びれば軸方向はN-61°-Wとなり、北東に伸びればN-29°-EでSB04とはほぼ同じ向きに建てられた建物ということになる。柱間距離は1.80m前後で、柱穴の大きさは直径が50cm~60cm、深さは30~40cmである。第12図4は柱穴内から出土した壺形土器で、口縁端部に3条の凹線文を施し、内面には幅4mm突帯を貼り付けている。かなりの小片でこの突帯が蓋の受け部になるのか、文様として施されたものなのか定かでないが、興味深い資料である。

SB17 (第16図下)

C区東端で検出した3個の柱穴列



第16図 SB15・16・17実測図

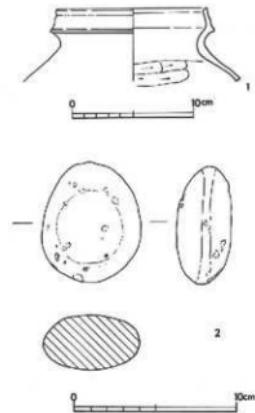


第17図 SA01・02並びにP1遺物出土状況実測図

で、1間×1間分しか確認できていないが桁行2間×梁間1間の建物跡になると思われる。桁行の方向が東に伸びれば軸方向はN-82°-Wとなり、ほぼ東西方向に向いた建物ということができる。柱間距離は2.00mと2.20mで、柱穴の大きさは直径が50cm~70cm、深さは20cm前後である。C区ではピットの検出量も少なく、建物跡として組めるのはこれだけである。基盤層のレベルがC区に向かって下がっていることを考え合わせると、姫原西遺跡のこの時期の集落の東限はこのあたりかもしれない。

②柵列遺構(第17図)

A区中央部で検出した各々3個の柱穴列二列で、東側をSA01、西側をSA02とした。どちらも、3個の柱穴が一直線に並ぶが、周辺に建物跡として組めそうな柱穴がないものである。ただし、周辺の建物跡の軸方向とは向きが若干異なるつており、必ずしも断定はできない。SA01南端のP1から土器と蔽石状の石器が出土している(第18図、図版5-2・3)。ピットの底面からやや浮いた状態で石器の横に上器を逆さまにして並べており、地鎮のような祭祀を行ったものと推定される。土器は複合口縁の立ち上がりが内傾し、口縁外面をヨコナデ調整のみで済ませたものであるが、外表面の一部に赤茶色の部分が残っており、丹塗り土器の可能性がある。後期後半のいわゆる的場式併行の土器にこれに似た口縁形態をもつものもあるが、もしろ当遺跡のSK19などから出土した壺形土器に最も近いものがあり、古墳時代初頭、最近の型式名でいえば草田6~7期に相当する時期と考えたほうがよきようである。蔽石状石器は長径7.2cm、短径6.0cm、厚さ3.4cmの偏平な川原石を利用したものだが、表面全体が滑らかで特に明瞭な擦痕や敲打痕は観察されない。しかし、後出の井戸廢棄に伴う祭祀のように、蔽石を使った祭祀の存在が明らかであることから、この蔽石状石器も祭祀具として使用された可能性が強い。SA02はSA01に近接しており、どちらが先行するものか判断できないが、間を置かず続けて作られたと考えるのが妥当であろう。



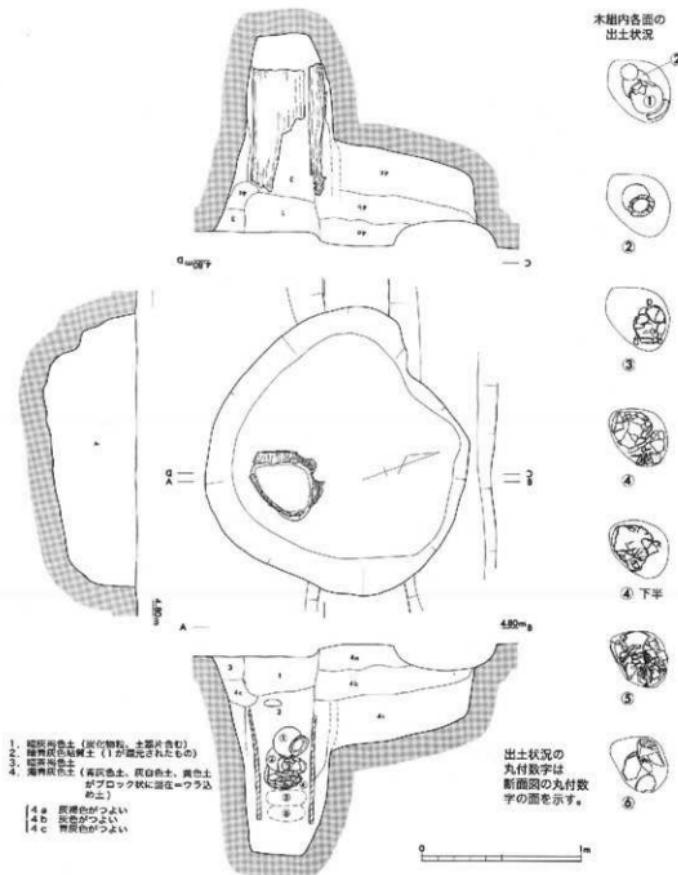
第18図 SA01内P1出土遺物実測図

③井戸跡

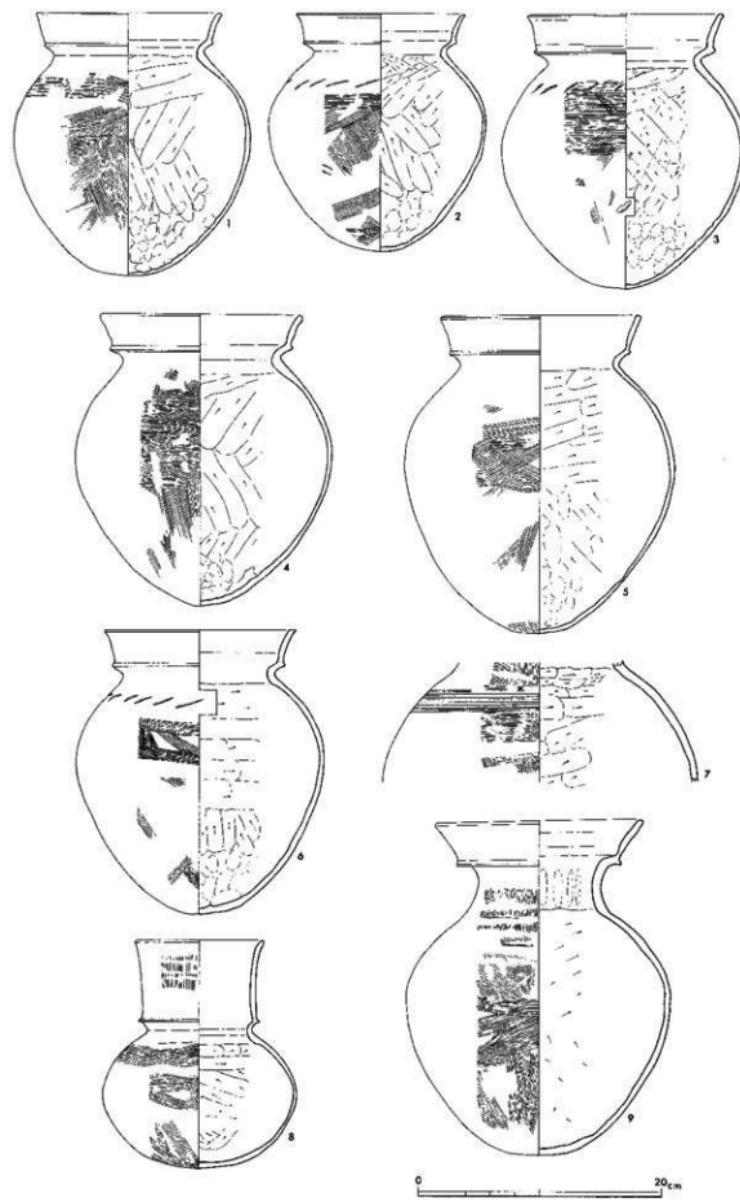
SK11 (第19図、図版6~8)

AN区の南西端で検出した井戸跡で、掘り方は円形の二段掘りである。最初直径1.50m、深さ60cm以上の円形の穴を掘ったのち、そこを足場にして南隅にさらに直径50cm程度の穴をもう一段深く掘り込んだものと考えられる。木組みは厚さ4~5cmの板材を5~6枚組み合わせたもので、真上からみた形状はおむすび形をしている。板材の上半は朽ちて徐々に薄くなってしまっており、現存高は約70cmである。

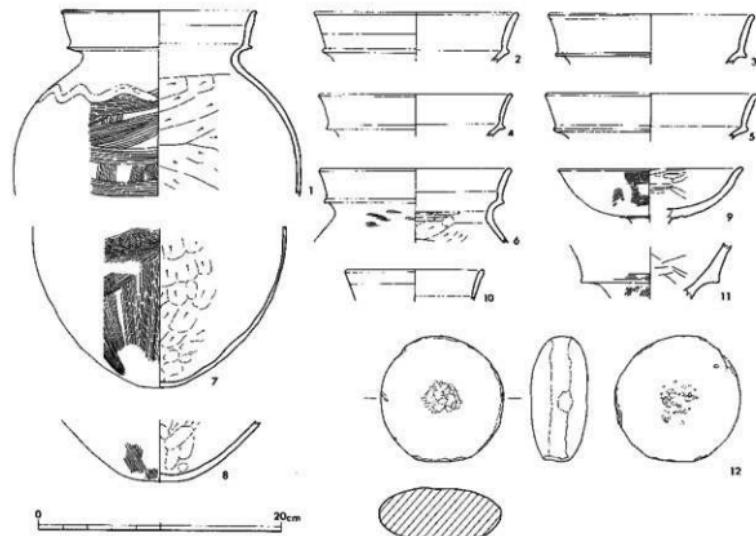
木組み内部には、最下部に破碎された土器片が約20cmの厚さにわたって堆積し、その上に井戸



第19図 SK11及び木組内遺物出土状況実測図



第20図 SK11出土上遺物実測図(1)



第21図 SK11出土遺物実測図(2)

廃棄の際に完形のまま認められたと考えられる土器が重なって出土した。破碎土器層は正確には木組みの底面よりも下に堆積しており、この部分は現在でも湧水が著しく、土器片は砂や水と一緒にほとんど手探りで掬い上げるといった状況である。完形の土器は少なくとも8個（第20図1～6・8・9）あり、上端の2個（第19図①・②）は出土時点でもほぼ完形を保っており、③以下は土圧によって押しつぶされた状態で出土した。①土器から④土器の出土状況を見る限り、土器は基本的に下から順番に各々底部を下に、口縁となるべく上にして置かれていたことが推定される。土器の最上部からさきに約15cm上のところでは蔽石が1点出土した。

第20図1～6は井戸祭祀に使用された完形の壺形土器で、同図8・9は同時に埋められた壺形土器である。壺形土器は、かなり煮炊きに使用したような煤状炭化物の付着が顕著なものばかりである。その形状は複合口縁の立ち上がりが若干外反気味に開き、口縁端部は1や4のように丸みを持つものもあるが、基本的に上面に平坦面を作り出すものが多い。口縁部外面下端の突起は厚く明瞭に作り出し、口縁内外面はヨコナデ調整を行う。胴部は基本的に倒卵形を呈し、底部はほんのわずか半らな部分がある程度である。外面下半から底部にかけてが縦方向の刷毛目調整、中央の張った部分には横方向の刷毛目調整、頸部から肩部にかけては縦ないし斜め方向の刷毛目調整を施す。肩部には1のように櫛描または貝殻腹縁による平行沈線文や波状文を施したり、2・3・6のように刷毛目原体の小口を使って刺突を施したりする。また、刺突文の上下あたりを刷毛で横方向に刷毛目痕をつける場合も多い。胴部内面は底部あたりはナデ調整が顕著で指頭圧痕が明瞭に残る。下半から上はヘラケズリで、土器を回しながら斜めに搔きあげて、最後は頸部を横方向に削っている。3には胴部下半に焼成後外面から穿孔したと思われる小さな穴が認められる。

8は小形の直口壺で、頸部のくびれが小さく、立ち上がりが著しく長い。胸部は球形で肩部に貝殻腹縁による波状文を三重に巡らしている。9の壺形土器は基本的に壺形土器と同じ作りで、顕著な違いは頸部の長さだけである。

第20図7、第21図1~11は木組みの底に破碎されて溜まっていた土器である。第20図7は壺形土器の頸部から肩部にかけての破片で、肩部に平行沈線文が施されている。第21図1~8は壺形土器片で、1は口縁端部をわずかに平坦に作り出しているが、その他はいずれも丸みのある端部で複合口縁下端部の突出も小さかたり弱かったりするものが多く、第20図の壺形土器類よりも古い形態を残しているものが多い。

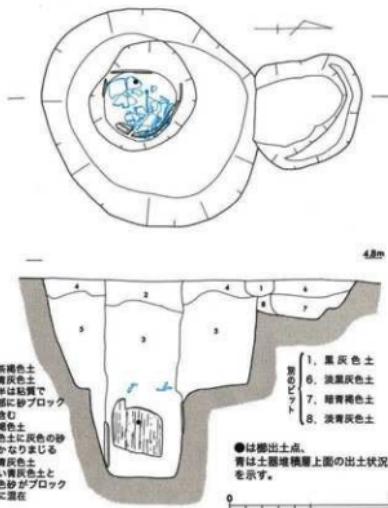
1の肩部には文様を意識したと思われる波状のナデ調整が加えられている。9は楕円形の高环の坏部、10は広口壺の口縁部である。11鼓形器台の受け部で内面にはヘラ磨きが施されている。12は直径10.3cm、厚さ4.5cmの敲石で現重量725gを計る。周縁は敲打の痕跡が顕著で幅1.3cm前後の平坦面ができるがっている。また、両面ともに中央部に敲打による凹面もできている。

SK17(第22図、図版10・11-1)

A区SK11の北側で検出した井戸跡で、掘り方は円形の二段掘りである。一段目は長径1.45m、短径1.25mの梢円形で、深さは約70cmである。二段目は直径50~60cm、深さ55cmの円筒形の掘り込みで、その中に真上からみて直径約45cmの井戸枠の痕跡が観察された。遺構検出面から井戸の底までは現存で1.20mである。井戸枠の木組みは厚さ3~4cmの板材を下段の掘り方に沿ってぐるり巡らしたもので、壁に張りつくように朽ちてやせ細った板が5枚ほど残っていた。第22図でみると木組み内の中央のレベルから土器片の堆積が認められ、井戸の底面まで絶えることなく続いている。底面から約30cm上のあたりでは竹ひご状の薄皮を結束して作った湾曲結歯式縦櫛片も出土した(第22図中の●点)。

木組み内の土器堆積層の上面には2個体分の土器が固まっており、ここでもSK11のように井戸を廃棄する際に完形の土器を木組み内に入れて一緒に埋めたことがわかる。第23図1・2がその土器で、特徴はSK11出土の壺形土器と変わらない。

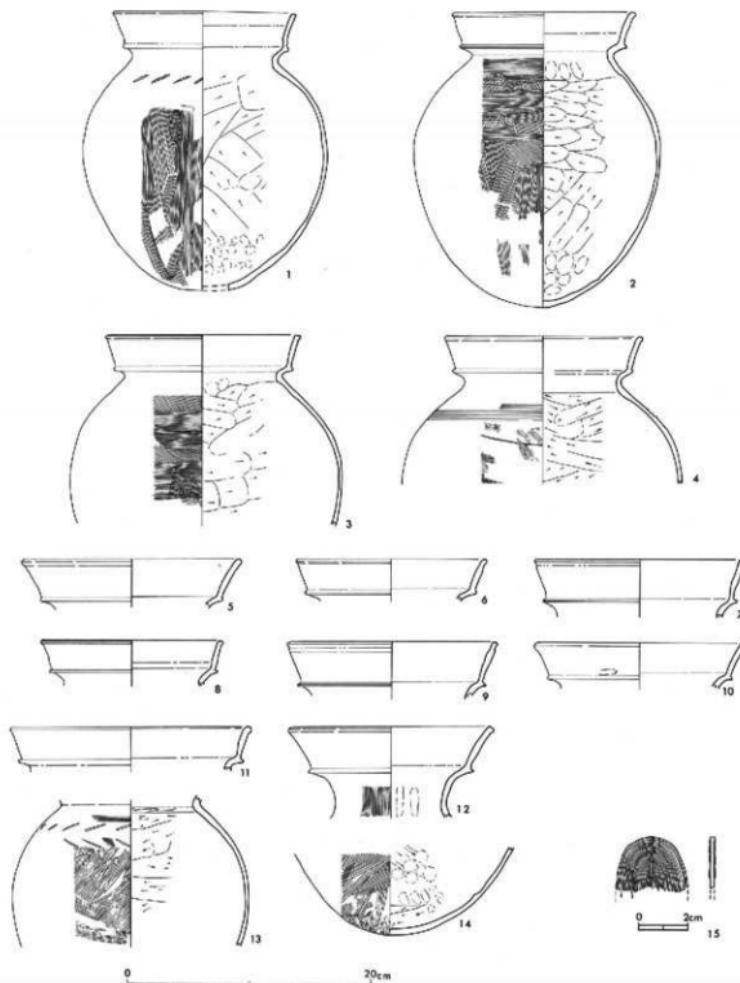
同図3以下がその下に堆積していた土器群で、7・9・12が壺形土器、その他が壺形土器である。いずれも複合口縁の立ち上がりが比較的大きく外に開き、3・7・9・10はこう円端部に平坦面が認められる。口縁外面下端部の突起も三角形に鋭く尖ったものが多い。13の肩部には刷毛目原体を



第22図 SK17実測図

刺突した羽状文が施されるが、途中から下段が省略されて上段だけになっている。14の壺形土器底部にはほどんど平らなところがなく、丸底になっている。

15は数枚の竹ひご状の薄皮を細紐で結束して曲げたものを四重、五重に重ねていったもので、湾曲部分を縛った横帶は残っておらず、現存長2.4cm、最大幅3.0cm、厚さ1.5mmである。全体に黒色を呈しており、黒漆がかけられているものと推定される。



第23図 SK17出土遺物実測図

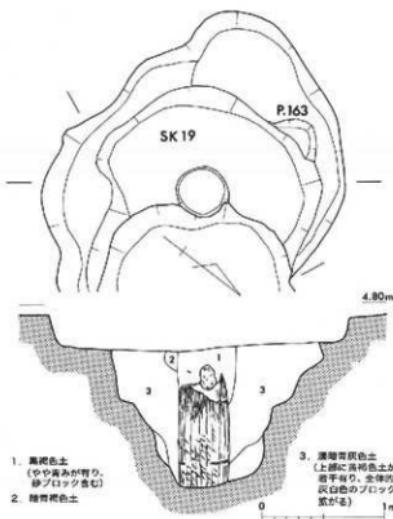
SK19 (第24~26図、図版11-2~12)

AN区南西隅で発見した井戸跡である。北東側を中世の土坑SK10によって大きく切られているが、井戸枠の木組みは壊されずに残っていた。また、南東側にも別の土坑が重なっているようであったが、識別できなかった。

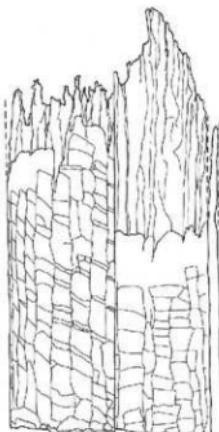
この井戸跡の掘り方は上述の2基の井戸よりも作りが大掛かりで、まず直径2.5mの大きさで深さ50cmまで不正円形に掘り込み、その底面中央付近をさらに直径1.75mの範囲で逆円錐形上に掘り込んでいる。この逆円錐形の掘り込みの中央に半円形とそれに近い状態に削り貫いた部材と、やや幅狭のもの、三枚をうまく円形になるように繋ぎ、円筒形の井筒を作り出し、外側に幅5mmから1cm、厚さ3mmないし4mmの竹製のタガを二周半巡らして固定している。竹製のタガは調査中に次々と折れてしまったが、削り貫き部材は底部付近で厚さが5cmもある分厚いもので、現存高も90cm近い立派なものであった。部材の表面には木目の方向に手斧の削り痕が明顯に残っており、当時の人々がバランスよく、しかも丁寧に加工した様子が窺える。

木組みの据え付けが終った後は、逆円錐形の掘り込みはすべて裏込め上で埋め戻されたと考えられるが、最初の一段目の掘り込みに溜まった土と裏込め土の土質が異なることから、埋め戻しは一段目の底面までであったと思われる。

木組み内部には、現存する木組みの上端よりも高い位置から三瓶山の石英安山岩でできた石皿様の石器が出土



第24図 SK19実測図



第25図 SK19木組実測図

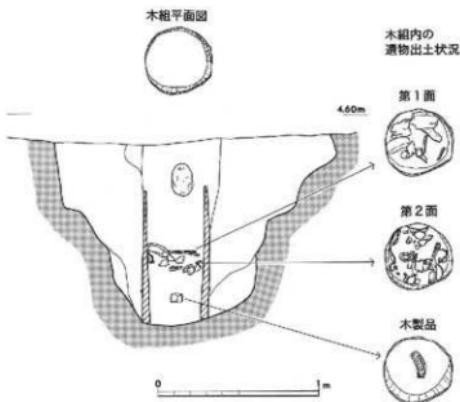
した（第24図）ほか、木組みの中位から下で木片や土器、木製品等が出土した（第26図）。特に第26図中の第2面以下では土器の破片が幾重にも重なり、また、木組みの表面に貼り合わせるかのようにびっしりと密に詰め込んだような状況が見て取れた。なお、石皿様石器の上部や石器から木組み中位までにはその他の遺物は全く含まれていなかった。

第29図はその石皿様の石器で、全長26.0cm、幅22.0cm、

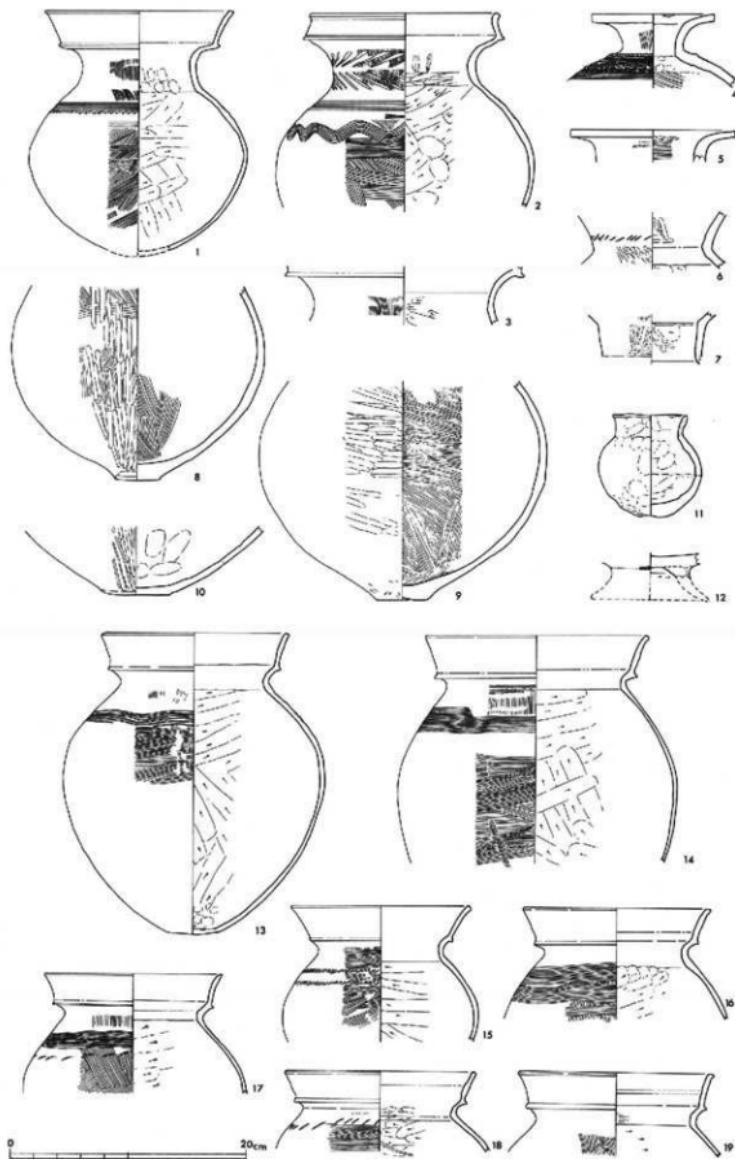
最大厚13.0cmを測る。平坦になったほうの面には中央に摩耗して平滑になった部分があり、もう一方の面にも尖ったところに敲打の痕跡が多数残っている。三瓶山の石英安山岩でできているため、非常にもりいが、井戸祭祀に使用され、最後に埋められたものと考えられる。第28図14はもう1点出土した石器で、こちらは敲石として使用されたものである。全長13.9cm、重さ960.5gで若干重さを感じる大型品である。一方の端面は火を受けて黒く変色している。

第1面や第2面で出土した木片には明らかな製品は含まれておらず、板材片や小さな角材など用途の不明なものばかりであった。しかし、そこから20cmばかり下から出土した木製品（第28図15）はちょっと変わった形をしたものである。ちょうど大きなバームクーヘンを八等分したような形で、側面の一方が弧状に湾曲し、反対側の側面も同じ方向でやや内反りにカーブを描いている。上下両端は円の中心に向かうように両側面に対して斜めになっており、全長18.2cm、最大幅7.2cm、厚さ5cmを測るが、短いほうの側縁の長さは15.0cmである。バームクーヘン形の平面の中央には台形の大きな穴が開けられているが、片方の面から開けられたこの穴の側縁はすべて直線的である。外面の加工は極めて丁寧で、その形状から車輪や滑車のような輪状に組み合わせて使う製品の部材の可能性があるが、用途は全く不明である。

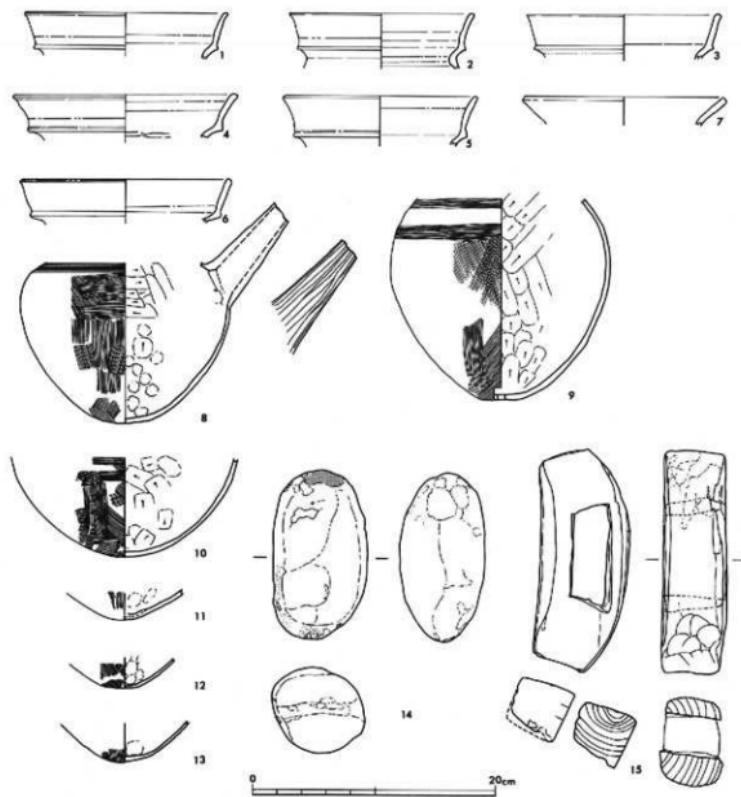
出土した土器類は上述したようにすべて破片で堆積していたものである。第27図1～9は壺形土器で、1は口面上でほぼ完全に復元できるものである。口縁の立ち上がりが長く、それに比べて肩部の径や丈が短いため、ややす詰まりな感じを受けるが、全体的には非常に精練された感じの土器である。肩部に貝殻腹縁による平行沈線文と刺突文が施されている。2は前のSA01のP1で出土した土器のように、複合口縁の立ち上がりが内傾するものである。立ち上がり内外面ともにヨコナデ調整で、端部を短く外側に折り曲げる。外面下端の突起との境には沈線状の強いナデがはいり、突起部の突出を際立たせている。頸部には縦方向の刷毛目調整後、刷毛目原体による羽状文が施されており、肩部には貝殻による平行沈線文と波状文がはいる。4・5は口縁が短く大きく外反する壺形土器で、4には頸部から肩部にかけて断面三角形の刻目貼付宽带と横描平行沈線文ならびに波



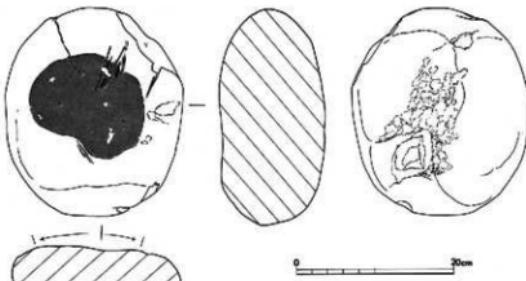
第26図 SK19遺物出土状況実測図



第27図 SK19出土遺物実測図(1)



第28図 SK19出土遺物実測図(2)



網目は表面の摩耗して平滑になっている部分

第29図 SK19出土遺物実測図(3)

状文が施されている。6は近畿系、7は吉備系の壺形土器の可能性がある。8・9は九州系の壺形土器の胸部で球形の胸部に突出した平底がついた特徴のある土器である。内面調整に刷毛目を多用し、外面にはヘラ磨きを施している。11は小形の短頸壺で、全面手捏ねである。13～19および第28図1～7は壺形土器で、複合口縁の立ち上がりが直線的に外反するものが多い。口縁端部は丸みをもつたものもあるが、平坦面を有するものが大半である。8は注口土器で、通有の壺形土器の胸部に注ぎ口を付けたものである。注ぎ口は肩部から天に向かって高く突き立つの特徴で、外面には丁寧なヘラ磨きが施されている。第27図12は低脚壺の底部で井戸内からの出土品はこれが唯一である。

④土坑

SK02 (第30図上段左)

A区北半で確認した円形の土坑で、直径1m、深さ15cmの小形のものである。遺物は出土しなかつたが、ほかの同時期の土坑と同じ堆積土が確認されたことから、弥生時代後期から古墳時代の土坑と考えられる。

SK03 (第30図上段中、図版16-1)

A区中央で検出した土坑で、直径1m、深さ15cmとSK02とほぼ同規模のものである。土坑内の南端で出土した土器は後に掘り込まれたピットに含まれていた可能性が強いが、その時期は井戸跡出土土器と同じと考えられ、そうすると土坑の時期はそれ以前ということになる。

SK05 (第31図上、図版16-2)

A区北半で確認した土坑で平面形は南北に長い不整橢円形を呈しており、長径1.80m、短径1.60mである。いくつもの柱穴が重なっているため、土坑上縁の形状がさらに複雑になっている。深さは約80cmで掘り方は船底状を呈するが、東西両壁面は上半は緩やかに傾斜し、下半が大きく落ち込む。土坑内には上半に茶褐色土、下半に黒褐色の粘質土が堆積し、遺物は上半から土器片が出土している。

第32図1は壺形土器の口縁部、2・3は壺形土器の口縁部である。壺形土器は口縁が直線的に立ち上がり、端部上面に平坦面を作り出す。壺形土器は立ち上がりが内傾するもので、端部はやや薄手になるが、若干平坦面を作り出す。3にも同様の端部成形が認められる。

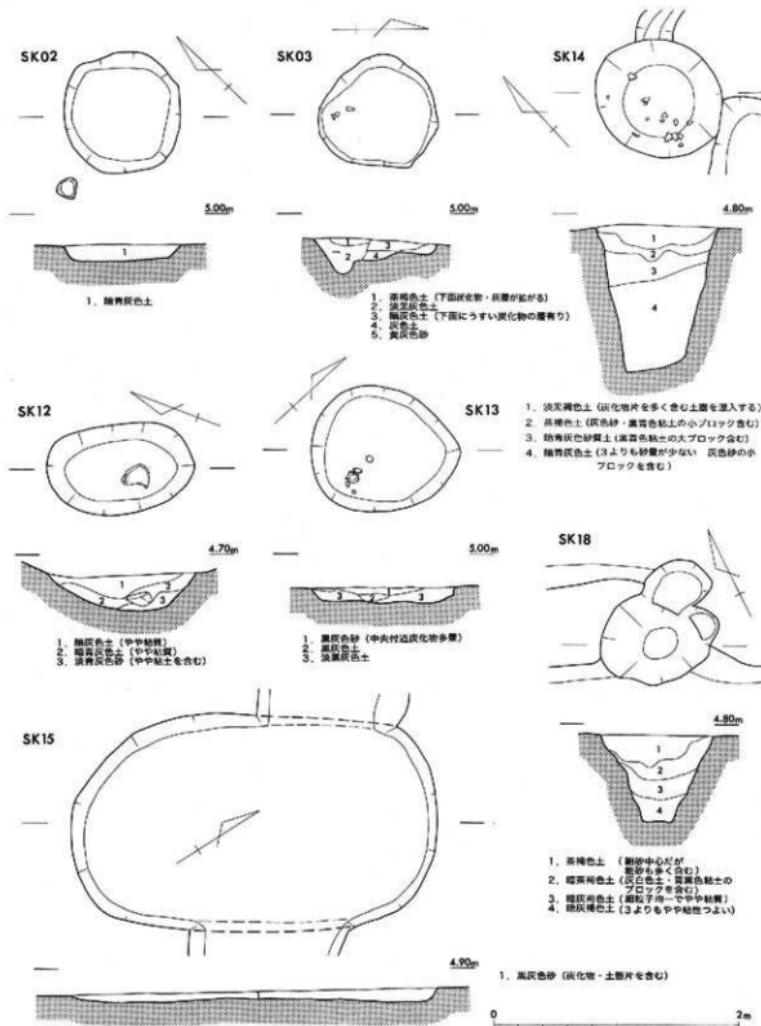
SK06 (第31図下、図版16-3)

A区北半で確認した土坑で平面形は東西に長い不整長方形を呈しており、長さ2.00m、幅1.50mである。まわりにSB07がこの土坑を囲むように存在している。深さは65cmで、緩やかに湾曲しながら底面に至る。土坑内には上半に茶色土、下半に青味を帯びた暗褐色の粘質土が堆積し、第4層、第5層の上面には薄い炭化物層の広がりが観察された。遺構の性格を判断するため、土壤分析を行うべく試料採取を行ったものの、予算の関係で実施できなかった。

図のように第1・2層中から土器片が多数出土した。第32図4は頸部がやや長めの壺形土器で、口縁に大型の貝殻を用いて平行沈線文、肩部に同じ工具による連続押引文を施す。5は口縁がまだ複合化していないもので、端面に凹線文を加えておらず、他のものよりも時期の古い土器である。13は鼓形器台の脚台部で、内面上部は横方向のヘラケズリ、内面裾部と外面はヨコナデである。14は高壺の壺部で、外面には丁寧なヨコナデを施し、内面には横方向の刷毛目調整のち縦方向のヘラ磨きを行っている。

SK12 (第30図中段左、図版17-1)

AN区中央で検出されたが、中世の溝SD20で、上半をカットされていた。現存する土坑は長径1.20m、短径0.75mの長楕円形で、深さは約30cmである。土器小片が若干含まれていたほか、底面からやや上の面で砥石あるいは石皿として使用された河原石（第33図）が出土した。全長24.6cm、幅



第30図 A・AN区弥生時代の土坑実測図(1) SK02・03・12~15・18

21.4cmで一部が割れているが、使用面は、平滑で中央付近には鉄器によると思われる鋭い細線が何条もはいる。使用面を中心に炭化物の付着が著しく、かまど石として使用された可能性もある。
SK13 (第30図中段中)

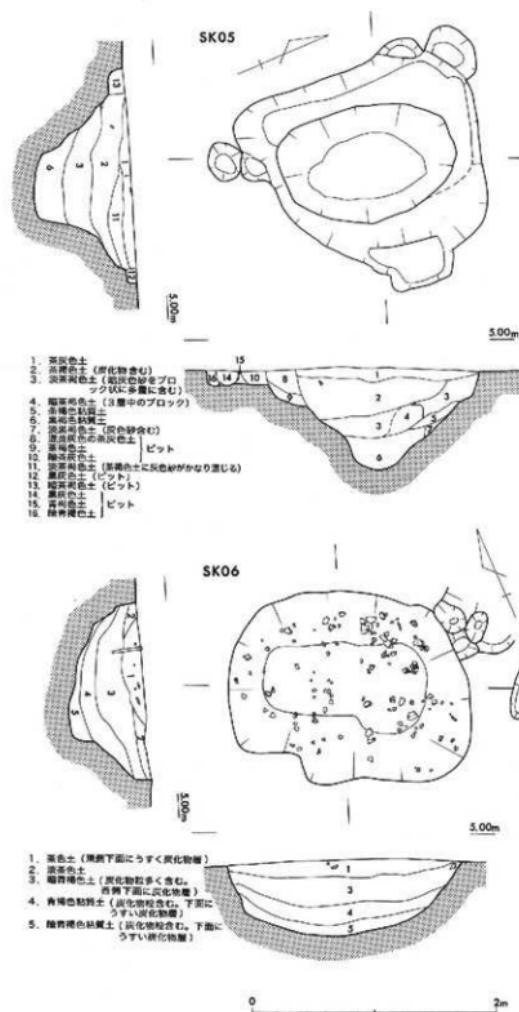
AN区中央で検出した土坑で、直径約1mのほぼ円形に近いものである。深さは15cmに満たない

くらいで、全体に黒灰色土が堆積し、中央付近では炭化物の混入も著しい。出土した土器（第32図15）は蓋と思われる破片で、復元高は4.9cmである。つまみも部体も直線的に開き、復元つまみ径は5.0cm、口縁径は15.0cmである。外面全体に丹が施しており、調整は斜めないし縦方向の刷毛目のち口縁やつまみ部にヨコナデを施す。内面はナデ調整で、天井部は特に指頭圧痕が著しい。

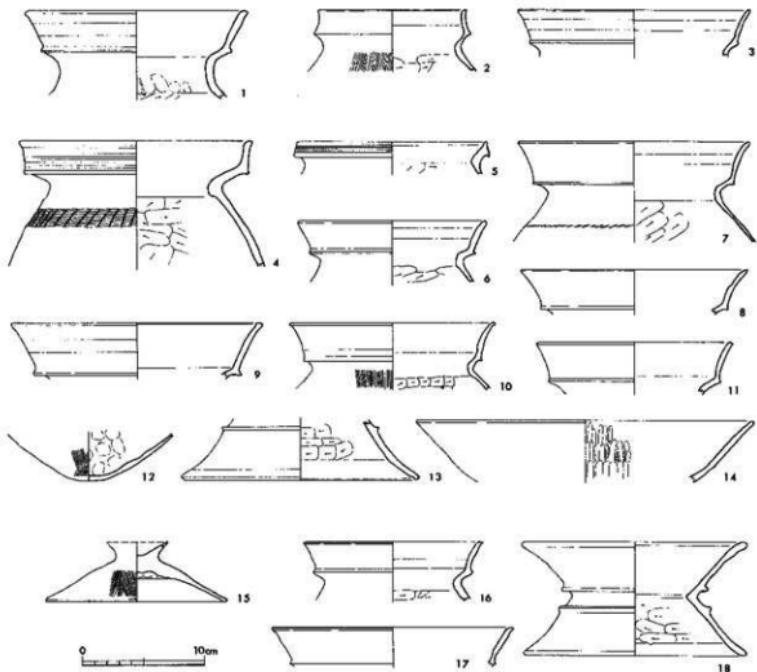
SK14 (第30図上段右、図版17-2)

AN区中央西端で検出した土坑で、平面形は直径約1mのほぼ円形に近いものである。深さは約1.20mで、底面も直径約60cmの円形である。土坑内部には上部に黒褐色土ないし茶褐色土が堆積し、下半には青灰色土が堆積している。

土坑の形状は後出の中世の井戸跡に類似しているが、出土する土器はすべて弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のもの



第31図 A・AN区弥生時代の土坑実測図(2) SK05・06

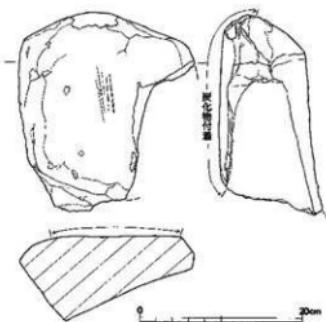


第32図 A・AN区弥生時代の土坑出土遺物実測図(1)

(1~3 : SK05, 4~14 : SK06, 15 : SK13, 16~18 : SK14)

で、少なくとも中世の遺構とは考えにくい。また、底面まで達しないうちに湧水が著しくなるため、井戸跡の可能性も否定できないが、すぐ隣の井戸跡群のように井戸枠の存在が認められないことから、ここでは井戸以外の土坑として扱っておく。

第30図の土器出土状況は第1層中のもので、下層に向かうにつれ、土器の出土量は少なくなる。第32図16~18はいずれも下層出土の土器で、壺形土器類はこれまでみてきたものと同じである。18の鼓形器台は器受部口縁径が18.5cm、脚台底部面径が18.2cm、器高9.3cmである。器受部・脚台部ともに体部は直線的に開き、内面にもほとんど湾曲が認められない。器高が低く、くびれ部の内径が大きい点が特徴的である。



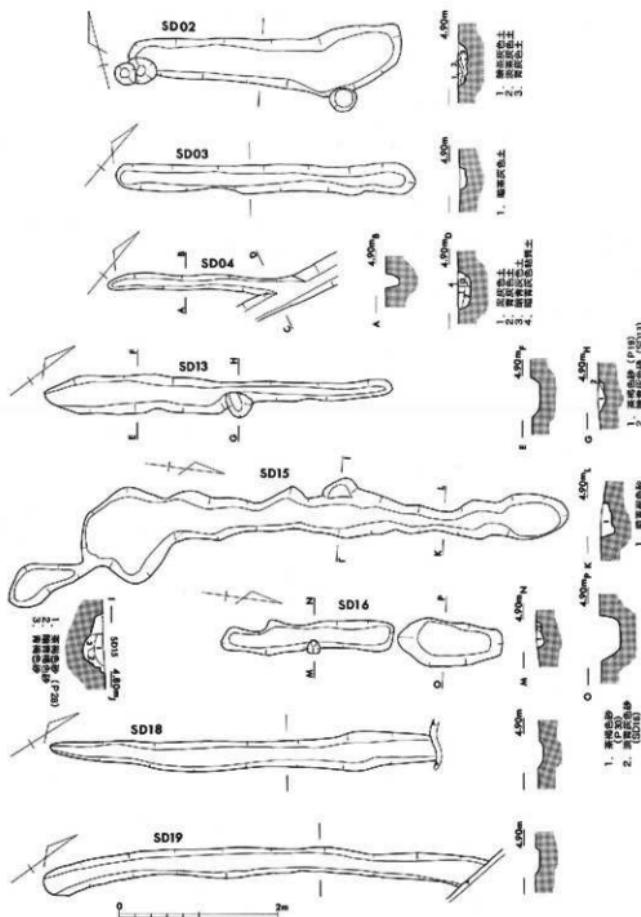
第33図 A・AN区弥生時代の土坑出土遺物実測図(2) (SK12)

SK15 (第30図下段、図版17-3)

AN区中央のSK12とSK13の間で発見した土坑で、長径3m、短径1.8mの長楕円形を呈するが、残存部が極めて浅く、土壤墓の可能性もあるが正確には用途不明である。遺物は土器小片を多く含むのみである。

SK18 (第30図中段右)

AN区南端で検出した直径約80cmの円形の土坑で、掘り方は逆円錐台形を呈する。内部には茶褐色土と灰褐色土が堆積しており、土器小片が少量出土するのみで、性格は不明である。



第34図 A・AN区弥生時代の溝状遺構実測図 (SD02~04・13・15・16・18・19)

⑤溝状遺構

SD02 (第34図)

A区北半で確認した溝状遺構で、長さは3.4mあり、ほぼ東西方向に向いているが、東端から約1mのところで北に若干折れ曲がっている。幅は50~70cmで土器を若干含んでいる。周辺の建物跡の軸方向とも合わないが、東隣のSD03に続いていく可能性もある。

SD03 (第34図)

建物跡SB10に隣接し、建物跡の雨落ち溝の可能性のある溝である。全長3.7mで、幅は30cm前後でどこも均一である。内部には茶灰色土が堆積し、土器の細片が少々含まれている。

SD04 (第34図)

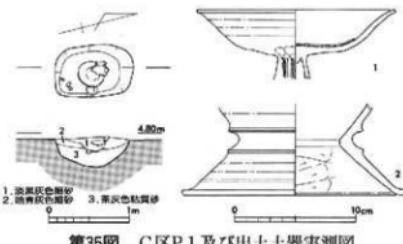
SD03の南側に位置し、SD03とほとんど方向を一にする溝である。現存幅は20cmと細く、長さは約2.4mである。東側がSD01とつながって検出されたが、同溝とは直接関係はない。むしろ、平行に並んでいるSD03との関係が強いように思われるが、性格は定かでない。

SD13 (第34図)

C区北半で検出した溝状遺構で、全長は4.3mである。東側半分は幅20cm、深さ10cm弱であるが、中央付近で幅広くなるとともに、深さも10cmを超える。内部に堆積するのは青灰色の砂で、前述のA区の溝とは様相が異なっている。遺物は出土していない。

SD15・16 (第34図)

C区南半で検出した溝で、2本が平行に走っており、SD15は全長約7m、SD16は全長約3.5mである。2本の溝の間隔は約2mである。軟弱な青灰色砂の基盤層の上に形成された溝のため、底面の凹凸が激しく、溝幅も場所によって大きく異なっている。図化できるほどの大きな破片はないが、若干弥生土器片が出土している。



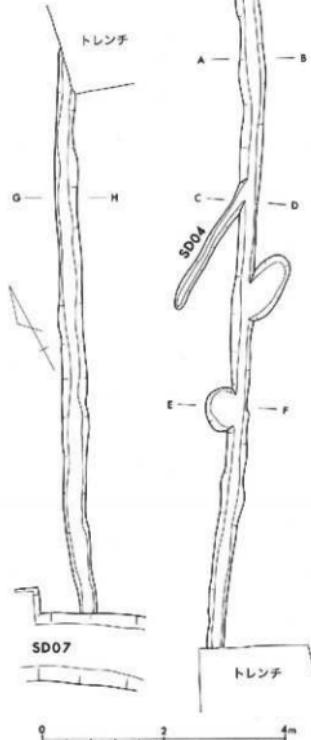
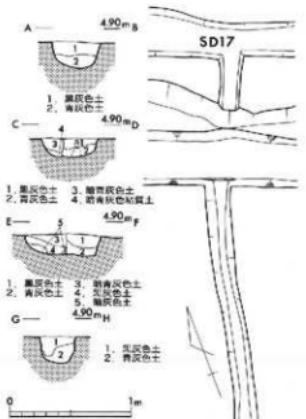
第35図 C区P1及び出土土器実測図

SD18・19 (第34図)

A区北西端で検出した溝で、やはり2本が平行に走っており、SD18は全長約4.8m、SD19は全長約5.5mである。2本の溝の間隔は1.2mから1.5mである。どちらも深さ5~6cmしか残っておらず、含まれていた土器も細片ばかりであった。これら2本並列して走る溝は、調査区内を連続して走っているものではないが、一応道の側溝のようなものと考えられよう。

⑥その他

A~C区には、以上の遺構のほかに建物跡としては組めなかつたものの、弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる多くのピットを確認した。その中で、C区P1では意図的に埋められたと考えられる土器片が出土した(第35図、図版19-1)。土器は高杯(1)と鼓形器台(2)で、両者は重なった状態で出土している。出土状況から判断して、ピット中の茶褐色土の上に脚柱部下半を欠いた高杯を、杯部を上に向けて川原石で支えるようにして正常位におき、杯部の上に器台を載せたものと考えられる。高杯の杯底部には硬く炭化した付着物が認められる。



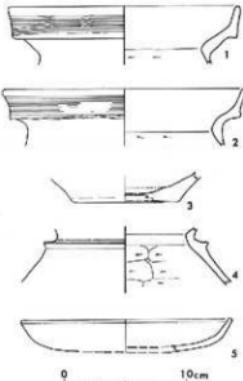
第36図 A区SD01実測図

(2) 奈良時代の遺構・遺物

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構・遺物が中心を占める中で、奈良時代以降の遺構・遺物が若干出土した。奈良時代頃と思われる遺構はA区を南北に走る溝1本のみである。

SD01 (第36図、図版19-3)

A区を南北に貫いて、北端はAN区で東西方向に走るSD17に突き当たって消滅しており、南端はA区南端を東西に走るSD07に突き当たっているが、その手前あたりから徐々に浅くなっている。溝幅は15cmから25cmで、深さは約20cmである。底面のレベルは調査区の中央付近で一旦高くなっているものの、全体的には緩やかながら北から南に向かって傾斜している。溝内には上部に遺物包含層の黒灰色土が流れ込み、下部に青灰色土が堆積していた。第37図はその上層から出土した土器で、1・2は複合口縁の外縁に二枚貝の貝殻腹縁を用いて平行沈線文を巡らせた壺形土器である。口縁の立ち上がりは短く直立するか若干外反する程度である。いわゆる九重式土器の範疇にはいるもので、最近の土器編年で言えば門生Ⅲ期、あるいは塩津1期の時期に相当する。3は、1・2とほぼ同時期の壺形土器の底部で、復元底面径は8.5cmである。4の鼓形器台は脚台の体

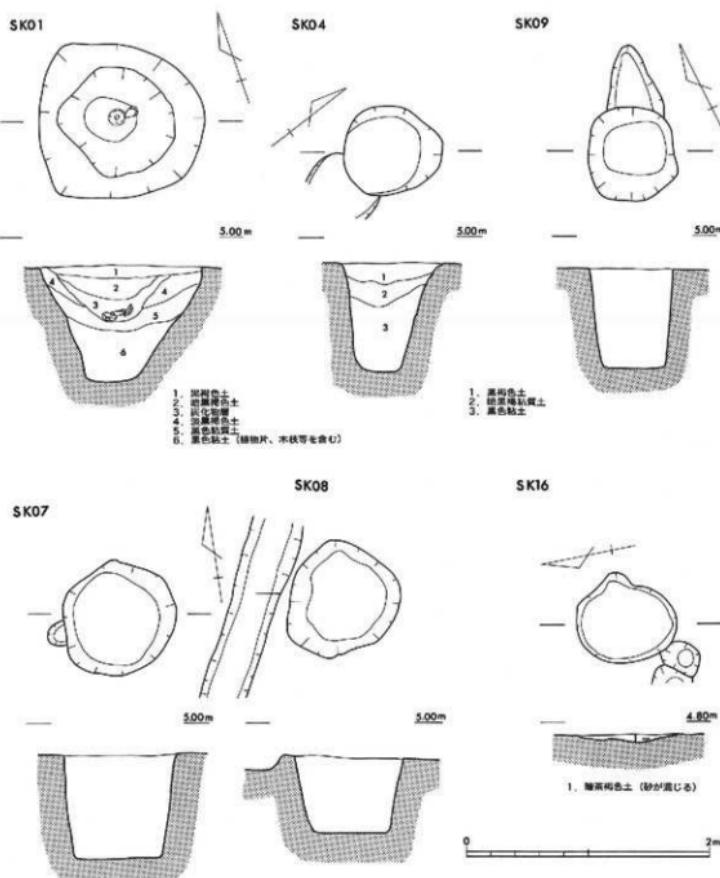


第37図 A区SD01出土土器実測図

部が長く薄い作りになっていることから弥生時代後期終末に近いものである。5は近畿系の丹塗り土師器皿である。短く立ちあげた口線の端部内面がわずかに沈線状に窪んでおり、復元口径19.6cm、器高2.7cmである。内外面ともにヘラ磨きを施しているが暗文は施されていない。その形状から奈良時代後半頃の所産と推定され、この土師器が溝中の遺物の中で最も新しいもので、この溝の時期の上限を表わすものといえよう。

(3) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は土坑と溝、および古墓であるが、A・AN区ではAN区南端のSD17付近やA区南



第38図 A・AN区中世の土坑実測図(1) SK01・04・07～09・16

端のSD07付近に集中して存在し、古墓はC区中央に固まって発見された。

①土坑

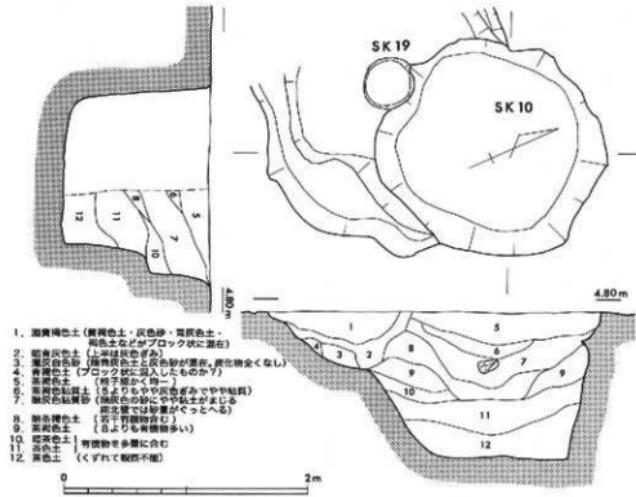
SK01 (第38図上左、図版20-1・2)

A区北西端で検出した土坑で平面不整円形を呈し、全体の形状は逆円錐台形をしている。深さは約1mであるが、土層を観察したところでは、最初に掘った土坑が半分以上土砂で埋まった段階で再度掘り直した様子が窺える。最初に溜まった黒色粘土には木の葉や小枝など、植物片の混入が認められ、拳大程度の川原石もいくつか出土したがその他の遺物は発見されなかった。再度掘り直した土坑には厚い炭化物層と上部には黒褐色土が堆積する。この黒褐色土は弥生土器片などを含む遺物包含層で、当時の表土層を形成しているものと考えられる。炭化物層の下面すなわち掘り直した土坑の底面には、長さ10cm前後の川原石を数個並べた上に、土師質土器坏が1個内面を上にして置かれた状態で出土した。坏の内部には炭化物が混ざった黒色粘土が堆積していた。これらの坏と川原石がどういった行為の結果であるのか今のところわからない。

出土した坏(第40図1)は、底部回転糸切り放しで、体部がわずかに内湾しながら立ち上がる土器である。全面回転ナデ仕上げで口縁端部は丸く取れる。器高6.4cm、口縁径11.9cmで、八峰興編年の島根中世II期後半(12世紀後半)ころに相当すると思われる。

SK04 (第38図上中、図版20-4)

A区北半で検出した土坑で、直径60cm、深さが約90cmあり、全体の形状は円筒形をしている。内部には下半に黒色粘土、上半に黒褐色の粘質土が堆積し、どの層位からも土器の細片が出土する。その土器中に回転糸切り底の土師質土器があり、中世の土坑と判明した。掘り下げる途中から湧水



第39図 A・AN区中世の土坑実測図(2) SK10

が著しく、水を汲み上げないでおくと土坑上面まですぐに溝杯になり、井筒などの痕跡は全く確認されなかつたが井戸跡の可能性が極めて高い。

SK07～09（第38上右・下中・左、図版21）

A区南端で検出した土坑群で、三つがそれぞれ1mと1.5mの距離をもつて並んでいる。SK07は直径90cm、深さ約80cmで、SK08は直径90cm、深さは土坑を底面まで掘りきることができなかつたので正確ではないがおよそ60～80cm、SK09は直径70cm、深さ約80cmである。いずれも掘り下げていく間にも湧水によって壁が崩落していき、図面や写真をとる余裕すらない状態であった。結局のところ、壁の崩落面に一定して安定した地肌があったこと、そして崩落が収まつた時に円筒形のきれいな空間ができたことから、井戸跡であると考えられる。

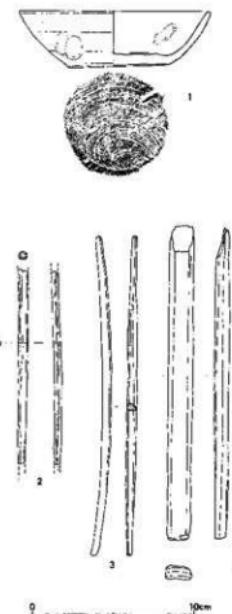
柄杓で掬い上げたSK07の崩落の中から上器の細片とともに木製品が出土した（第40図2）。上下両端とも欠損しており現存長12cmである。断面形はほぼ橢円形に近く、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。箸と思われる。

SK10（第39図、図版11-2）

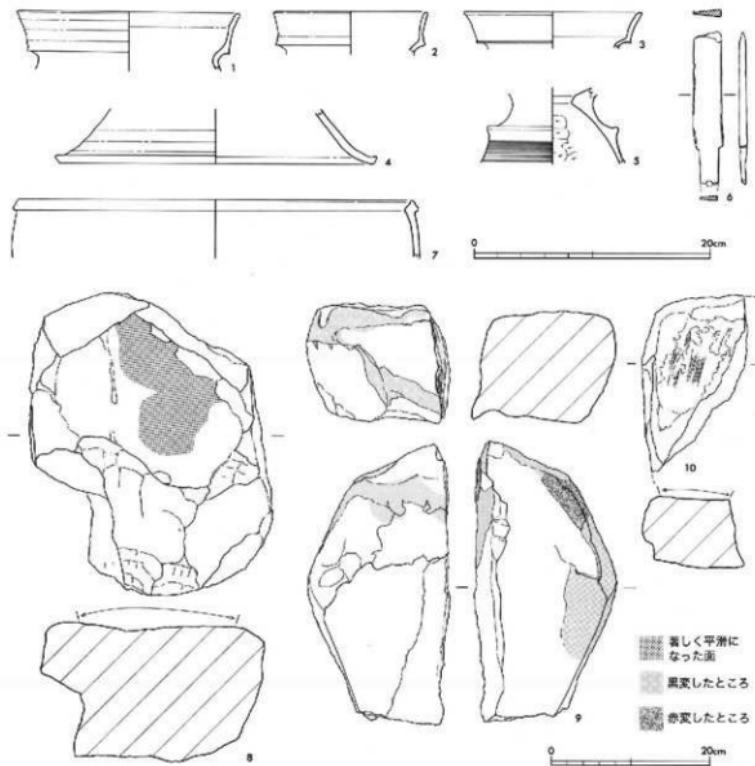
AN区南東隅で検出した土坑で、古墳時代初頭の井戸跡SK19を切って掘り込んでいる。平面形は円形ないし剛丸方形で、直径（または一辺）1.7mである。深さは1.2mあり、平坦な底面の形状も剛丸方形である。土坑内には、下半に木の葉などの有機物を多量に含んだ茶色上が堆積し、中程の灰色砂質土を挟んで上半には茶褐色土が堆積する。十層観察用のベルトを設定して上層を観察しながら発掘を進めていたが、北西側4／1は記録をとる前に壁面が崩落してしまつた。この土坑も井戸として掘られた可能性があるが、井筒やその痕跡すら発見されなかつたので性格は不明である。

遺物は、弥生時代後期初頭から古墳時代初頭にかけての土器が同位に関係なく万遍なく出土するほか、灰色砂質土の上層で、砥石あるいはかまと石として使用されたと考えられる大形の石や刀子片が出土した。第41図1～5は多数出土した上器のうち図化することができた弥生時代後期の土器である。複合口縁の立ち上がりはゆっくりと外反し、口縁端部は丸く仕上げる。外面下端は明瞭な稜を作り出すが水平に突出することはなく、内外面の調整はヨコナデである。4は高环脚部と思われる破片で、裾部径が26.6cmもある大型品である。5は九重式の波形器台の脚台部で、裾外面に二枚貝腹縁による多条の平行沈線文がはいっている。

第41図6は刀子片である。現存長13.0cmで、刃から先切削10cmと茎側3cmが残存しており、それぞれそこから先は欠損している。刃は意図的に潰されて折れ曲がつておらず、刃部の現存幅2.46cmを測るが、復元すると本来は2.6cm程度であったと推定される。刃は両刃で、脊側のものは階段状になつておらず、茎は目釘穴のところでちょうど折れ曲がつておる。目釘穴の内径は4.48mm、脊幅は6.4mmで



第40図 A・AN区中世の土坑出土
遺物実測図(1) (1:SK01, 2:SK07,
3・4:SK10)



第41図 A・AN区中世の土坑出土遺物実測図(2) (7:SK16, その他SK10)

ある。全面炭化物の付着が著しく黒色を呈しているが、銹化が少なく、遺存状況は極めて良好である。

第41図8・10は砥石として用いられたと考えられる石で、図中矢印の部分が研磨面として使用されたところである。8の網目部分は特に平滑になっているところで、10には細かい擦痕が多数認められる。9はかまど石に用いられたと考えられるもので、全面にわたって赤く焼けたり、黒く変色したりしている。木製品も出土しており、第40図3は全長19.7cm、最大径6mmの箸と思われる製品である。4は現存長19.3cm、幅1.6cm、厚さ6mmの断面方形の棒製品であるが用途は不明である。

SK16 (第38図下右)

AN区南東隅SK10の東側で検出した土坑で、平面形は長径85cm、短径60cmの梢円形を呈する。この土坑も井戸跡のように深くなるかと心配したが、予想に反して非常に浅いものであった。出土遺物は第41図7の縁釉のかかった陶器のみである。7は口縁端部を短く外反させた無頬の鉢とでも言

うべきもので、復元口径は33.4cmである。白色の磁器に近い胎土をしており、口縁のくびれから下に透明な緑灰色の釉がかかる。中世末ごろの所産と推定される。

②古墓

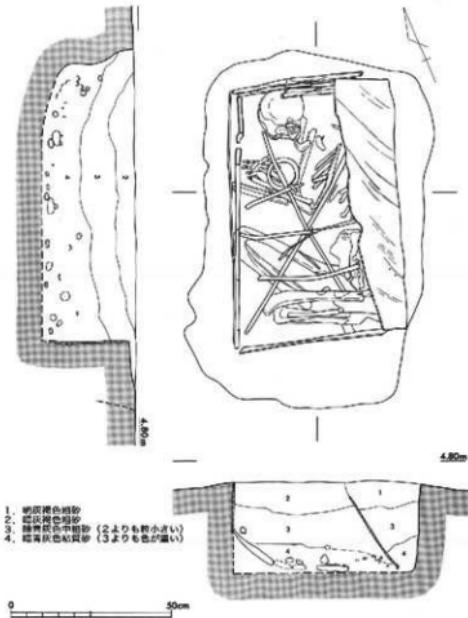
1号古墓 (第42~44図、図版23・24-1・2)

C区中央で検出した長方形の古墓である。長辺78cm、短辺46cmの木組みの棺で、掘り方は1.05×65cmのはば長方形である。東側側板が内側に大きく倒れており、北側の小口板は発見されなかつた。木組みの棺とはい、箱形になっているわけではなく、底と蓋は竹を筋交いに組み、蓋か籠をかけたようなものである。すなわち、まず棺の蓋は長さ70~80cmの竹を筋交いに組み、その上に同じく竹で横木を渡したもので、横木は4本しか確認できなかつたが、配列から考えて北端にもう1本あって全部で5本あつたと考えられる。そして、このまま土を被せれば遺体に直接土がかかるので、遺存してはいなかつたが本来はこれに蓋か籠をかけていたと推定される。

側板は全部で3枚で、原位置を保っている西側の板は、長さ78.5cm、高さ24.5cmである。南側の小口板は若干外に開き加減になつてゐるが、長さ44.5cm、高さ22.5cmを測ることができる。どちらも板目材を使用していて直径4~5cmもある節が認められるが、厚さはわずか5mmである。各側板は単に小口を合わせてはいるだけで釘とかを使って固定しているわけではない。北の頭部側は頭蓋骨の上部から頭蓋骨を守るように底面まで籠上に連なつた削竹がまわしてあり、これが枕の役割のほかに小口板の代わりをして

いたことが推定される。籠状の削竹1本々々は長さ46cmで、内側を頭部に向けて10本以上連ねてあつたと思われる。底部も80~85cmの竹2本を筋交いに組んだあと東西両端に南北方向に2本入れ、その上に長さ50~51cmの竹の横木をほぼ均等な間隔で6本渡している(第44図)。蓋や籠はここにも発見されなかつたが、やはり竹組の上に敷いていたものと推定される。

出土人骨は頭位を北にして、体の右側面を下にして、すなわち体の正面を西に向ける形で横たわり、脚は右足は膝が胸近くまで大きく曲げられ、左足はやや離れた形で出土した。両腕は胸

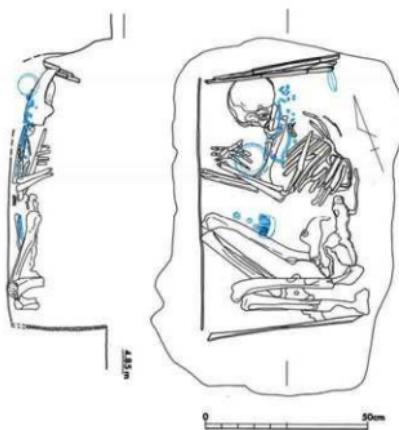


第42図 C区1号古墓実測図

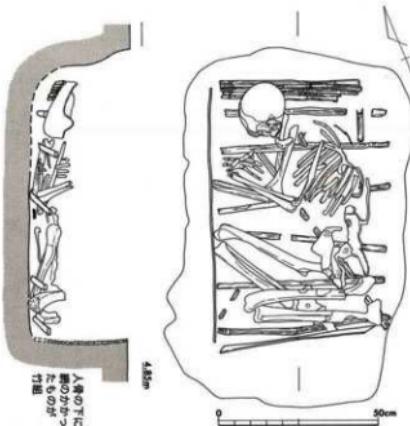
の前で手を合わせ指を交差させた格好で検出された。人骨は全体に痛みが進んで各骨とも端部が朽ちている場合が多く、頭骨や体幹骨、四肢骨の多くが残っているが、頸椎、胸骨、鎖骨、肩甲骨など残っていないところもある。また、手の指骨は比較的よく残っているが、足骨のほうは保存状況があまりよくなかった。鳥取大学医学部井上貴央教授の鑑定の結果、出土人骨は女性で、年齢は歯が確認できることなどからかなり高齢であることが指摘された。

副葬品は、首から胸の部分にかけて木製の数珠玉が77個連なって出土した。ちょうど輪のよう一巡りしている（第43図）ので、糸に通した数珠を首からさげて埋葬されたものと推定される。数珠の横と竹枕の東端からは土師質土器の皿が各々1個ずつ出土した。数珠近くのほうは大形で内面が上を向いており、枕のそばの皿は垂直に立った格好で出土している。棺の中央、ちょうど腹部のあたりでは木製の櫛と無文鏡9枚が重なるようにして出土した。遺体を棺におさめたあと土師質土器皿とは別に、櫛と無文鏡を腹部のあたりに置いたと考えられるが、袋に詰めて収めたと考えたほうがよいかもししい。

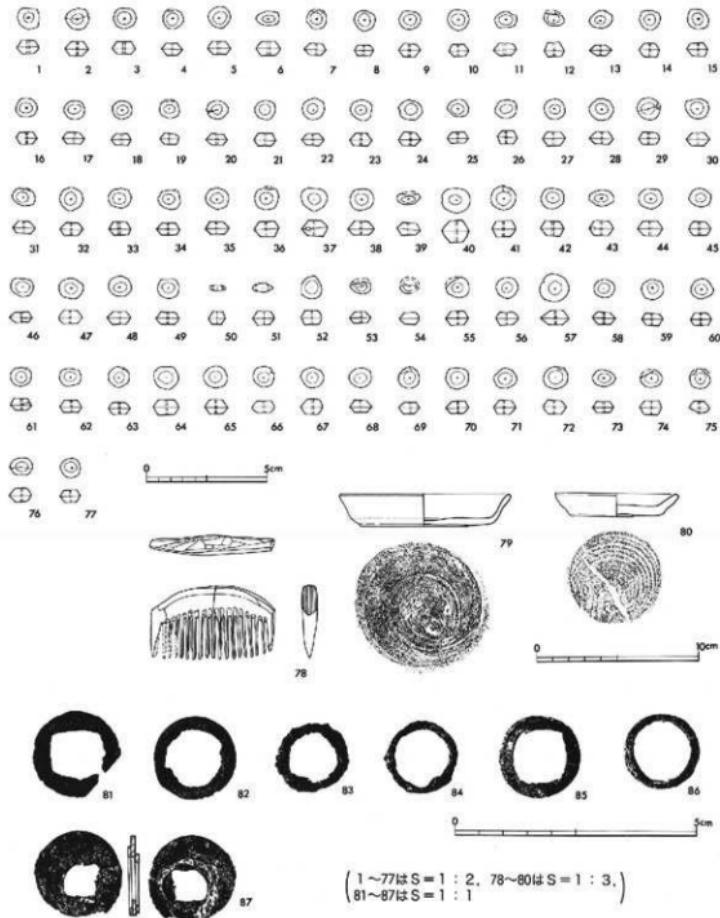
木製数珠（第45図1～77）は形状は算盤玉をしており、平面形は基本的には円形であろうが、梢円形を呈しているものも少なくない。直径の最大は12.5mm、最小は6.6mmで、平均8.9mmである。厚さは4.9mmから9.2mmで平均は5.3mmである（第2表）。現重量については水分の加減によって大きく変動すると思われるが、水付けのタッパーから取り出して布で拭き、直ちに計測するという条件下で平均値が0.23gである。数珠の平面中央には直径1mmに満たない小さな穴が開いており、おそらく糸を通した針をこの穴に通して繋いでいったと考えられる。櫛（79）は板目材を用いており、脊を弧状に作り出す。歯先も若干弧状になっており、全長7.9cm、最大幅4.6cmである。厚さは中央の



第43図 C区1号古墓人骨並びに副葬品出土状況実測図



第44図 C区1号古墓底部竹組実測図



第45図 C区1号古墓出土遺物実測図

幅が最大になるところが1.2cmと一番厚くなっています。端に向かうにつれ徐々に薄くなる。歯先と脊では歯の根元の部分が最も厚く、刃先に向かって緩やかに弧を描き、歯先は鋭く尖る。歯は全部で19本で、歯の太さは1mmから1.5mm、歯と歯との間隔は約2mmである。歯の作り出しのための切り込みは表裏表面から行っている。

土師質土器79は口径10.4cm、器高2cmで、内外面ともに回転ナデ調整を行うが内面にはさらに底面中央から回転させながらナデが付いている。底部は回転糸切りである。80は79よりも小形の皿で直径7.6cm、器高1.5cmだが、80よりは厚手の作りである。これと同じ形態の土師質土器の出土例は少

第2表 C区1号古墓出土数珠計測表

標題番号	長径	短径	厚さ	現重量	備考	標題番号	長径	短径	厚さ	現重量	備考
1	10	8.5	5.9	0.29		41	10.6	10	6.5	0.38	
2	10	9.2	5.6	0.27	壊れている	42	9.5	9	6.4	0.3	
3	9.5	8.4	4.7	0.22		43	10.6	7.1	6.3	0.27	
4	8.6	7.8	4.6	0.19	欠けている	44	10.5	9.1	5.9	0.32	
5	9.4	9	5.9	0.25		45	9.3	7.7	5.5	0.23	
6	10	6.5	5.8	0.21		46	9.3	7.8	4.6	0.2	
7	9	7.9	5	0.2	欠けている	47	9.9	9	5.5	0.26	
8	8.6	8.3	4.9	0.19		48	10	8.5	5.5	0.25	
9	9.1	8	5.1	0.22		49	9	8	5.1	0.22	
10	9.3	8.8	5.3	0.24		50	6.6	2.5	5.5	0.06	一部欠
11	9.6	7.3	5.1	0.19		51	6.2	2.3	5.5	0.06	一部欠
12	8.1	4.8	5.8	0.17	欠けている	52	10	8.3	5.5	0.26	欠けている
13	9.5	8	5.2	0.2		53	8.2	5.9	5.5	0.15	欠けている
14	8.7	8.3	5.2	0.21		54	8.3	4.2	5	0.09	欠けている
15	9.1	8.7	5.4	0.25		55	10	8.4	5.8	0.26	欠けている
16	9.4	8.4	5.4	0.23		56	9.2	8.1	5.3	0.24	
17	9.1	7.9	5.4	0.22		57	12.5	12	6.3	0.47	
18	8.7	7.9	5	0.19		58	9.2	8	5.1	0.21	
19	8.8	8.1	4.7	0.19	欠けている	59	9.4	8.7	5.1	0.25	
20	9.1	8.5	5.2	0.2		60	9.2	8.3	5	0.22	
21	9.2	8.6	5.6	0.23		61	8.5	8.1	5.5	0.22	欠けている
22	9.4	9.2	5	0.24		62	9.7	7.9	4.9	0.21	
23	9.5	8.8	5.5	0.28		63	9.5	8.9	5.1	0.23	
24	9	8.8	5.1	0.23		64	10.6	9.8	6.3	0.38	
25	9.2	8.2	4	0.18		65	9.9	9.3	5.8	0.29	
26	8.5	8.1	5.3	0.22		66	9.3	8.7	5.3	0.24	
27	9.4	8.5	5.7	0.26		67	9.4	9	6.4	0.27	
28	9.7	9.3	5.4	0.26		68	9	8.4	4.9	0.22	
29	9.1	8.9	5	0.24	壊れている	69	9.2	8.8	5.3	0.22	
30	10	8.3	5.5	0.26	欠けている	70	10	9.4	5.5	0.27	
31	9.3	7.2	5.6	0.21	欠けている	71	9.7	8	5.4	0.24	
32	10	9.7	6.4	0.34		72	10.2	9.1	5.4	0.28	
33	9.8	8.8	5.2	0.26		73	9.2	7.3	5.2	0.2	
34	9.8	8.5	5.2	0.25		74	9.2	8	5.5	0.19	欠けている
35	9.7	8.9	5.1	0.26		75	8.3	8.1	3.7	0.14	欠けている
36	10.3	9.2	6.4	0.35	欠けている	76	9	7.1	5.7	0.22	壊れている
37	10.4	9.5	6.8	0.36		77	8.9	8.4	4.9	0.2	
38	10.6	9.2	6.1	0.32							
39	10	4.9	5.6	0.17	一部欠						
40	11.9	10.8	9.2	0.59		平均値	9.5	8.3	5.3	0.23	

第3表 C区1号古墓出土無文銭計測表

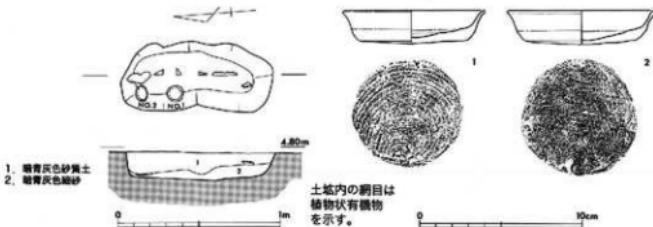
標題番号	銭径(cm)	穴形態	穴径(cm)	現重量(g)	分類
81	1.8	隅丸方形	1.2	0.46	B-II-3
82	1.6	円	1.2	0.37	B-II-3
83	1.4	円	0.9	0.20	C-II-3
84	1.4	円	1.0	0.18	C-II-3
85	1.7	隅丸方形	1.1	0.18	B-II-3
86	1.6	円	1.2	0.18	B-II-3
87-1	1.7	四角	0.8	0.77	B-I-1
87-2	1.6	円	0.8	0.77	B-II-3

ないが、およそ16世紀ごとと考えられる。

81~87は銭貨にまったく文字のないわゆる無文銭である。全部で9枚出土しているが、このうち87に3枚重なっており、うち1枚はほとんど錯だけになっている。銭径は1.4cmから1.8cmと小型のものばかりで、郭穴にも方形のものから隅丸方形、さらに円形のものまで多様である。これらは是光基氏分類のB-II-3型、B-III-3型、C-II-3型に相当するもので、1点のみB-I-1型がある(第3表参照)。無文銭の使用時期については各地域で微妙なずれがあるようだが、普遍的に広まるのは16世紀中葉から17世紀初頭と考えられている。

以上のように、この1号古墓からは数珠や櫛、無文銭などの副葬品が出土しており、特に土師質土器と無文銭の出土例から、当古墓の造営は16世紀中葉から後半の時期と考えられる。

ところで、この1号古墓から北東側に3.5m離れたところで、小さいながらも土師質土器が入っ



第46図 C区SK20及び出土土器実測図

ていた土坑SK20を発見した（第46図）。長さ90cm、幅40cmで、二つのピットが連なったような形状をしているが一つの遺構である。深さは約20cmで下半には青灰色の細砂、上半には粘質土が堆積しており、その境目から草本性植物らしき有機物とその跡を検出するとともに、同じレベルで土師質土器皿2個と陶器片を発見した。発掘当時はこの草本性植物の存在から、1号古墓に伴う祭祀土坑、正確に言えば、埋葬の際に使用した土師質土器や墓前に飾った花などを葬儀が終わって埋めた土坑として理解したいと考えていたが、整理を進めるうち新たなることが判明した。

すなわち、まず土師質土器皿（第46図1・2）は直径がそれぞれ8.7cmと9.1cm、器高が2cmと2.1cmで、ほとんど同じ大きさのものである。底部は回転糸切りで中央がやや尖った形になっており、口縁は摘み上げたように薄くしかも短く立ち上がらせている。1号古墓出土の皿79にやや近似しているが、それよりも古い形態の特徴をもっており、およそ15世紀以前のもの可能性が強い。また、一緒に出土した陶器は常滑系陶器の壺で、小片で年代を決める手掛かりにかけるが、この地域における常滑系陶器の流通自体が14世紀以降下火になるといわれており、それらを考慮するとこの土坑の年代が少なくとも16世紀まで下ることはないということになる。

したがって、このSK20は1号古墓とは直接関係なく、付近にもっと古い時期の別の遺構が存在している可能性があるといえる。

2号古墓（第47・48図、図版25-1・2）

1号古墓から南に5.5mくらい離れたところで発見した墓で、SD12とほとんど重なった状態で検出した。掘り方は南北60cm、北東辺55cm、南西辺70cmの台形に近いもので、棺は上面で47~48cmのほぼ方形であったが、これは北東辺の側板の上端部分が外に湾曲したせいで、本来は方形に近い長方形である。その長辺の側板の長さは48.5cm、短辺の側板の長さは44.5cmであった。棺の蓋は発見されず、底は棺の東側が深く沈んでしまって斜めになっているが、側板がしっかり乗る程度の大きさの板が敷かれている。側板の厚さは約5mmできれいな柾目材を使用しており、底板については計測できないがほぼ同じ厚さの柾目板を使っているものと推定される。この棺も1号古墓同様、釘とかは使わず、板を組み合わせただけである。

東側で深さ30cm、西側で約26cmの棺内から、手足をきつく折りたたみ、押し込めるようにして収められたと思われる人骨が1体出土した。頭位を北に向かって、右体側を下にして体の正面が西に向くようにして折りたたまれている。頭蓋骨は残っていないが、上顎骨の一部と下顎骨があり、体幹骨では肋骨のうちの上半部分、腰椎から仙骨にかけて、および腸骨のあたりが比較的良好に遺存して

いる。四肢骨のうち腕については、左右がはっきりしないが上腕骨と橈骨、尺骨および指の節骨の一部が認められる。下肢骨は左右の大腿骨、左の脛骨・腓骨、右の脛骨などが観察され、足の根骨や節骨も残存しているようだが破損させずに掘り出すことがなかなか困難であった。

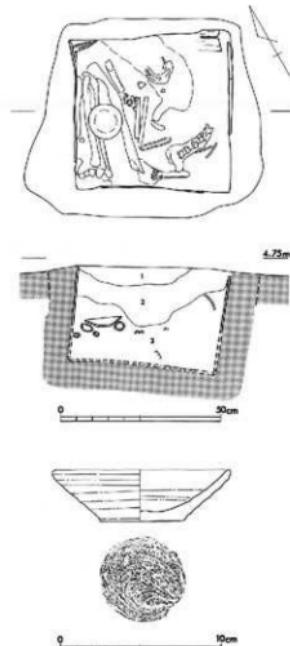
鳥取大学井上貴央教授の鑑定では、左大腿骨の最大長は推定で40.4cm、左脛骨の最大長は推定31.2cmで、骨が細いことから女性あるいは子供かと思われるが、歯の咬耗度が低いことから子供の可能性が強いということである。

副葬品は左下肢骨の上に乗る形で土師質土器の皿が1点出土した(第47図)。底部は回転糸切り放しで体部は若干内湾ぎみに立ち上がる。口径11.0cm、器高5.2cmで、内外面ともに回転ナデ調整である。これと形態的にも法量的にも近似したものが同じ出雲市内の古志本郷遺跡で出土している。出雲市教育委員会が実施した第6次調査で、C区井戸1から胎留め痕跡の残る唐津焼きとともに土師質土器が出土しており、この土器の時期は唐津焼きの年代から16世紀末と考えられている。当古墓出土の土器は土師質土器もほぼ同じ年代と考えられ、これは1号古墓の年代と突き合わせても矛盾するものでない。

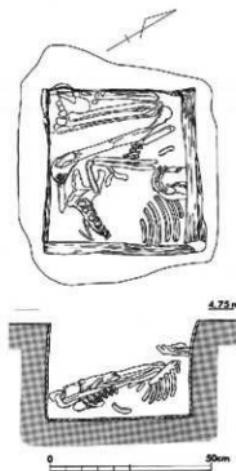
3号古墓(第49・50図、図版25-3・26)

2号古墓の西側で検出したもので、2号古墓との距離は1mしかない。掘り方は隅丸長方形というか長辺円形というべきか、そのくらいの平面形で、長さ100cm、幅82cmである。棺の大きさは長辺75cm、短辺58cmの長方形で、3基の中では一番大きい。長軸の方位はN-55°-Wで、1・2号古墓とは80°近いすれがあり、むしろ直交する向きに造営されたと考えてもよいくらいの方向である。構造的には1号古墓と同じであるが、蓋の痕跡は確認されなかった。棺の深さはわずか10cmで、西と南北の側板の遺存状況は比較的よかつたが、東側の板は相当腐食が進んでいた。各側板の現存幅は北辺の板で6cm、西辺の板で11cm、南辺の板で9~10cmである。

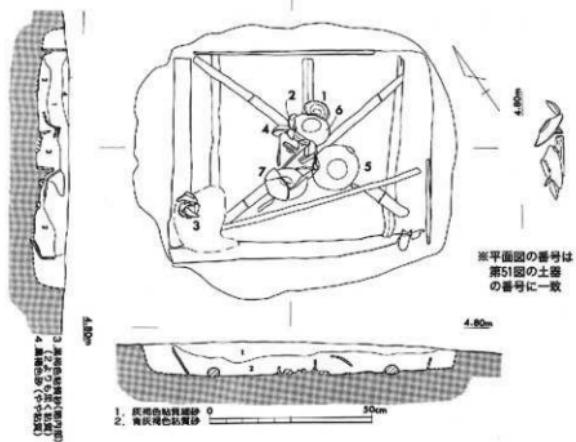
底面は竹と木で組んだ骨組みに苔蘚か筵を敷いたも



第47図 C区2号古墓土器出土状況及び土器実測図



第48図 C区2号古墓人骨出土状況実測図

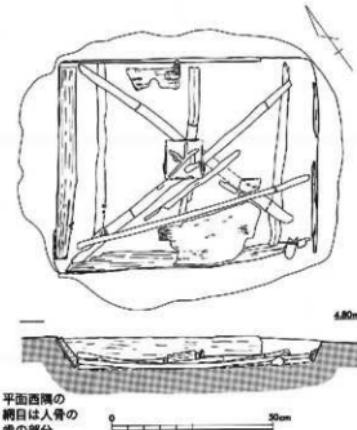


第49図 C区3号古墓遺物出土状況実測図

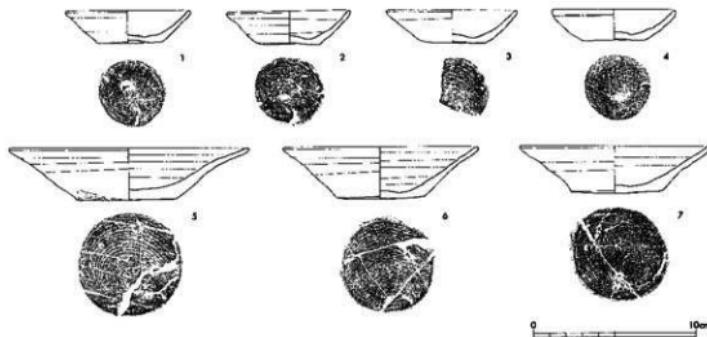
ので、具体的には、まず南北にすなわち長軸と直交する方向に直径3.5cm前後の木の枝を25cm間隔で3本並べ、その上に長さ80cm以上の竹を筋交いに乗せ、さらに棺の南側で長軸方向に側板に沿つて竹をもう1本乗せていることから、本来は北側にも1本置いて以上を組み合わせたものと思われる。この骨組みの上に莫蘿か筵を敷いており、南側の骨組みの上から側板にかけてと、北側の木組みの間の砂の上面でこれを確認した。

人骨はほとんど遺存していなかったが、棺の南東隅で頭骨ではないかと思われる土色の変化したことごとく、それを少し掘り下げたところで歯を数個発見した。また、北側の莫蘿か筵の上に蟻化した肋骨と思われる骨の跡が確認できた。

副葬品は、棺の中央に、棺と同じ構造をもった小型の木箱とそれを覆うように土師質土器6個が並んで出土し、歯が確認された南西隅でも土器が1個出土した。木箱は、一辺が11cmの方形の箱で、四方の板は高さは5cmあるが、厚さはわずか2~3mmでいずれも両端が折りてしまっている。木箱の底部は太さ1cmに満たない棒を十字と筋交いに組んでおり、木箱の中からは何も出土しなかった(第50図)。木箱を覆っていた土師質土器は、壺が3個と皿が3個で、壺のうち2個が底部を上にして出土し、皿は内面が上を向いたものが2個、垂直に立ったものが1個出土した(第49図)。その



第50図 C区3号古墓小箱及び底部竹組実測図



第51図 C区3号古墓出土土器実測図（番号は第49図平面の番号に一致）

出土状態をみると、木箱の北側で出土した壺（6、挿図中の番号、以下同じ）と皿の3個は、もともと木箱の上に乗っていたものが土圧によってずり落ちたという状況が看取できる。これを元の状態に復元すると、木箱の上に下から順に皿4（底が上）、皿2（内が上）、壺6（底が上）、皿1（底が上）という順番で重ねられていたと推定される。南西隅の皿3は内面を上にして出土している。

第51図がその実測図である。皿はいずれも口縁がほんのわずかに内湾しながらも直線的に立ち上がるるもので、回転糸切り底に内外面回転ナデ調整を施している。1・2・4は口径7.4～7.7cmで、3のみがやや大きくて8.0cmであるが、器高はいずれも1.9～2.1cm、底面径3.9～4.0cmで、ほとんど画一化されたサイズといえる。色調は淡い黄褐色から淡橙色を呈している。壺は口縁がやや外反ぎみながら直線的に大きく開くもので、端部に向かうにつれ、器厚が徐々に薄くなっている。5は口径14.7cm、器高3.2cmを測り、6は口径12.1cm、器高3.2cm、7は口径11.4cm、器高3.0cmと、ここでもほとんど画一化した大きさである。5の底部には回転糸切り後についたと思われる板目状の筋が観察される。これらの土師質土器はこの地域で規格品として大量生産されたものであろう。口縁が大きく開く壺は松江市下黒田遺跡など、15世紀代の土師質土器に類似するものがあるが、1・2号古墓との関係を考えると、これらも16世紀後半代のものと考えるのがよさそうである。

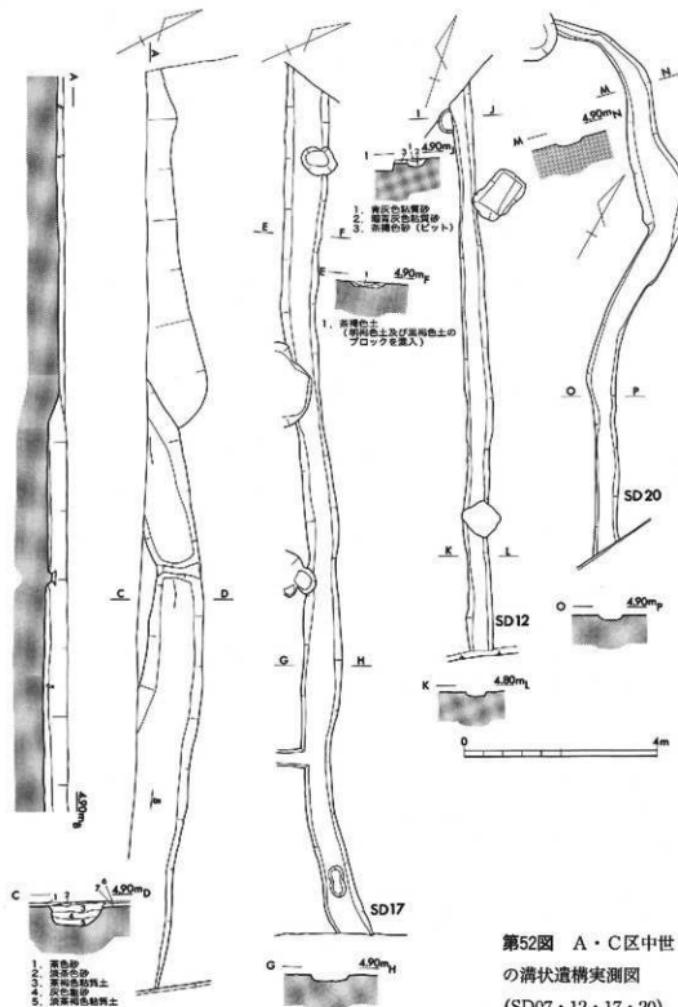
③溝状遺構

SD07（第52図左端、図版27-1）

A区南端で確認した溝で、現存長は11.5mである。調査区南壁から現れて弧を描きながら再び壁内へ消えていくが、中央付近でかろうじて幅などを押えることができる。すなわち溝幅の一番狭いところは堰のできているあたりで幅0.9mを測り、東西両側に向かうにつれ徐々に広くなって東側では幅1.3m以上である。堰の幅は15cmで、高さは10～15cmである。この堰を境にして溝の深さが変わっており、溝上面からの深さは東側で50cm、西側で40cmである。西端のほうではこの溝にむかって傾斜がきつくなっている法面を形成しているところがあり、その斜面には3～4m間隔で丸い雜木の杭が何本も打ち込まれている。堰の東側にも杭を數本発見しているが、西側ほど均一に打ち込まれてはいない。溝内には茶色の粘土質土と黄灰色の砂が互層状に堆積しており、何度も大水

によって砂が流れ込んだ様子が窺われる。

遺物はほとんど含まれていなかったが、それでも若干の土師質土器が出土している。第53図1・2がそれで、1は回転糸切り底で口径7.6cm、器高1.8cmである。薄手の作りで、口縁の立ち上がりはやや内傾する。2は壺の底部片で、回転糸切り痕を残し、底径は約6cmである。斐川町西石橋遺跡や安来市陽徳遺跡などから同様の土師質土器がセットで出土しており、およそ12世紀頃と考えられる。



第53図 A・C区中世
の溝状遺構実測図
(SD07・12・17・20)

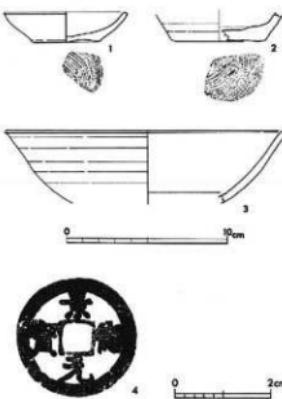
られる。

SD12 (第52図、図版27-2)

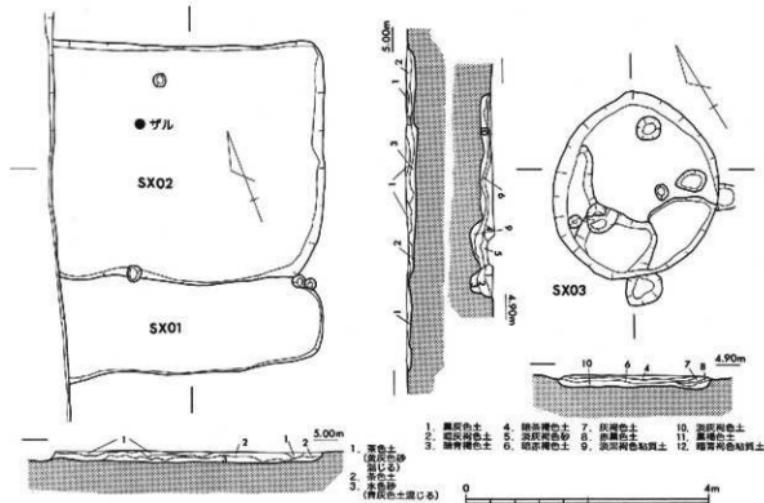
C区を北西から南東に突き抜ける溝で、1号古墓や2号古墓に切られている。溝幅は40cmから50cmで深さは20cm前後である。内部に青灰色粘質土が溜まっており、ほとんど遺物も含まれていなかったが、堆積土の土質がほかの中世の溝と同様であったので、この時期のものとした。北に伸びた先がAN区のSD20に続くと考えられる。

SD17 (第52図、図版27-3)

AN区南端を西北西から東南東へ伸びる溝で、微妙に蛇行しているものの比較的直線的な溝である。幅は60cmから80cmあるが深さはさほどなく15cm前後である。遺物包含層の黒褐色土をブロック状に含んだ茶褐色土が堆積している。出土遺物は少なかつたが、白磁と古銭が出土した。白磁 (第53図3) は中国製の楕円、口縁はやや内湾しながら立ち上がり、体部と同じ太さで端部が外反するタイプである。太宰府編年のV-4類かⅦ類に相当すると考えられ、12世紀代のものである。古銭 (第53図4) は北宋錢の景德元寶で、景德元年 (1004年) に初鑄された渡来錢である。これらの出土遺物からSD17の年代もSD07と同様12世紀代に求めることができる。ただし、この溝はAN区東端でSD01



第53図 A・C区中世の溝状構造出土遺物
実測図 (1・2 : SD07, 3・4 : SD17)



第54図 A区SX01～03実測図

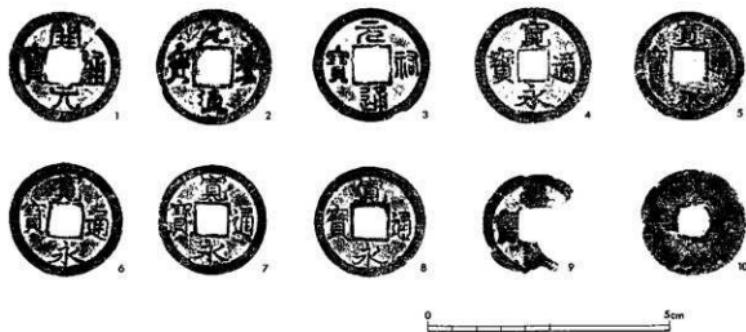
とつながっており、SD01は奈良時代頃の溝と考えられるので、あるいはもう少し年代が遡ることもありうるかもしれない。

SD20（第52図右端、図版27-3）

AN区中央を北西から南東に流れる溝で、北西の端はSK14あたりで消えている。大きく弧を描きながら南東に向かっており、幅は50cmから60cmで、深さはほとんどなく5cm前後である。



第55図 A～C区遺物包含層出土遺物実測図(1)



第56図 A～C区遺物包含層出土遺物実測図(2)

SD12同様青灰色の粘質土が堆積している。

④その他の遺構

中世以降と推定されるが、性格や内容のよくわからない遺構がA区とAN区で発見された。

SX01・02 (第54図左、図版29-1・2)

A区の北西端にあり、A区の調査に着手して真っ先に発見した遺構である。発見当初から方形の竪穴住居跡か2棟重なっているようにみえていたので、そのつもりで掘り下げたが、方形プランではあったものの柱穴や中央ピットもなく、住居跡と断定するに至らなかった遺構である。SX01は東端で幅1.1m、西端で幅1.7mで東西の長さは4.2mである。深さは約15cmと一定であるが、堆積している土層はかなり厚薄があって一定でない。SX02は3.9m×4.3mの方形を呈しているが、底面は一定でなく、北側が深く南側が徐々に浅くなっている。土層も洪水による砂や基盤層の青灰色砂が遺物包含層の茶色土に混じっており、古代の遺構堆積土を感じさせない。底面にはびつとが1個あったのみで、その他には何も発見できなかった。遺物は弥生土器片や中世頃と思われる瓦質土器のかけらのほか、中央やや西寄りでざるが1点出土したが、時期は特定できない。また、ざるをそのまま取り上げると完全に分解する恐れがあったので、まわりの土ごと切り取って持ち帰ったが、水に浸けて置いていたところ、結局土ごと崩壊してしまった。

SX03 (第54図右、図版29-3)

AN区東端で発見した遺構で、長径3.1m、短径2.7mの楕円形の遺構である。遺構面を精査中弥生土器片の集中が認められ、やや小さいながらも弥生時代の竪穴住居跡の可能性があると思い、住居跡のつもりで調査したが、底面は南側が階段状に三段に分かれ、しかも北側から一段低くなっていることがわかった。いくつもピットが重複していたため遺構が複雑となり、柱穴らしきピットも検出したが、並び方が不規則で、住居跡と断定するに至らなかった。床面までの深さは北側で約20cm、南側の階段状に深くなっているところでは約40cmである。堆積土の中には炭化物層が薄く広がっていたりしたが、遺構との関係を明らかにすることはできなかった。また、遺物は遺構内でも比較的上部で出土しており、床面近くでは発見できなかった。

A～C区で検出した遺構とそこから出土した遺物は上述のとおりであるが、調査区全域に広がつ

ていた遺物包含層からも遺物が出土しているので、これまで報告してきたもの以外のものを中心以下に補足しておく。

第55図1～4は3層床土と4層黄灰色砂層から出土したもので、1は口縁の立ち上がりが直線的に伸びる壺形土器である。肩部に二枚貝腹線による多条平行沈線文が施されており、草田IV期からV期に相当すると思われる。2・3は土師質土器皿で、それぞれ口径7.6cmと6.8cm、器高2.1cmと1.4cmである。2は静止糸切り底、3は回転糸切り底で、口縁内外面ともに回転ナデ仕上げである。焼成は良好で、薄手の堅緻なものである。静止糸切りの技法が土師質土器にどの程度現れるものか定かでないが、斐伊川放水路事業に伴う古志本郷遺跡の平成9年度調査で、18世紀頃と考えられる土坑から伊万里焼の椀などとともに出土しており、形態も全く同一であることから、17世紀以降、特に18世紀頃のものの可能性が強い。また、3の回転糸切り底の皿についても、古志本郷遺跡の同じ遺構から同形態の土器が出土しており、2と同じ頃の年代を与えることができそうである。4は常滑焼系の甌である。口径18.4cmの小形のもので、口縁部は短く外反し、肩部には櫛描の波状文がはいる。口縁端部がN字形にならないこと、肩部が強く張らず丸みをもつことなどから12世紀代のものと推定される。

10・11は5層の茶色砂層から出土したもので、10は縄文晩期の刻目突帯文土器である。小片ながら内傾する口縁の外面上端に断面三角形の突帯を貼り付け、突帶上側に刺突を施す。口縁端部にも同じ原体で刻目が施されているが、口縁端部の刻目と突帶上の刺突が一度に施されたものかどうかは、破片が小さいため確認できない。11は肥前系陶器の底部片で、高台は低く、底部と体部の立ち上がりの境に明瞭な稜がたつ。見込みと高台底面にそれぞれ3個所の砂目当て痕が残り、深緑色の釉がかかっている。17世紀前半のものである。

5～9は8層茶色土から出土した土器類で、5は弥生土器底部片、6は鼓形器台片である。7は高坏の脚注部片で、筒部は円筒形を呈し、外面には縱方向の刷毛目調整を施したのち、ナデを行う。8は須恵器壺の底部片で、紫っぽい青灰色を呈し、底面はヘラ切り後ナデ調整を行なう。9は高台付き坏底部片で高さ1cmの外開きの高台がつく。復元底径9.2cmで、内面は使用によりやや平滑になっている。ともに奈良時代の須恵器である。

12から18はいずれも砥石である。姫原西遺跡では石器の出土例が極めて少なく、出土した石器はほとんどが砥石である。12は長さ6.7cm、幅3.5cm、厚さ3.0cmで四面を研ぎ面として利用している。鉄器の刃部による細い擦痕も著しい。13は幅2.9cm、厚さ7mmの扁平な砥石で、現存長は7.1cmである。現存する角のところに成形時の擦り切り痕が残っている。両側縁にも研磨痕が認められるが、遺存状態の良好なほうは器面が荒れており、成形時の研磨が残っている可能性がある。14は全長7.6cm、幅4.6cm、厚さ2.8cmである。団面右側表面が剥奪しているが、現存部が黒変しているので火を受けたものと考えられる。15は現存長4.5cm、幅3.7cm、最大厚2.9cmで、側面に擦り切りの溝が入っており、一度薄く削ろうとしたことが窺える。16は現存長5.8cm、厚さ2cmで、断面形は方形に近いが研ぎ面として使用した面は多様である。17は現存長4.2cmで断面方形に近いが研ぎ面は5面である。18は全長8.4cm橢円形の砥石である。全体に剥離を加えて意図的に橢円形にしたもので、表裏両面に研ぎ面が観察される。石材は緑色凝灰岩と思われる。以上の砥石類はいずれも長さが10cmに満たないもので、使用された年代はわからないが、手持ちの砥石、つまり携帯用砥石として使用されたものと考えられる。

第55図19～24は金属製品である。19は先端を欠損している鎌状の鉄製品である。現存長7.5cmで、断面方形の基は長さ2.3cmを測る。頭部と基との境は段をなし、頭部は断面円形で先端に向かって3cmあたりのところで断面方形に変わる。茎側で直径7mm、先端の断面方形のところは断面の一辺が4mmである。20は断面方形の釘である。現存長は3.3cmで先端を欠損し、頭部は本来L字状に折れていたものが垂直に戻ったように真っ直くなっている。21は鉄製の蓋と思われるもので、復元口径16.6cmを測る。口径が大きすぎるようにも思えるが、鉢瓶か茶釜の蓋であろう。22はA区の茶色土から出土した鉛玉で、直径は12.5cmあり、現重量は10.88gである。製造の際の合わせ目の甲張りの跡が残っている。

23と24は真鍮製の煙管の雁首と吸口である。雁首は火皿の部分を欠損しているが、脂かえしから羅字結合部までの遺存状態は良好で、精巧な打ち出し文様が施された肩がつく。肩と脂かえしとの境は一段、階段状になっており、その部分には短沈線の刻み目が巡っている。肩の端には2本の細線が打ち出され、3mmずつ離れてさらに2本細線があり、その脂かえし側の細線間にも短沈線が打ち込まれている。一方の端の羅字結合部には幅1mm前後の縁が付いており、やはり内側にさらに3mmずつ離して細線を打ち出したうえ、脂かえし側の細線の間に短沈線をいれている。細線と細線の間の肩部中央には、丸に桔梗の絵柄が打ち出されている。桔梗の花芯には薬を表現した短沈線の打ち出しも認められる。桔梗の花卉と丸との間は肩の軸方向に合わせるように一定方向に小円の打ち出しが施されている。肩部の長さは4.75cm、脂かえしの長さは水平距離で2.15cmである。管の繋ぎ目は火皿を真上にして見た場合の左側にあり、脂かえしと肩の境の段のところは、管の直径に合わせて繋ぎ目の位置が変えられている。吸口のほうは長さが6.8cmあり、羅字結合部には幅3mmの縁がある。雁首の肩を有する特徴から近世前半のものと考えられる。

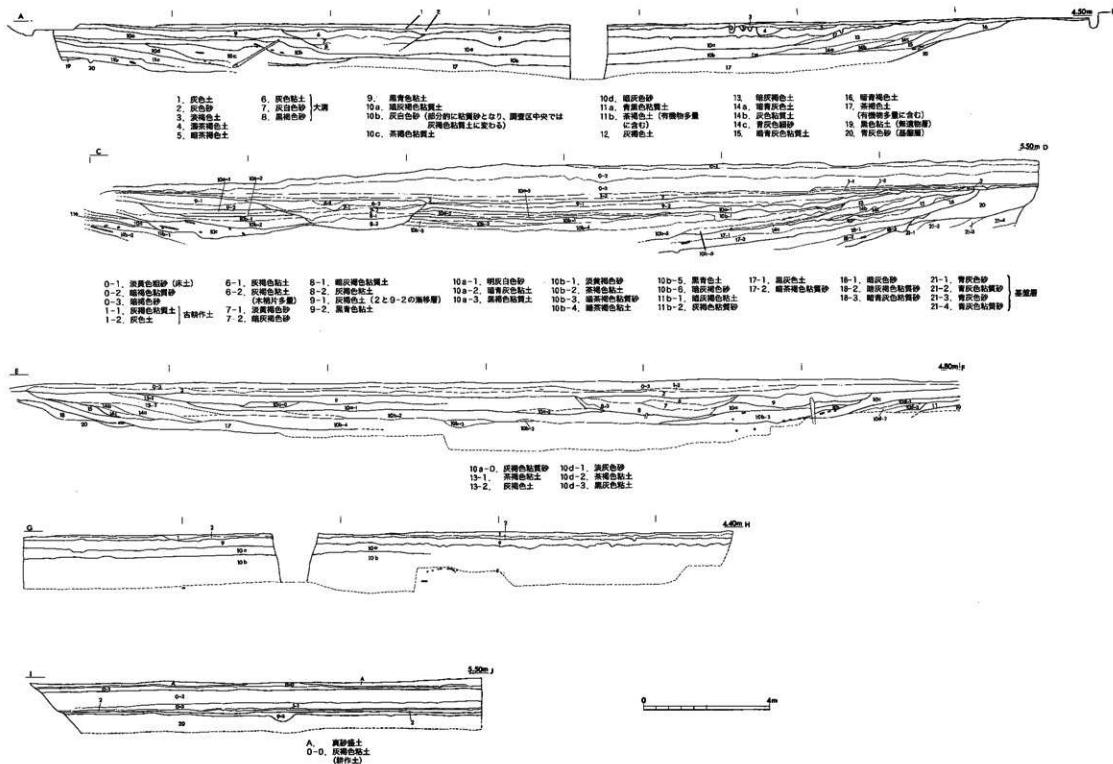
第56図は古銭類である。1は唐錢の開元通寶（初鋤621年）で、折れ曲がってはいるが直径2.25cmである。表の縁は太く、文字は鮮明である。背面に文字などは確認できない。模鋤銭と思われる。2は北宋銭の元豐通寶である。文字は行書体で背面に文字とかはなく、初鋤は1078年である。銭径2.4cm、厚さ1.4mmである。3も北宋銭で、1086年に初鋤された元祐通寶である。文字は篆書体で背面に文字とかはなく、やはり銭径2.4cm、厚さ1.4mmである。2と3は渡米銭と思われる。4から8は寛永通寶で、4は古寛永、その他は新寛永である。9は大きく折損しているうえ、文字が判読できない。中国銭の模鋤銭の可能性がある。10は無文銭で、銭径1.61cm、郭徑0.6cm、厚さ0.9mmである。

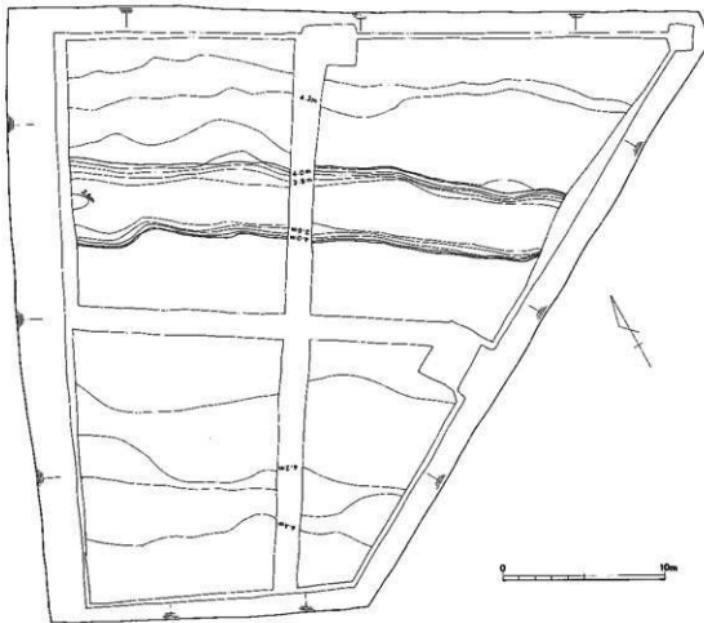
2. B・BW区の調査

B・BW区は、AN区の南西側に位置する調査区で、調査前は標高約5.3mの水田であり、主要地方道遼寧市線沿いには約50cm盛り土して住宅が建っていた。現耕作土の下には、黄色荒砂の床土の下に暗褐色の砂や粘質砂が厚いところで60cmから80cm、調査区東北端でも、40cmから50cmの厚さで堆積しており、その下に古耕作土と思われる灰褐色粘質土や灰色土が堆積していた。この灰色土は第58図の土層断面の第1層に当たり、その上面の標高は4.2～4.3mで、A～C区の現地表面の標高5.3m、基盤層上面の標高4.8mに比べてかなり低い。そのため調査開始当初にこの灰色土が当調査区の中心的な遺物包含層であろうと勘違いしたこともあるが、調査区中央に十字にトレンチを入れてさらに下層の様子を確認したところ、はじめてもっと深いところにしっかりした遺物包含



第57図 B・BW区遺構配置図

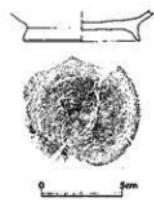




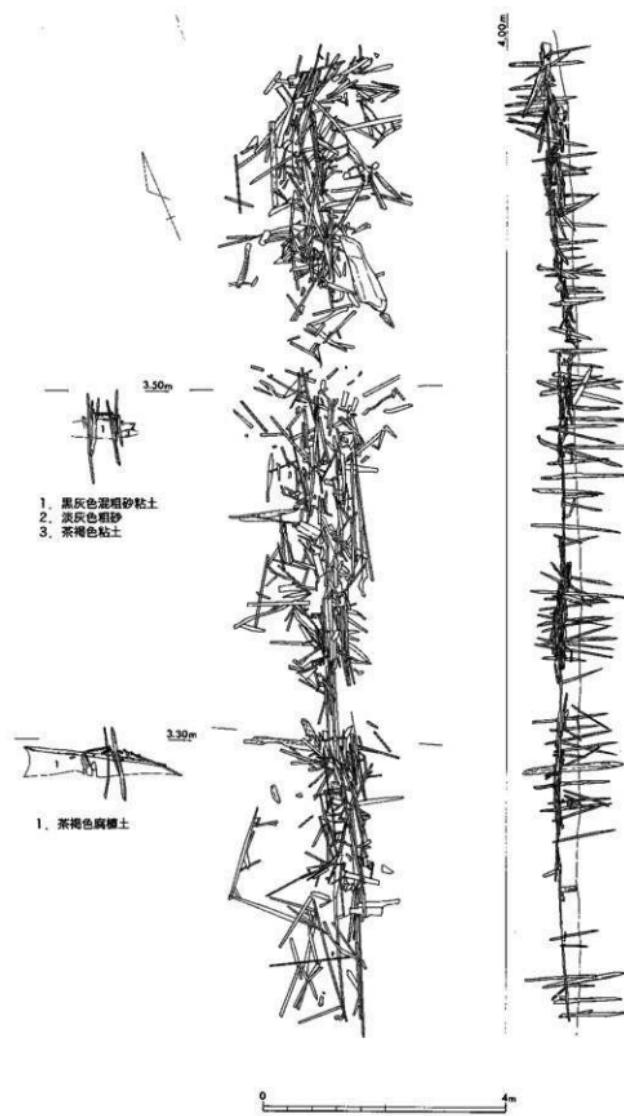
第59図 B区大溝実測図

層が別に存在しているということと、このB区がちょうど神戸川水系の旧自然河道の中にすっぽり納まっているということが判明した。旧自然河道は主要地方道と平行するようにまったく同じ方向に流れおり、調査区の北東端と南西端がその両岸に当たっている。形成当初の河道の幅は30mを超え、徐々に埋没し湿地化していく過程を土層観察から窺うことができる。調査区の南西側ではこの第1層上面から掘り込まれているピットが存在していることも判明していたが、調査期間を勘案した時、とてもこれの精査を行っている余裕はないとの判断と、その検出は断念した。

第2層は灰色砂層で、さらにその下には9層の黒青色土が堆積する。この9層から下が基本的に旧自然河道内の堆積土で、上から順に暗灰褐色粘質土（10a層）、灰白色砂（10b層）、茶褐色土（17層）となる。河道の両岸すなわち調査区の北東端と南西端ではそれぞれの岸から流れ込む土砂の堆積層が認められるが、そこには後述のような護岸施設が作られていて、土層のつながりを不明瞭にしている。しかも、粘質土と砂が互層状に何層も堆積していることから、両端の土層同士の関係は極めて掴みにくく、別々の土層番号をつけざるを得なかった。10a層から下のその堆積層は、北東側では上から順に10b層、茶褐色粘質土（10c層）、暗褐色砂（10d層）、青黑色粘質土（11層）、黒色粘土（19層）、青灰色砂（20層）とした。一



第60図 B区大溝出土
土器実測図



第61図 B区 1号橋実測図



第62図 B区1号
橋と土層の関係図

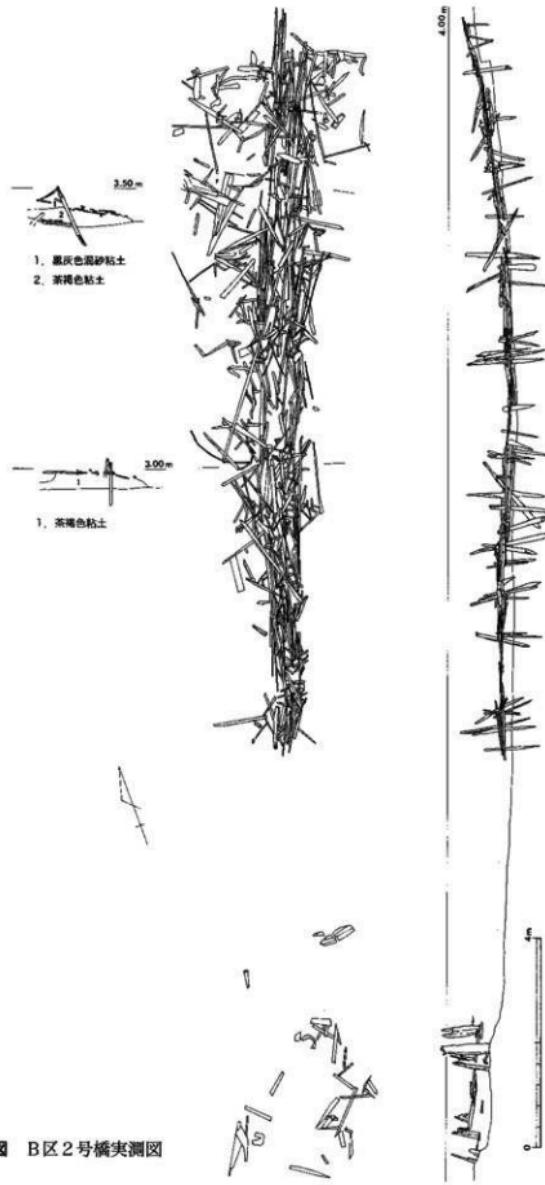
方、南西側では暗紅褐色土（12・13層）、暗青灰色土または暗青灰色粘質土（14・15層）、黒灰色土（17層）、褐色粘質砂（18層）、青灰色砂（21層）となる。もちろん、第58図の土層断面図のように、これらの層もさらに細かく分層できるし、一つの層でも粘質土から砂へ、あるいはその逆へ変化するなど、本来の堆積自体はもっと複雑である。それを承知したうえで、あえてこれら河道中央部の土層との関係でまとめると、河道上層の10a層・12層・13層、中層の10b層・10c層・14層・15層、下層の17層・10d層、最下層の11層という具合におおよそ4層程度に分けることが可能である。ただし、これはあくまでも土層断面で観察しただけの分層であって、出土遺物がきれいに年代別に分かれるかというと決してそうではない。最下層の11層からは弥生時代後期初頭の土器が主体的に出土し、上層の10a層では古墳時代初頭と考えられる草田6～7期の上器が主体的に出土するが、その間の土器形式が土層ごとに年代順にきれいに漸移するかというとそうとは限らない。19層以下は無遺物層で、20・21層はA～C区でも認められた青灰色砂の基盤層である。

なお、9層上面でこの河道の最終段階に相当すると考えられる大きな溝を検出した（第59図、図版32-1）。その位置は本米の河道の中心よりもやや北西側に寄ったところで、9層全体はこの大溝に向かって南北から傾斜している。溝の規模は幅4.1～5.3m、深さ0.6m前後で、底面は東南から北西に向かって傾斜している。特に、北西部では下層の遺構に重なっていたり、底部に砂の堆積が著しかったりで、溝の範囲を確定するのに苦労させられた。出土遺物は少量で、第60図のような土師質の高台付き壺が出土する。底部回転糸切りのうち高台を貼り付けたもので、奈良時代から平安時代ごろと考えられる。

(1) 遺構

旧自然河道の形成時期は最下層の11層の堆積以前と考えられ、埋没しきつてしまうのが9層の段階と考えられるが、B区では17層中からこの自然河道に渡した木橋や、河道の護岸施設と考えられる遺構が確認された。木橋は遺存状態の比較的良好なものか2本と、調査区端で一部しか調査できなかった1本の計3本が出土し、護岸施設は北東岸で5本、南西岸で1本がそれぞれ木橋の端と交差する形で検出された（第57図、図版31）。一方、BW区の調査では同じ時期の護岸施設を北東岸で3本、南西岸で1本確認できたほか、10b層中に打ち込まれた木橋の橋脚列を2本検出した。また、南西岸の基盤層上面で土坑と溝状遺構を一つずつ検出したほか、11b層下面で貝塚を発見した（図版43）。

以下に、B・BW区の旧自然河道内で検出した遺構を種別ごとに報告し、その後遺物について概略を報告する。



第63図 B区2号橋実測図

①木橋

1号橋（第61図、図版33-1・2、図版34）

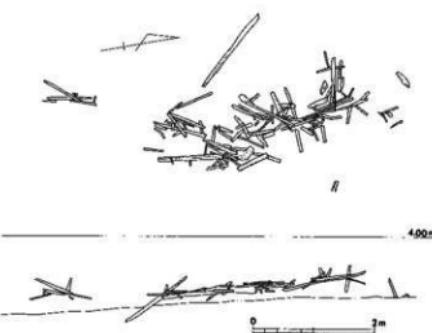
1号橋はB区の北西側すなわち下流側に位置しており、長さ約17m、幅1.1～1.4mである。平面的に見ると杭の並びが不規則ではあるが、基本的に2列に並んだ杭列と細かく削った横木から構成されている。木橋の一部を裁断し、杭と横木との関係を調べたところ、その構造は、最初杭を河道を渡すように2列に打ち込み、一番下に2列の杭列を突き抜けるように川の流れの方向に枕木を寝かせ、その上に横木を積み重ねるというものであった。現存している杭の本数は約95本で、横木の数は1000本を超える。横木は2列の杭列の間だけでなく、南東の上流側に相当するところにも厚く積み重なっているが、本来の構造としては2列の杭列の間に横木を噛ませたものと推定されるが、水流に流されないようにし、なおかつ杭の強度を保つという機能から考えると現況のほうが利にかなっているかもしれない。打ち込まれた杭は、長さが70～80cmのものから2m近いものまで、幅も10cmに満たないものから15cmを超えるものまで各種あり、その材料も角材や建築部材を転用したもの、さらには広葉樹の丸太材などさまざまである。横木の上面から上に突き出た杭の長さは、高いもので75cm程度あり、逆に横木上面から下に隠れたもので最も深いのは約1.2mである。杭の長さは河道中央に近いものが長く、岸に近いものが短いという傾向が多少認められる。積み重ねた横木の厚さは、厚いところで約20cmあり、2列の杭列の外側にたくさん積み上げているところはもっと厚くなっている。横木1本1本の大きさは幅と厚さが3cm×5cm以下の細く削った材が中心で、長さは約2mであるが中には3m近いものまで存在していた。

橋の北端から南に約4mのところで、約2m程度横木の途切れどころがあり、この途切れた部分を通して荒砂や細砂が南東から北西にかけて薄く堆積している状況が観察された。また、後述する5号杭列がこの砂層に沿うように走っており、このことから、1号橋が機能していた時点では、旧河道はほぼ湿地化し、砂が堆積するこの部分がこの段階の流路であったと考えられる。そして、5号杭列はこの流路に伴う護岸的な機能を果たしていた可能性が強い。通常の天候のときは、ここに水が流れ、降雨によって増水し、水位が上がれば木橋も浮き上がって浮き橋になったのではないかと考えられる。

1号橋が構築されているのは
17層上面（第62図）で、橋の年代は、橋の解体調査中に出土した土器からみて弥生時代後期終末頃、土器形式では草田4～5期頃と推定される。

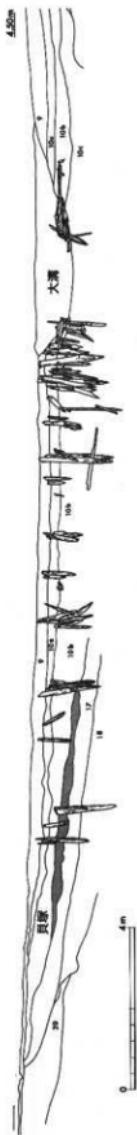
2号橋（第63図、図版35・36-1）

2号橋は1号橋の上流側約9m離れたところに位置し、横木が現位置を保って出土しているのは北側の約14.5mである。2号橋の構造は基本的に1号橋と同じであるが、1号橋にみられた最下面の川

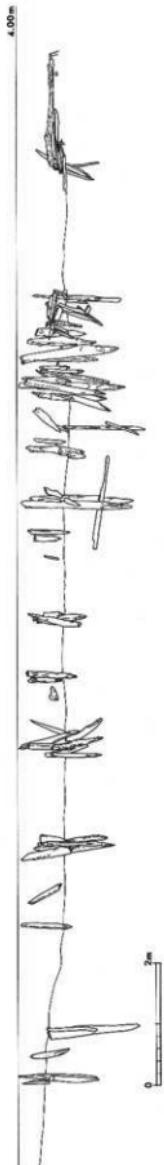


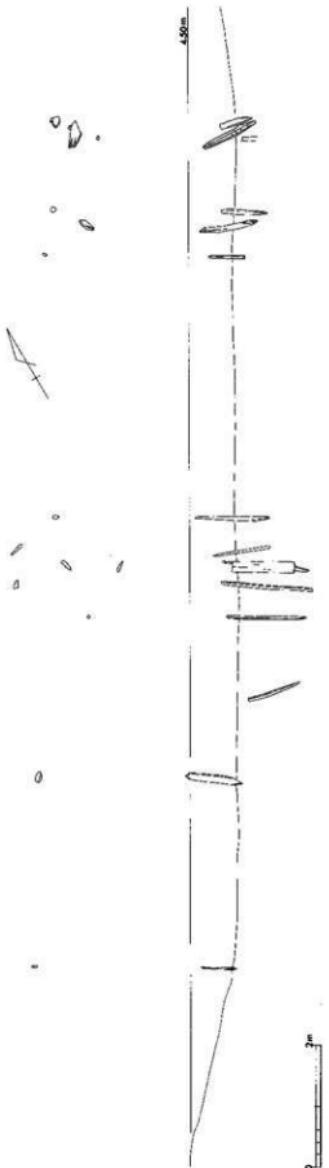
第64図 B区3号橋実測図

第66図 BW区4号橋と土層の関係図



第65図 BW区 4号橋実測図





第67図 BW区5号橋実測図

の流れの方向に平行する枕木状の部材はあまり認められなかった。また、杭自体の本数も1号橋に比べてかなり少なく、本数は50本余りである。橋北端の岸辺に近いところでは、杭がすべて川下に向かって大きく傾いているのが看取される。杭や横木の特徴も1号橋と大きく変わるものではないが、杭の太さに若干太いものが多く、建築部材からの転用も1号橋より数が多い。横木の中には4m近い長さのものが存在した。この遺存状況の良好な部分の南端からさらに5m離れたところにも、やや大形の部材を使った杭の列が認められ、横木などはほとんど確認されなかつたが南岸に達した2号橋の端部と推定された。この大形の杭は北岸では確認されていないので河道中の杭と機能的には変わらないと推定されるが、あるいは梁を渡して桁を組むような構造の可能性も捨て切れない。

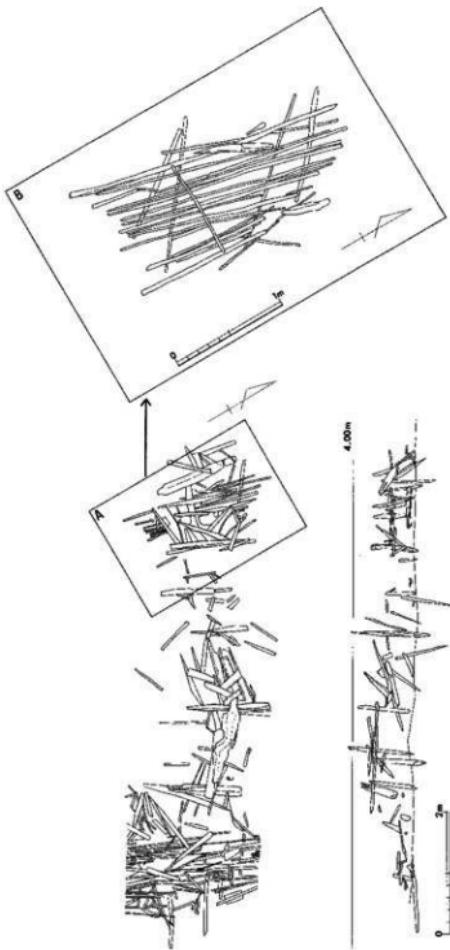
2号橋の構築面も1号橋と同じ土層上なので、その構築年代も一緒と考えられるが、図版36-1のように1号橋と同時期と考えられる5号杭列が、2号橋の横木が並んだ中に打ち込まれているようにみえることから、あるいは1号橋に先行して構築されたということもありうる。

3号橋（第64図、図版36-2）

3号橋は2号橋のさらに上流側に位置する。調査区の東端に位置していることに加え、遺存状況もそもそもあまり良くないため、観察できる部分が限られている。現存長は約3.5mで、幅は約1mである。現存している杭は少なく、もちろん垂直に立った杭は1本もない。杭列の幅は50~60cmで1・2号橋よりも若干広く、その間に細長く薄い板材や細い角材を横木として使用しているが、残っているのは疎らである。遺存量が少ないため断定はできないが、1・2号橋と同様の構造の橋であったと考えられる。

4号橋（第65図、図版44-1・2）

BW区で検出した橋で、橋脚の杭列のみ残っている。第66図で見るよう杭の先端が10b層内か10b層の下面あたりで止まっているものが多いことから、10b層上面当たりから打ち込まれた可能性が強い。杭列は2列で、川の流れに直交するように南西岸から北東方向に伸びており、長さ12.6mを測ることができる。東西両列間の距離は杭の真芯で1m～1.25mで、各列の杭と杭との間隔は1mから1.4mと一律ではないものの、東西両列の杭が同じ間隔できっちりと対をなしている状況が観察され、一部杭が抜けてないところもあるが端から端までおよそ11対が並んでいたと推定される。北端の杭から南に3.5mと7.3mのところの2箇所には平行する杭列よりも幅の広い1.5mの間隔でやはり一対の杭が打ち込まれているのが観察されるが、これらは橋桁を支える支柱として、橋脚とは別に打たれている可能性がある。また、北側の一対のうち、下側の杭の根元では川の流れに直交す



第66図 B区1号杭列および底部木組実測図
(BはA部分の上部木組を除去した状態)

るよう長さ1.6mの板が横になった状態で出土した。あるいは杭を立てる際の足場とか杭の倒壊を防ぐための補強材であった可能性もある。

各々の杭は太さが上端で15cm前後、根元では20cm前後にも達する太いものが多く、スギの芯を外した偏材をわざわざ丸く加工したものである。上端に梁なり桁を噛ませるためのU字の縦り込みを持つものも存在する。

橋の北端はちょうど大溝に突き当たったところで途切れしており、そこから川の下側に杭列がL字形に向きを変えている。そして大溝の肩のところには護岸状に細目の杭と横木が大溝に平行に設置されており、そこからさらに2m離れたところにも杭列と横木が認められる。このことから4号橋が築かれていた頃には、大溝の原形となるような流路がすでに形成されつつあり、4号橋はそこへ向かって築かれた棧橋状の構造物であったことも考えられる。なお、この4号橋北端の杭列のまわりから、この付近では採集できない拳人の河原石が甕形土器とともに数十個固まって出土した（図版49-3）。

5号橋（第67図）

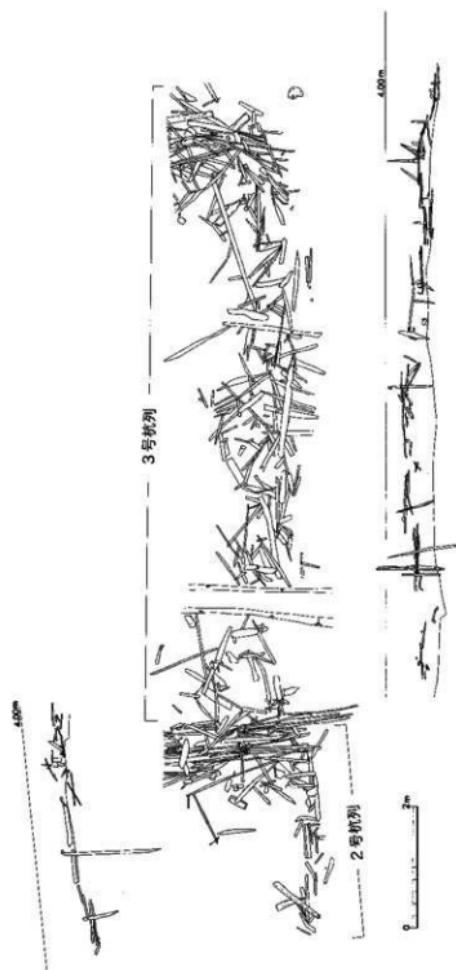
5号橋はBW区の南西壁面の中で検出した杭列である。検出した本数が少ない上、疎らに並んでいるため、原状を推定しにくいが、杭列が幅50~60cmの間隔で並んでいたと推定される。杭の大きさはまちまちで、角材や板材を転用したものが多く、幅の広いものでは15~20cmに達す

る。不明な部分が多いが、河道に直交する杭列ということで木橋として扱っておく。

②護岸施設

1号杭列（第68図2、図版36-3、37-1・2）

B区北東岸の護岸施設で、1号橋と2号橋の間で検出したものである。長さ1~1.5mの板材やみかん削材から加工した杭が基本的に一列に40~50cm間隔で並んでいるが、必ずしも一直線とい



第69図 B区2・3号杭列実測図



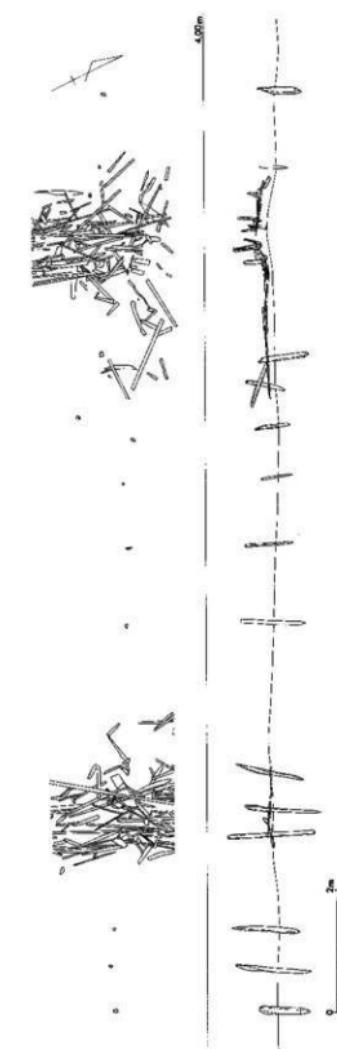
第70図 B区 4号杭列実測図

ほどのこともない。いずれも上端が朽ちて細く尖っており、川の中央のほうに傾いた状態で検出された。横木は板材や自然木を使用しているが、杭列に対して斜めに交差した状態のものが多く、現位置を留めていると判断できるものは少ない。杭の傾き具合などから考えて、A区側からの洪水による土砂によって河道中央部に向かって傾いてしまい、土留め用の横板も多くが流されてしまったと考えられる。この1号杭列の構築時期は、残存する横板上面のレベルが川上に築かれている2号橋の横木上面よりも40cm余り高いことから、2号橋よりも新しく、1・2号橋を覆っている10b層上面あたりから打ち込まれていると考えられる。

なお、1号杭列西半の杭や横板を除去した際、最下面から3~4cm程度の太さの細長い角材を使って、川の流れに沿って4本木を並べ、その上に1・2号橋で使用している細く割った板材を十数本敷き詰めた遺構が検出された（図版37-3）。この部分は1号橋のすぐ上流に当たり、1号橋建設に当たって湿地にはまらないようにするための作業台あるいは1号橋にいくための通路のようなものであったと考えられ、1号杭列よりも1号橋に伴うものであると推定される。

2・3号杭列（第69図、図版36-3、37-1・2）

1号杭列の北側で発見された杭列で、2号杭列は2号橋の上流側に、3号は杭列は1号橋と2号橋の間に築かれている。2号杭列は遺存状況が悪く、現存長は約3mである。2号橋のすぐ隣に杭ではなく、しっかりと打ち込まれた杭は2m離れたところから1m間隔で2本残存するのみである。横板のレベルと2号橋の横木を比べてみてもほとんど同じ高さなので、2号杭列は2号橋と一連の遺構と考えよう。3号杭列は1号杭列の北側にほぼ同じカーブを描きながら平行に構築された杭列で、横木の上面



第71図 B区5号杭列実測図

は上流側では2号橋よりも高い位置から始まり、下流に向かって一旦高くなつたあと、やや急角度に低くなつてゐる。杭列は中央付近では一部二列に打ち込まれており、この杭列が機能していた時期に、一度補強の意味で杭の打ち直し（追加）を行つた可能性がある。杭は幅が10cm程度、長さ1.5m程度までの板材やみかん割材を使用しており、20cmから30cmの間隔で密に打ち込まれてゐるが、1号杭列同様すべて河道中央部に向かって傾斜している。横板も杭列に平行して残つてゐるものは極めて少なく、杭列の間から一方の端を河道中央部に向けるものが多い。3号杭列の構築時期も1号杭列とほぼ同じ頃と推定される。

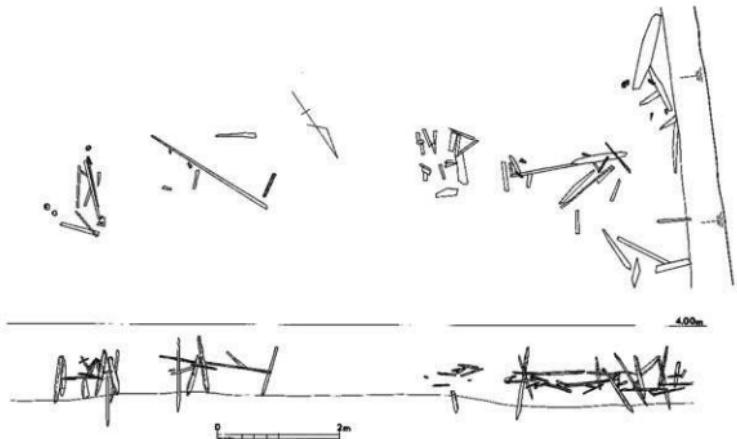
4号杭列（第70図、図版38-1）

B区東岸護岸施設のうち、一番下流側に築かれた杭列で、1号橋から下側に長さ約7mにわたつて出土した。1号橋を介して1号杭列や3号杭列とつながつてゐるが、並びが両杭列とずれており、どちらとも連続するものではない。杭は、遺存状態の良好な中央付近では、30cmから40cmの間隔でほぼ垂直に立つており、西はさらに壁の中まで続いてゐる。杭の太さは10cm程度の比較的細いもので、横板から下に埋まつた深さは40cm程度である。横板は杭に比べて大きなものが多く長さも2m近いものもあるが、杭列と平行に出土せずにほとんどが河道の下流中央の方向に向いてゐる。横木の中には建築部材を転用したものがあり、ほど穴があいた板状品が観察される。

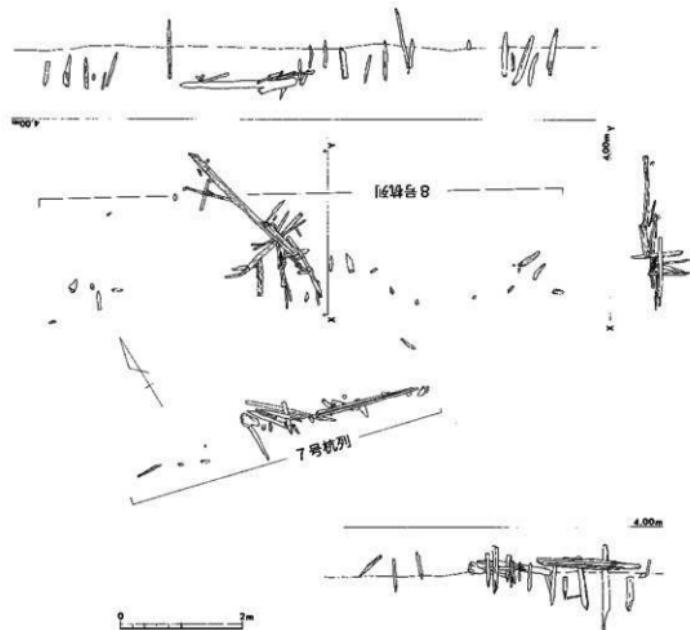
1号橋と接するところの杭が欠けてはいるが、4号杭列を延長した先の1号橋の中には、4号杭列の杭と同じような杭が立つており、加えて横板のレベルが1号橋の横木のレベルと一致していることから1号橋と連続していた可能性が強い。

5号杭列（第71図）

1号杭列の南側に検出した杭列で、1号橋と2号橋を跨いで川の流れに平行するように打ち込まれており、現存長は15.3mである。本当に杭しか残つてない杭列で、現存している杭の数は17本を数える。



第72図 B区 6号杭列実測図



第73図 BW区 7・8号杭列実測図

1号杭が途中途切れたところに溜まっていた砂層に沿うように打ち込まれていることから、1号橋とほぼ同じ時期と考えられることは前述したとおりである。杭と杭との間隔は60cmか80cmで、2号橋のところだけは40mの間隔になっている。

6号杭列（第72図、図版38-2、39-1・2）

B区南西岸の護岸施設であるが、北東岸の施設に比べて極めて貧弱である。検出した杭列は河道南西岸の肩部から6~7m川の中に入ったところに、河道の肩と平行に中央部分の3.7mと西端の4.8mが発見された。中央部分の杭は直径10~15cmの丸太を用いたものや幅20cm近いみかん削材を使用したものが多く、

西端の杭は幅15cmくらいまでの板材が多く使われている。残っている横板も極めて少なく、原位置を保っていると考えられるものはごくわずかである。長さは2mを越えるものもあるが、大半は1m前後のものである。

7・8号杭列（第73図、図版44-3）

BW区の4号橋が途切れたところで検出した杭列である。7号杭列は4号橋の先端にちょうどT字状に接するように打ち込まれたもので、大溝の流れの方向とはわずかに向きを違えている。東半で横板が杭列に沿うように出土した。横板は二組あり、東側の横板は6~7本の杭を打ち込んだのち南側に板を二段に重ねたもので、横板の長さ1.3m、重ねた板の高さ25cmを測ることができる。西側の横板は北側に若干向きを変えている。4号橋の先端の橋下と思われる位置には小径の丸木杭が何本も打ってあり、その北側に幅20cmの横板が2本の杭で固定されている。西端の杭列には横板は絡んでいない。8号杭列は大溝の反対岸に相当するところに並んだ杭列であるが、7号杭列とは方向が異なっていて、むしろ大溝の方向に一致しているといえる。やはり小径の丸木材を使った杭が多く、杭に沿って残っている横板はなかった。杭列中央には自然木を使った横木を川の字に3列に並べて杭で固定し、その上に直交する横木を渡してさらに長さ1.8mもある大きな丸木を乗せた遺構が発見された。一番上の丸木も丸木杭で固定しており、ちょうど4号橋の延長線上にあることから4号橋に絡んだ遺構の可能性が強いが、本来どのような構造で、どのような機能があったのか推定するのもなかなか困難である。

これらの杭列は4号橋とその頃の流路に関係した杭列と考えられる。

9号杭列（第74図）

BW区北西端の10c層の面で検出した杭列である。不規則に並んだ杭列で、しかも東側で杭をまったく検出していないことから断定はできないものの、B区4号杭列に続く河道北東岸の護岸施設と考えられる。これらの杭が打たれた時期も、層位からみて4号杭列と同時期と推定される。

10号杭列（第75図、図版46-1・2）

BW区南西岸で検出した杭列で、岸の肩にあるSD21のところを頂点にして河道斜面をハの字状に広がる杭列である。杭の過半数が直径10cmまでの丸木杭で、その他は板材である。板材を使ったものは比較的遺存状態が良好で長さも70~80cmのものが多いが、丸木杭は遺存状態が悪い。杭の打



第74図 BW区9号杭列実測図

ち方は20~30cmおきに数本ずつ固めて打ち込んでおり、川の中に進むにつれ、間隔が広がっている。

頂部にあたるところはSD21の先端がせり出したところに相当するが、SD21の中に打つというではなく、その両側縁に平行して打っている。このことから考えて、この杭列はSD21と密接に関係するものであり、やはり護岸的な施設といえよう。

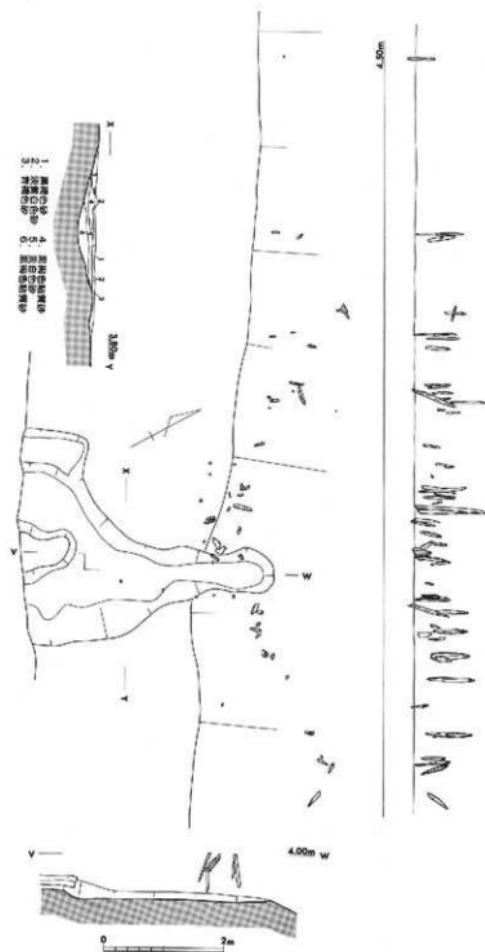
③その他の遺構

SD21（第75図、図版48-2・3）

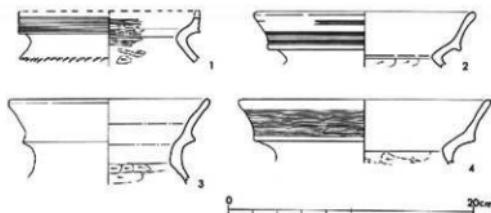
上述の10号杭列に続く溝状遺構で、BW区南西岸上面中央付近で検出したものである。BW区では南西岸の肩が2.4~2.8mの幅で確認できており、SD21は肩に直交するように検出された。現存長は4.1mで、肩の稜の部分では幅0.8m程度であるが、壁面側では幅1.3mの溝と1.8mの溝の二つに分かれている。溝下半には炭化物片を含んだ黒褐色の粘質砂が堆積しており、底面直上で土壤分析の試料採取を行った（分析結果は第5章参照）。

第76図は黒褐色粘質砂から出土した土器である。

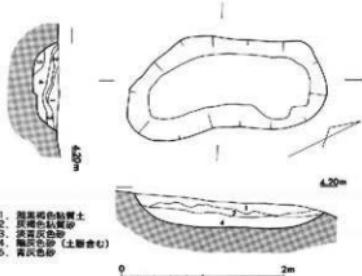
1は口縁が垂直に立ちあがる壺形土器で、口縁外面に



第75図 BW区10号杭列及びSD21実測図



第76図 BW区SD21出土土器実測図



第77図 BW区SK21実測図

みをもってなだらかに立ち上がる。内部下半には暗灰色砂と青灰色砂が堆積し、青灰色砂の下面では植物の実や細い葉などを含んだ有機質土が1~2cmの厚さで堆積しているのが観察された。土器も含まれていたが細片で時期を特定するに至らない。

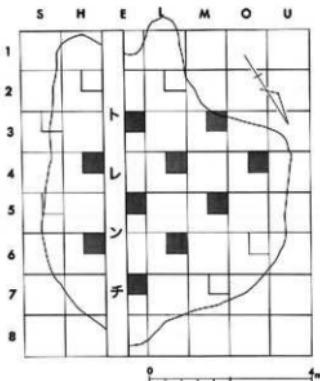
(2) 貝塚

BW区では自然河道の南西斜面で貝塚も発見された。ほぼ同じ位置で確認した4号橋の橋脚を残しながら10b層を掘り下げていたところ、10b層上面から約40cmほどのところ（第66図参照）で、直径約5mの円形の範囲にヤマトシジミを中心とした貝層の広がりを確認したものである。貝層の広がりが限られていたため、発見当初は直ちにグリッドを組んでグリッドと層ごとに少しづつ取り上げることも考えたが、時間的な制約があったため、まずは貝層の厚さを確認することにし、4号橋の平面実測用の基準線をそのまま用いて幅50cmのトレーニチを設定して貝層下面まで一気に掘り下げる。その結果、貝層は中央の一番厚く堆積しているところで約40cmの厚さがあることが判明するとともに、貝層も貝の大きさや混在する砂の色調で何層かに分層が可能であることが判明した。これにより、すべての貝を分析するには時間的に無理があると判断し、1mメッシュの調査グリッドとそのグリッドの中にさらに試料採取用の50cmのグリッドを組むことをした。すなわち、調査区としてもう一度トレーニチの基準線を基準に、1mのメッシュを貝層全面にかけ、南東隅から西にむかってS、H、E、L（L）、M、O、U、N、Dという記号を付け、北には1~8の番号をふるとともに、第78図のように市松模様に、東西方向1mおきの、グリッド南西隅（グリッドの四分の一）にそれぞれ試料採取箇所を設定した。調査の結果、貝層の範囲は最終的に南西の河道肩部に向かってやや突き

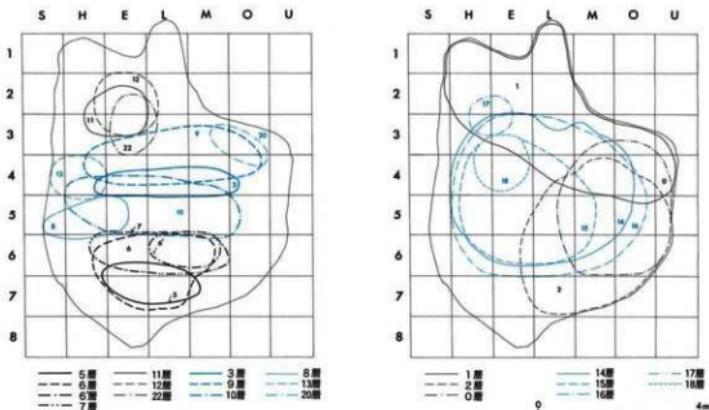
平行沈線文を施した門生II期ないしIII期併行の土器である。2~3は口縁が大きく外反する土器で、2・4には貝殻腹縁による併行沈線文がはいる。いわゆる的場式といわれる土器群で、草田3期あるいは塩津2期に併行するものである。

SK21（第77図、図版48-1）

BW区SD21のすぐ北側で検出したもので、B・BW区では唯一の土坑である。全長2.4m、幅1.1mで、平面形は靴の形をしている。底面は平坦で、壁は丸



第78図 BW区貝塚の調査グリッドと分析試料の採取箇所（網目部分）



第79図 BW区貝塚各貝層の堆積範囲図

出した格好になったが、分析用のサンプリングを行ったのは第78図中網目部分の10個所である。

この貝塚の形成された時期は、平面形があたかも4号橋の上から廃棄されて堆積したような形状を示しているが、4号橋の項でも記したように、橋と貝塚とも間には時間的な隔たりがあって同時期の所産と考えるには無理がある。ここではむしろ、4号橋とも同じ位置になっているSD21との関係のほうを有力視したい。

貝層の層順と広がり（第79・80図、図版43-2、45-2・3）

貝塚を形成している貝層は基本的にすべて混貝砂層である。河道の緩やかな斜面に堆積している割には貝層一枚一枚の厚さが10cm以下と薄く、一回の廃棄量や廃棄期間の短さを推測させる貝塚である。貝塚の層順は大きく5層に分けることができる。

I層（第1・19・0層）

河道の一番肩寄りで貝塚最上面に堆積している貝層である。2層からなっており、第1層は黄褐色の混貝砂層で、貝の量はかなり少ない。河道の鉄分が付着して黄褐色を呈し、しかも砂と貝が堅く結合して引き締まっている。第19層は基準線のEラインの西側で砂が多くなる。なお、0層は貝層断面図にかからなかった層で、貝塚北西半に広がるものである。やはり鉄分が多く、砂と貝の固まった層である。

II層（第2～5・8・9・13層）

貝塚全体に広がる上面の貝層である。河道中央に近い第2・5層は黄褐色ないし茶褐色の粘質土で、貝の量は少なく、第1層に近いものである。第3・4・8層は暗灰色の破碎貝層であるが破碎の状況が際立っているというほどではない。殻長2～3cmの大形のヤマトシジミが比較的多く見受けられる。第9層では砂の比率が高くなり、第13層は貝の量は変わらないが、黒青色の粘質砂が混入するブロック層である。第9層が貝塚南西半に広く堆積するが、その他は分布範囲が限られている。

III層（第6・7・10層）

河道中央側の上層に相当する位置にあり、全体的に黒っぽい色調の層で貝の大きさは殻長2.0cm～2.2cmのものが中心であるが、3cmから4cmの大形の貝も多く見受けられる。第7層は基本的に間層と思われるが、上下のしっかりした貝層に挟まれて貝の混入も認められる。

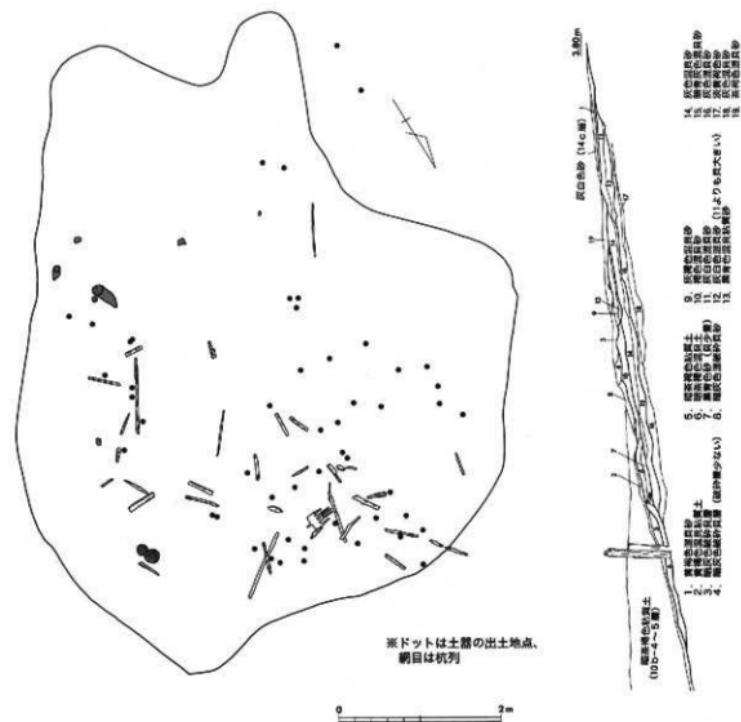
IV層（第11・12・14・15・20・22層）

本貝塚の中位に堆積する貝層で、基本的に灰色ないし暗青灰色の混貝砂層である。殻長2～3cmのヤマトシジミが中心で、特に第11・12層中のものは外表面が鮮やかな淡褐色を呈している。また、ヤマトシジミのほかにカワニナも散見される。

第22層は11層と12層の間で発見されたブロック層で、黒青色の粘質砂層である。なお、第20層は貝塚西端にブロック状に堆積していた貝層で、22層に続くと考えられる黒褐色砂の下層にあり、砂と貝が固まつた褐色の砂層である。

V層（第16～18・6¹層）

本貝塚の最下層を構成する貝層である。16・17層は断面では貝の出土が少なく、間層のイメージ



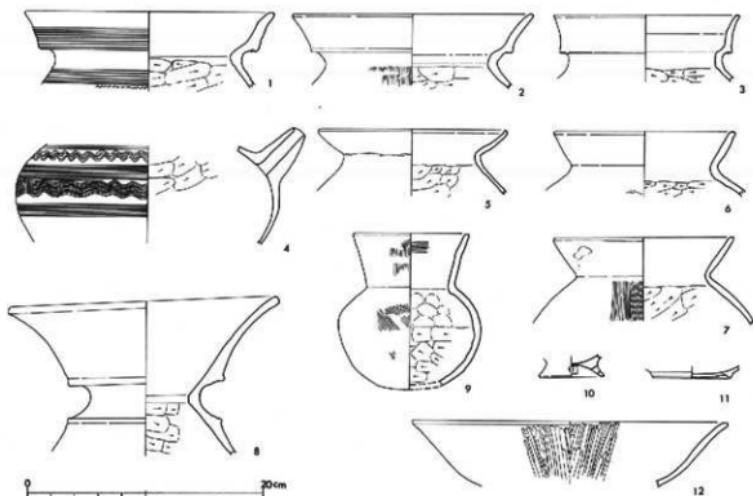
第80図 BW区貝塚土層及び遺物出土状況実測図

が強かつたが、平面的に追うと16層からの出土も多く認められた。貝は3~4cmの大形のものが多く、色調は外表面が黒色を呈していて、現在でも宍道湖の名産となっているヤマトシジミを思わせる。

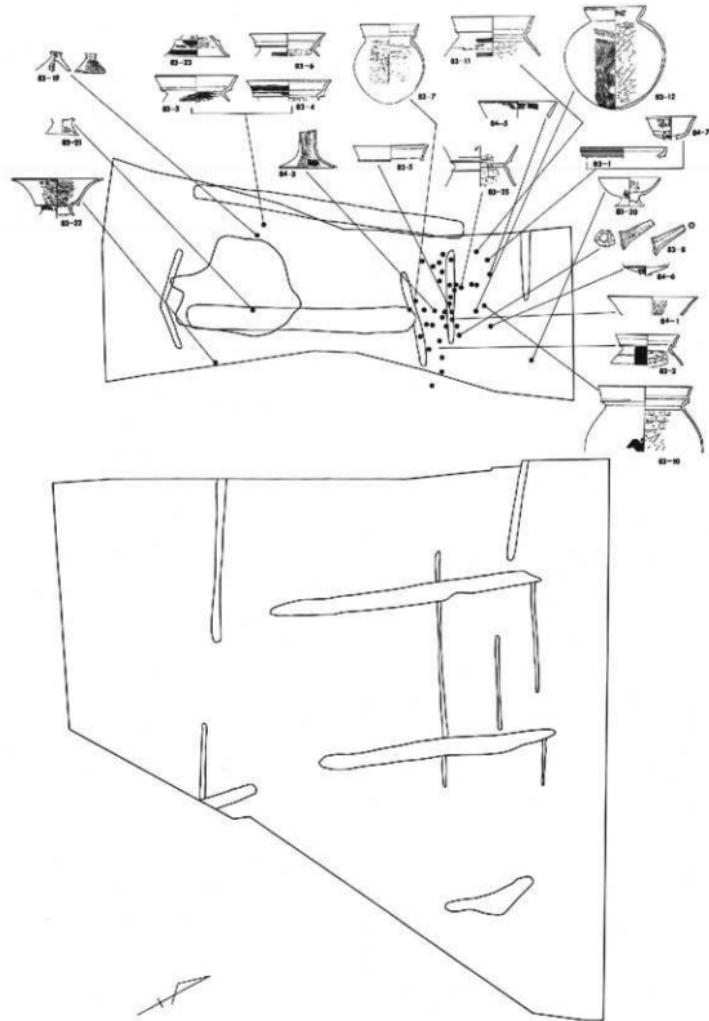
資料の整理

貝塚の資料は分析試料とその他の層位別資料とに分けて取り上げたが、整理の手順としては、どちらもまず第1段階として3mmメッシュの籠を用いて、貝類とその他に水洗選別し、貝類はヤマトシジミとその他の貝類に分類した。第2段階はその他の資料について籠を1mmメッシュに落として有機物と、土器や石、砂などを選別し、第3段階としてその有機物を今度は魚介類、植物種子類、その他の植物片に分類した。グリッド採取の有機資料についてはこの段階で取りあえず水漬け保存するとともに、第1段階で選別したヤマトシジミは採取資料ごとに重量の記録をとったのち、出土地点に埋め戻し保存した。そして、分析試料についてはさらに第4段階として魚介類から微小貝類や魚骨類を選別し、その後、各分析者に試料の分析を依頼した。

詳細は第4章に譲るとして、採取した資料の一部を紹介すると、貝塚からは主体となるヤマトシジミのほかに、カワニナ、タニシ、ヒラマキガイの一種、イシガイなどの淡水棲のもの、ザザエ、ヨメガガサなどの外湾の岩礁棲のもの、カンスガイ、イシマキ、イソシジミガイ、イガイなどの河口域の岩礁棲のもの、チョウセンハマグリ、サルボウ、アカニシ、オオノガイなど泥海底棲の貝類が出土しており、ウニのトゲも多数出土している。ヤマトシジミをはじめ、二枚貝はすべて韌帯が分解して左右両殻が分離した状態で出土している。植物種子類については、木本植物ではイヌザンショウやサンショウ、モモ、サクラ属の核をはじめブドウ属の種子が比較的多數出土しているほか、草本植物のキュウリ近似種、ヒヨウタンなどの種子、ホタルイ属やシソ属の果実、ヒシ属の果実ト



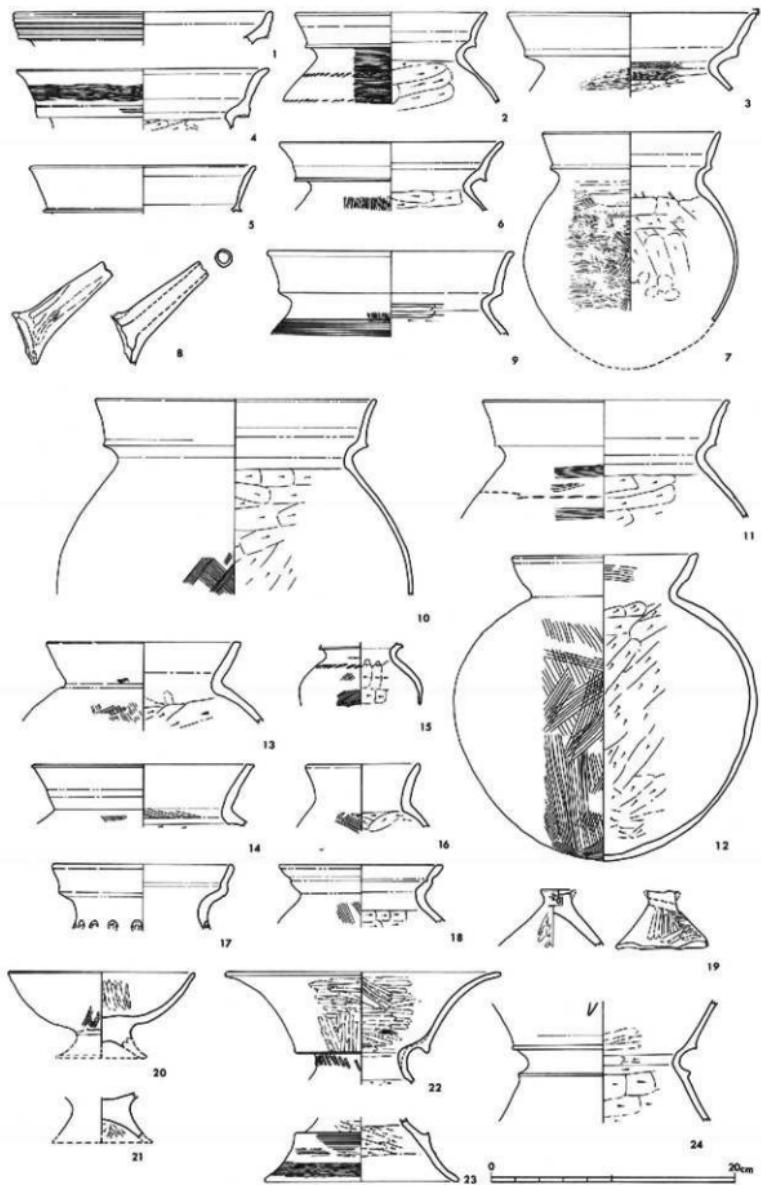
第81図 B・BW区9層出土土器実測図



※土器の番号は挿図番号を示す。
ドットのみは變形土器片の出
土地点を示す。

0 10m

第82図 B・BW区大溝及び大溝下面土器出土状況



第83図 B・BW区大溝及び大溝下面出土土器実測図(1)

ゲなどが出土している。昆虫化石群で特徴的なのは、IV～V層からコブマルエンマコガネやマグソコガネなどの食糞性の地表性歩行虫とともに、ゴミシ、ゲンゴロウ、オオミズスマシ、ミズスマシなどの流れのない水環境を好む水生昆虫や、ヤマトタクリゴミムシ、セマルガムシなど水田内に棲息する昆虫の化石が発見されたことである。これらはいずれも当遺跡やこの地域の弥生時代終末期ころの環境を推定する上での重要な資料となるものである。

なお、貝塚内から出土した土器や木製品については、次項で自然河道内の出土遺物として一括して報告する。また、この貝塚からは分析試料以外にモモの核が1500個近く出土している。

(3) 自然河道内出土遺物

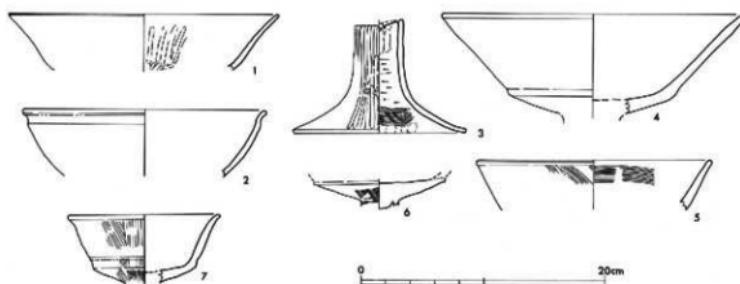
B・BW区の自然河道内からは多数の土器や木製品が出土している。その中心は河道中層の10b層とそれに続く層、および河道下層の17層とそれに続く層(55～61ページ参照)であるが、河道上層や河道最終段階の層から多くの遺物が出土している。また、各層とも、河道左右の護岸施設や河道にかかる橋脚の周辺に固まって出土しているものが多く、遺構と遺物が密接に関係している可能性がある。よってここでは、上から各層位ごとに出土地点を示しながら、土器そして木製品という順で報告していく。

なお、ここで用いている各遺物の層位は、B区中央に設定した十字のトレント(第57図断面A-B)、並びにBW区南東壁面(同図C-D)の上層を基準レベルとして、各遺物の出土レベルを調査区ごとに両断面図に投影させたものである。こういう手法を取ったのは河道の幅や両岸の形状が調査区内のどの部分をとっても変わらないこと、B区の十字トレントのG-H断面(同図)をみても河道内に上流と下流の差がほとんどなく、土層が水平に堆積していることなど、出土地点を二つの土層断面に投影しても大きな誤差は出ないと判断したからである。しかし、そうはいっても河道内の堆積ゆえ、必ずしもすべての遺物の層位が正しいと言い切れないのはいうまでもない。

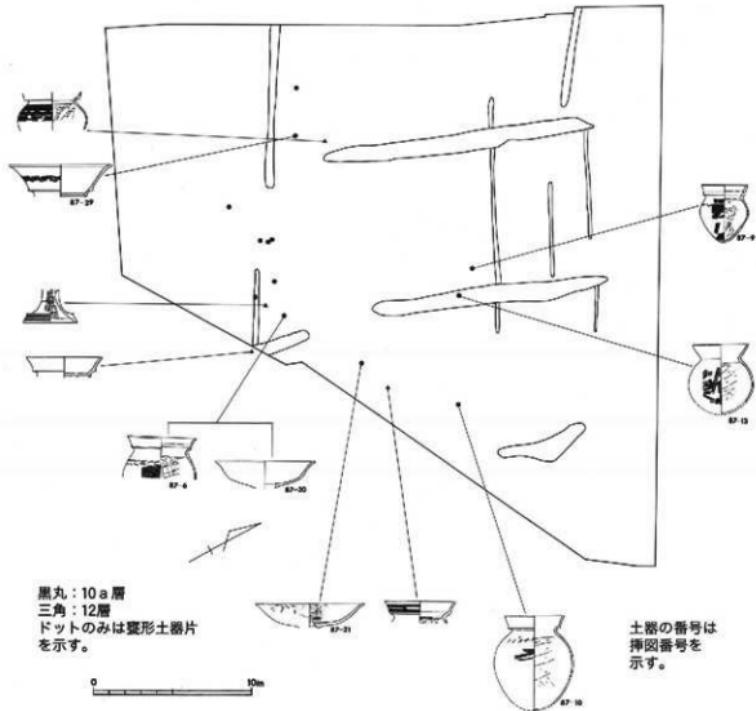
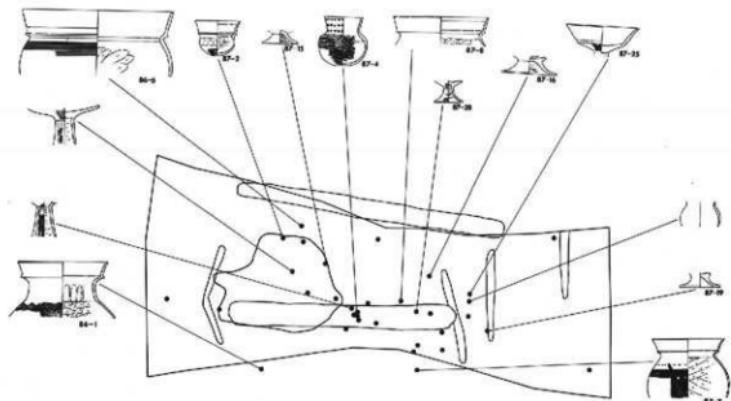
①土器

9層出土土器(第81図)

9層は河道上層の10a層の上にあって、大溝を除いた河道内の全域と南西岸の上面まで堆積が確認された層である。遺物の出土量は比較的少ない。第81図1～3、5～7は變形土器の口縁部で、1・2は立ち上がりが大きく外反するものである。1の口縁外面には7条の摺凹線文が廻り、肩部



第84図 B・BW区大溝及び大溝下面出土土器実測図(2)



第85図 B・BW区10a層(12層を含む)土器出土状況

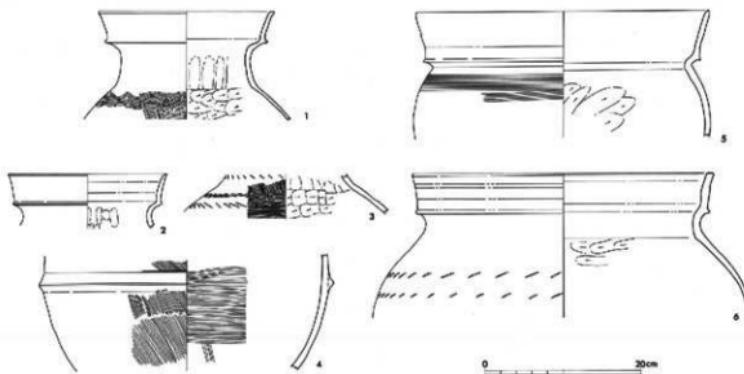
には5条のヘラ描き平行沈線文とその下に斜行短沈線文が廻っている。5～7は古式土器の臺形土器で、いずれも近畿系の土器である。5は復元口縁径16cmの薄手の土器で、口縁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部内側を擒み上げるように若干突出させる。頸部内面は丸く屈曲する。6はやや厚手の土器で、口縁の立ち上がりがあまり湾曲しない。口縁上端をやや平坦に作り出し、頸部内面の丸みは5と同じである。7は口縁の立ち上がりが一層直線的になっており、口縁端部は丸く仕上げている。これらの年代的な位置づけはなかなか難しいが、松山智弘編年のII期に相当すると考えられ、5世紀前半から中葉ごろに位置づけられよう。9は小型の直口壺で、器高13.2cm、口径は9.6cmである。胴部はほぼ球形で、内面上半にはナデ、下半にはヘラ削りを施し、外面には刷毛目調整後ナデを施している。八東都玉湯町大角山遺跡で類似した土器が出土しており、松山編年のII期新段階に位置づけられているのでやはり5世紀中葉に近い時期のものと考えられる。

4は注口土器である。当遺跡から出土する注口の中では長さが4cmと一番短く、やや肉厚で太目の作りとなっている。外表面に平行沈線文を多用するという特徴から従来の的場式併行の土器であろう。8はそれよりもやや時期が新しい段階の鼓形器台である。口径に対して器高が比較的に高く、受け部にも脚台部にも平行沈線文等が観察されない。また、12は高环の坏部片である。底面と口縁の立ち上がりの境に特に屈折とかがなく、なだらかに移行している。どちらも草田5期あたりに併行すると考えられる。10の低脚坏の脚部には、一箇所に直径4mmの円形の穴が斜めに穿孔されている。やはり器台や高环同様弥生時代終末頃と考えられる。

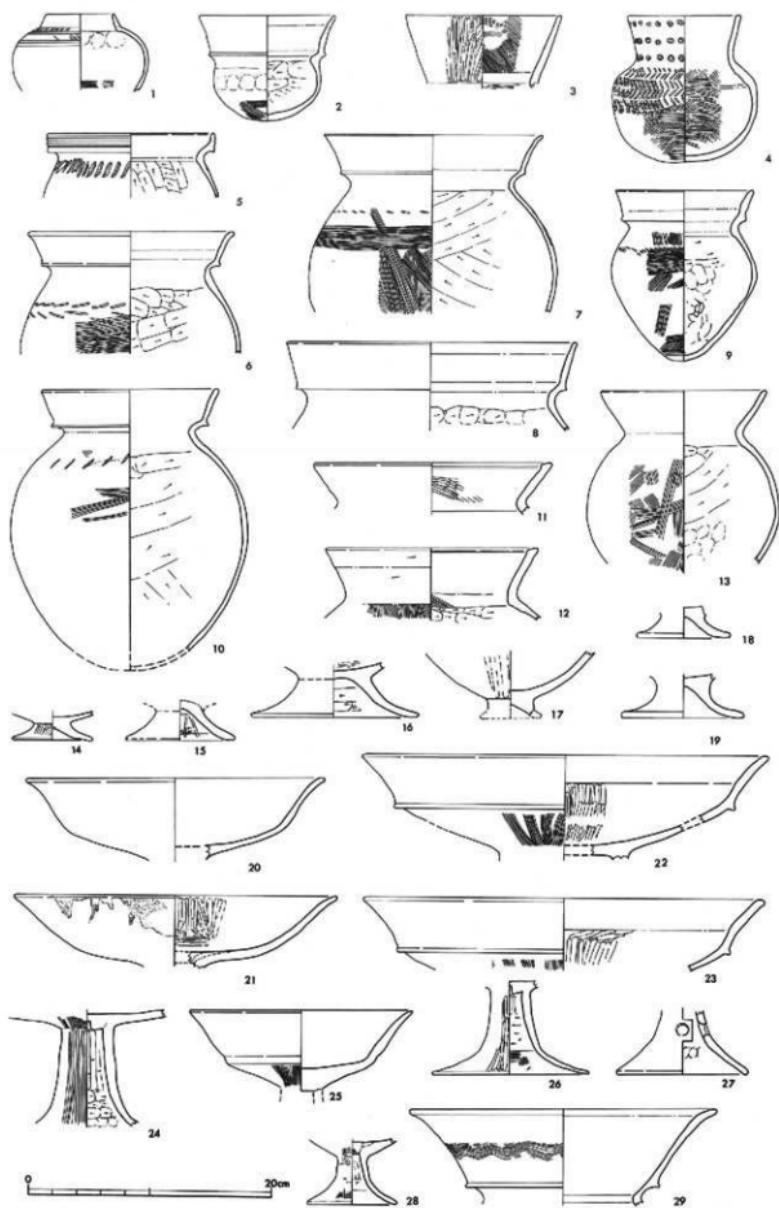
11は今までの上器と違って、B区南西岸上面に薄く広がっていた9層中から出土したものである。器厚3mmの薄手の白磁皿で、高さ3mm、断面三角形の小さい高台が付く。高台外面下端には重ね焼きをするため、焼成前に釉をかきとった部分が2mmの幅で廻っている。釉はやや黄色味の加わった白色で、およそ16世紀以降のものと推定される。9層の上には中世以降の堆積層があるので後世の混入品と考えられる。

大溝および大溝下面出土土器（第83・84図、図版51-3、52-1）

B区北東半で、61ページでも記したように、9層上面から幅4～5mの大溝を検出したが、これ



第86図 B・BW区10a層（12層を含む）出土土器実測図(1)



第87図 B・BW区10a層(12層を含む)出土土器実測図(2)

が最終的に埋まつたのは中に含まれている土器から、奈良時代から平安時代以降であると推定できる。しかし、その大溝自体が形成されていくのは、橋の項目でも触れたように、1号橋や4号橋が機能していたと考えられる弥生時代終末から古墳時代頃からと思われる。大溝部分がその当時から、水の流路として河道のその他の部分よりも土砂の堆積と流出を頻繁に繰り返していたことは想像に難くなく、遺物がより古いものから新しいものまで渾然と出土することも容易に想像されることである。ここでは包含層中の不確定要素をなるべく取り除くという意味で、大溝中と大溝下面周辺を取り上げた上器を、擾乱を受けた可能性がある上器群として一括して報告する。土器の出土状況は第82図で明らかのように、BW区の大溝と7号杭列や8号杭列に関わる格好で出土している。BW区に比べB区に土器の出土が見られないのは、B区出土土器の絶対量が根本的に少ないと大きな要因である。

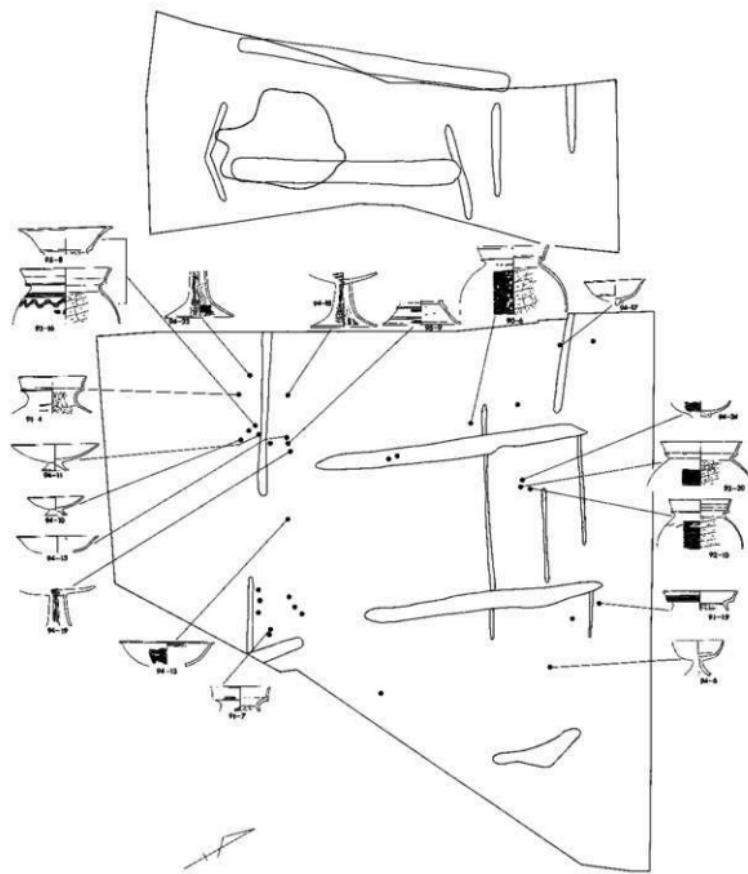
出土した土器をみると、壺形土器は1の後期初頭の土器（松本岩雄編年V-1様式あるいは草田1期）から、12の5世紀後葉の土師器（松山編年IV期）まで幅広く出土している。1は、内湾気味に短く立ち上がる口縁の外面に4条の擬凹線文を施した土器で、器厚がやや厚手である。2～7・9～11は複合口縁の立ち上がりが、長くしかも外反する土器群である。口縁外面の下端と口縁端部の形態に二種類あり、口縁下端では丸みを持たせて稜線を立てないもの（3・9）と、明瞭な稜線を作り出すものがある。口縁端部ではやや丸みをもって収めるもの（3・9・11）と、尖り気味にするものがある。これを最近の編年案に照らし合わせると、それぞれ前者が草田4期、後者が草田5期の特徴を示す。これらとほぼ同じ時期と考えられるものに15・21～24、第84図1～4がある。15はミニチュアサイズの壺形土器、22～24は器台で第84図は高壺類である。高壺の1と4は丹塗りの可能性があり、4は体部が直線的に大きく開く、近畿系の土器である。

12・13は口縁がやや内湾しながら立ち上がる厚手の壺形土器で、口縁端部が平坦になり、胸部は球形を呈する。14はそのやや大型品である。17・18は退化した複合口縁をもつ壺および壺形土器で、前者は松山編年II期の新しい段階、後者はIII期頃に相当する。16は直口壺、20は低脚壺と思われるが、これもII期新段階からIII期頃と推定される。第84図5～7も古墳時代の高壺である。5は口縁の立ち上がりが短く、外面ともに刷毛目調整痕を残している。6・7は小形の高壺で壺部底面と体部との境が明瞭で、口縁端部は小さく外に折れる。5が松山編年II期新段階、6・7がIII段階に相当すると思われる。

10a層出土土器（第86・87図、図版52-2・53）

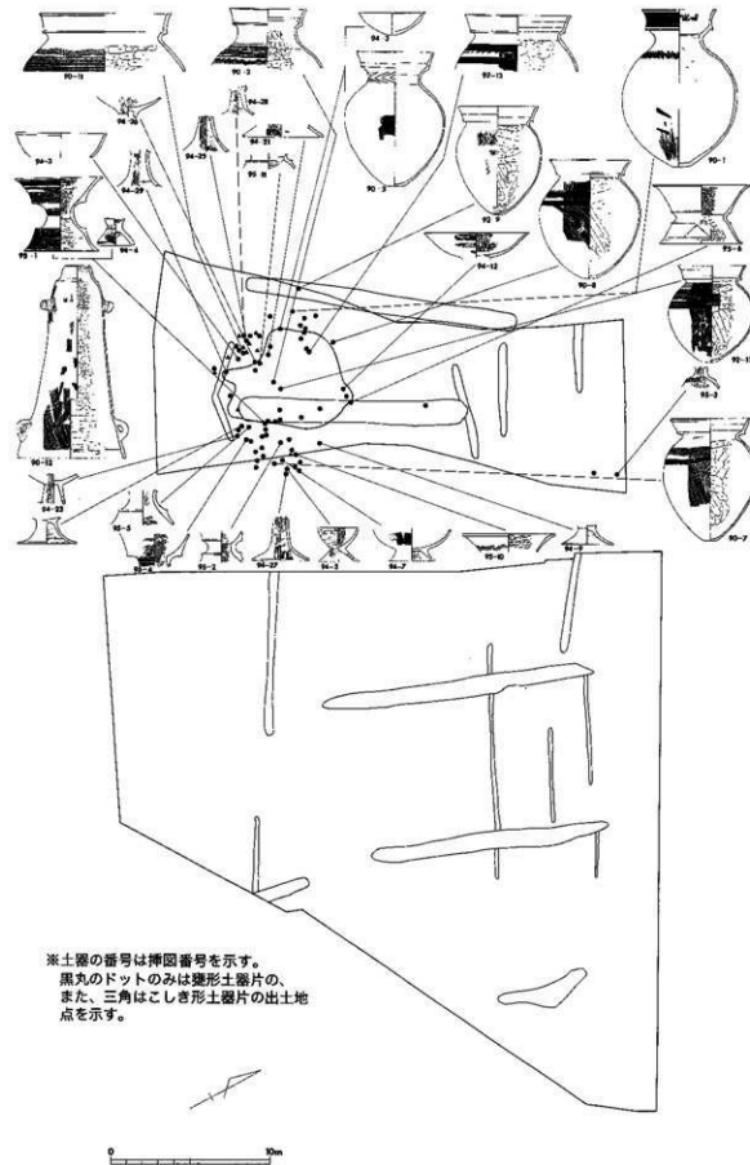
10a層は自然河道の上層をなしている層で、南西岸側の12層を含めて報告する。遺物の出土量は中層や下層に比べて少なく、南西岸と4号橋の橋脚付近に集中して出土している（第85図）。壺形土器の出土が最も多いが、器種別の傾向として高壺や低脚壺、小形壺、器台などが多く目に付く。

第86図1～3は複合口縁の壺形土器である。口縁外面下端は水平方向に三角形に突出し、口縁端部は平坦面を作り出している。肩部外面には1は貝殻腹縁によると思われる波状文が、3には刷毛目原体による羽状刺突文が施されている。草田6～7期の土器である。4は九州系の壺形土器の胸部で、条線の間隔の広い刷毛目調整痕が内面は横位に、外面は縱方向にはいる。球形の胸部の一帯張った部分に幅広で低い断面三角形突帯を巡らしており、西新式の新段階あたりの土器と考えられる。5・6は人形広口の壺形土器で、5は口縁径36.4cm、6は38cmを測る。胸部下半の形状がわからないが、鉢形の土器になる可能性もある。



※土器の番号は弔図番号を示す。
ドットのみは菱形土器片を示す。

第88図 B区10b層土器出土状況



第89図 BW区10 b層上器出土状況

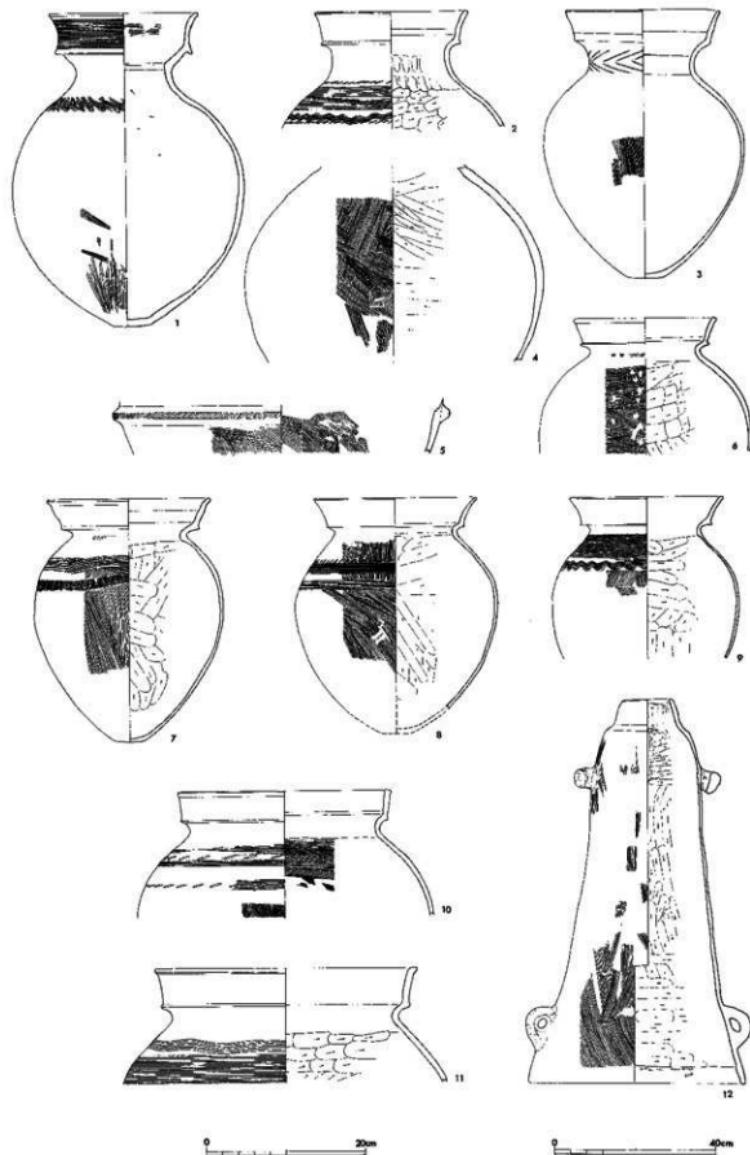
第87図1は小形の直口壺であるが、口縁の立ち上がりは直口というよりむしろ内傾している。肩部に細線の平行沈線文と貝殻腹縁による刺突文が交互に二段ずつ施されている。須恵器の短頸壺を見ているようだが、弥生後期終末、松本編年のV-4様式併行と考えられる。2は小形の丸底壺で、口縁が複合口縁になっている。畿内系丸底壺の影響を受けた土器で興味深い資料である。3・4も直口壺であるが、3は直線的に開く口縁の外側に縱方向のヘラ磨きを施す。4は、頸部がくの字状に明瞭な稜が立つことがなく、口縁外面に半截竹管を二度押してつけた円形竹管文、球形に近い胴部の肩には貝殻腹縁を用いた斜行刺突文を綾杉状に向きを変えて5段に施してその下に円形竹管文を巡らしている。3は草田1期、4は一見古墳時代中期の直口壺の形状をしているが、器壁の薄さや綾杉状の刺突文から3とほぼ同時期のものと推定される。壺形土器は5のように複合口縁化した口縁の外面に凹線文を施す、いわゆる後期初頭（草田1期、松本V-1様式）の土器も出土しているが、大半は6～10のように複合口縁の立ち上がりが長く、口縁外面下端に明瞭な稜が立つものや、水平方向に突出するタイプのものである。9は小形品であるが作りは通常の壺形土器と同じで、口縁のところだけやや肉厚になっている。胴部内面の隙間に光沢のある黒い物質が付着しているのが観察されたが、分析はできていない。10の肩部の刺突文は5個で終わっており、反対側に短沈線文が刺突文に2本ひかれているのみである。

11・12は直線的に伸びる口縁の端部が内側を向き、内側の端部が若干摘み出したように突出する土器である。八東郡東出雲町夫敷遺跡の第VI調査区中層からこの種の壺形土器が多数出土しており、古墳時代中期中葉の年代が与えられている。松山編年ではIII期に相当する土器である。13は口縁がやや内湾し、頸部が不明瞭ながらくの字形を呈している。やはり11・12と同じ時期の土器と思われる。14～19は低脚環類であるが完形のものは出土していない。脚部の大きさにかなりのバラエティがある。20～28は高脚環類で、22・23は形態的には大型の低脚環とでも言うべきものになる可能性もあるが、ここでは一応高脚として扱っておく。20・21は环部が緩やかに曲線を描いて立ち上がりが、22・23は壺や壺の複合口縁のように体部と口縁の立ち上がりの境に水平方向の突出が認められる。ともに内面は縱方向のヘラ磨き、体部外には刷毛目が残る。20・21は草田4～5期（松本編年V-4様式）、22・23は草田6・7期に相当すると思われる。25は环部底面と立ち上がりとの境に段を有する土器である。小形のうえ环部内面が水平になっていること、口縁の立ち上がりが短いことなどから松山編年III期頃のものと思われる。脚柱部では24・26・28のように、内面上端すなわち环部下面に直径2～3mmの穴が開けられているものがあり、注目される。

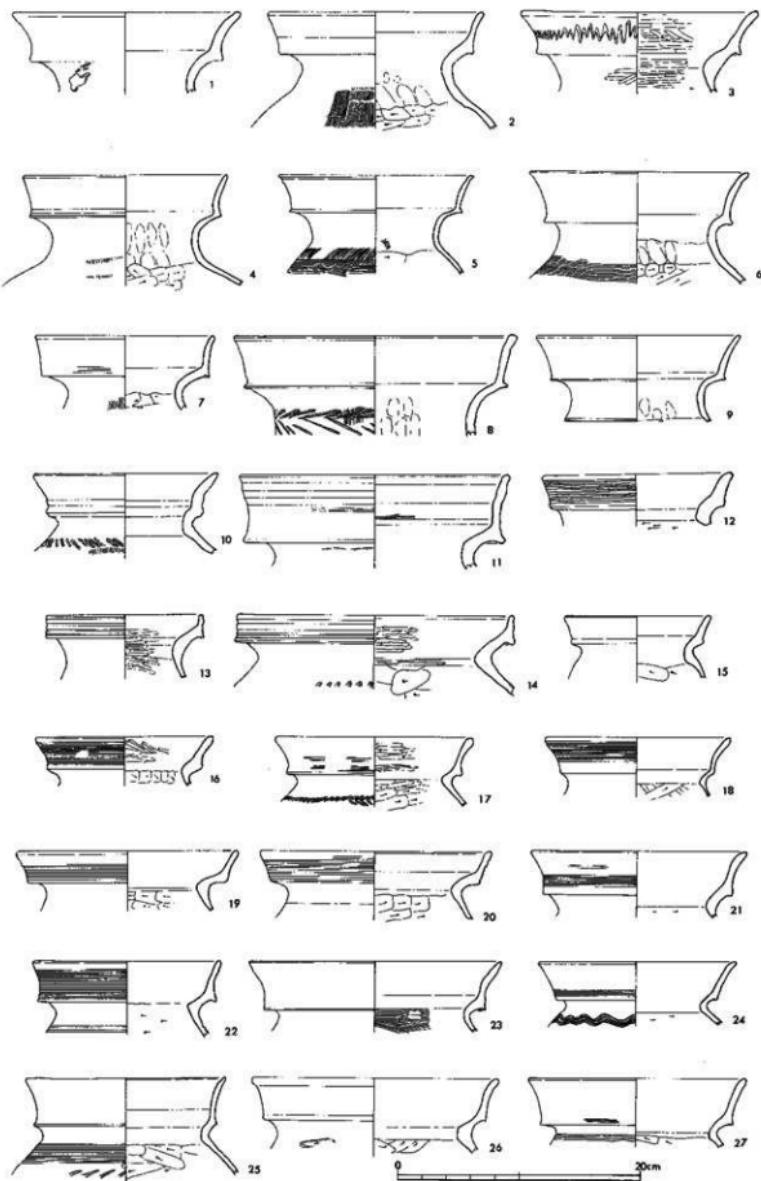
なお、10a層出土土器で気になるのは11～13・25など5世紀代の土器である。その他の土器と年代的に若干隔たりがあるうえ、出土地点を調べてみると大溝の周辺に限られていることがわかった。9層上面で検出した大溝は本当に最後の姿であって、5世紀代には河道の北東側で頻繁に位置が移動していた可能性を考える必要がある。

10b層出土土器（第90～95図、図版54～57）

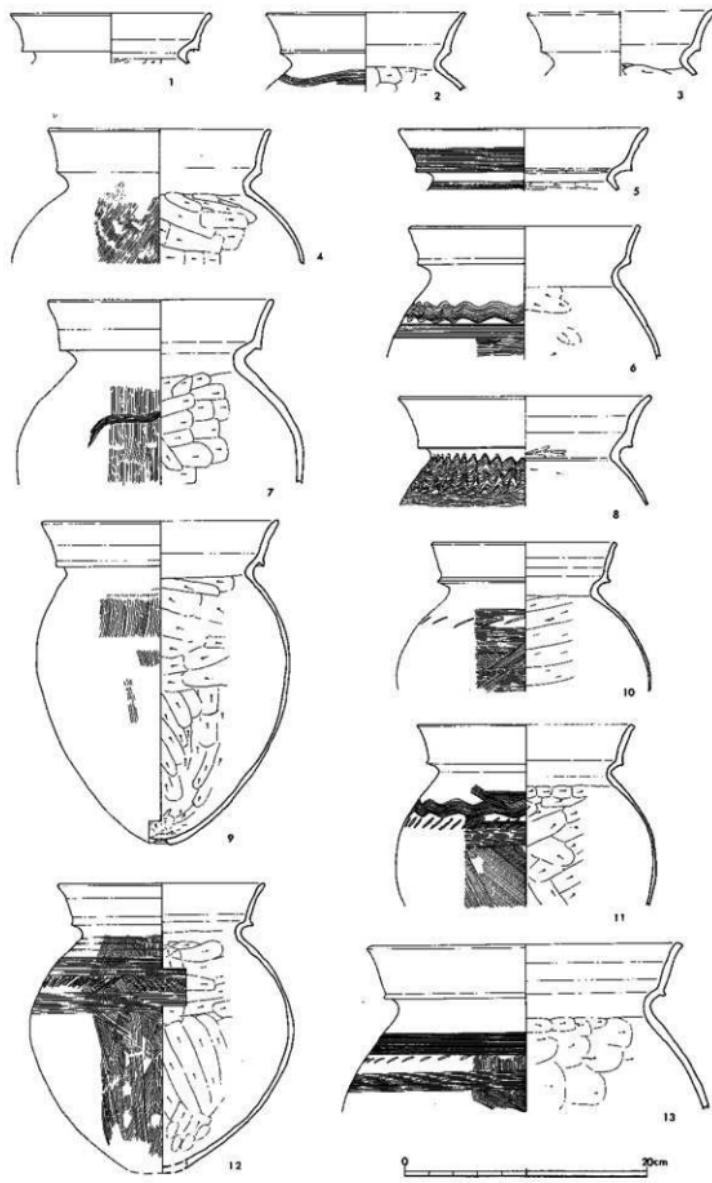
10b層は自然河道の中層をなす層で、遺物の量は最も多い。第88図のように南西岸の6号杭列や1号橋周辺から出土する場合が多く、BW区では貝塚上部の堆積層から集中的に出土している状況がよくわかる（第89図）。特にB区6号杭列周辺では低脚環や高脚の出土点数が多く、BW区でも壺や壺形土器に混じって器台や低脚環が多く出土している。また、山陰独特の壺形土器もこの層から出土している。



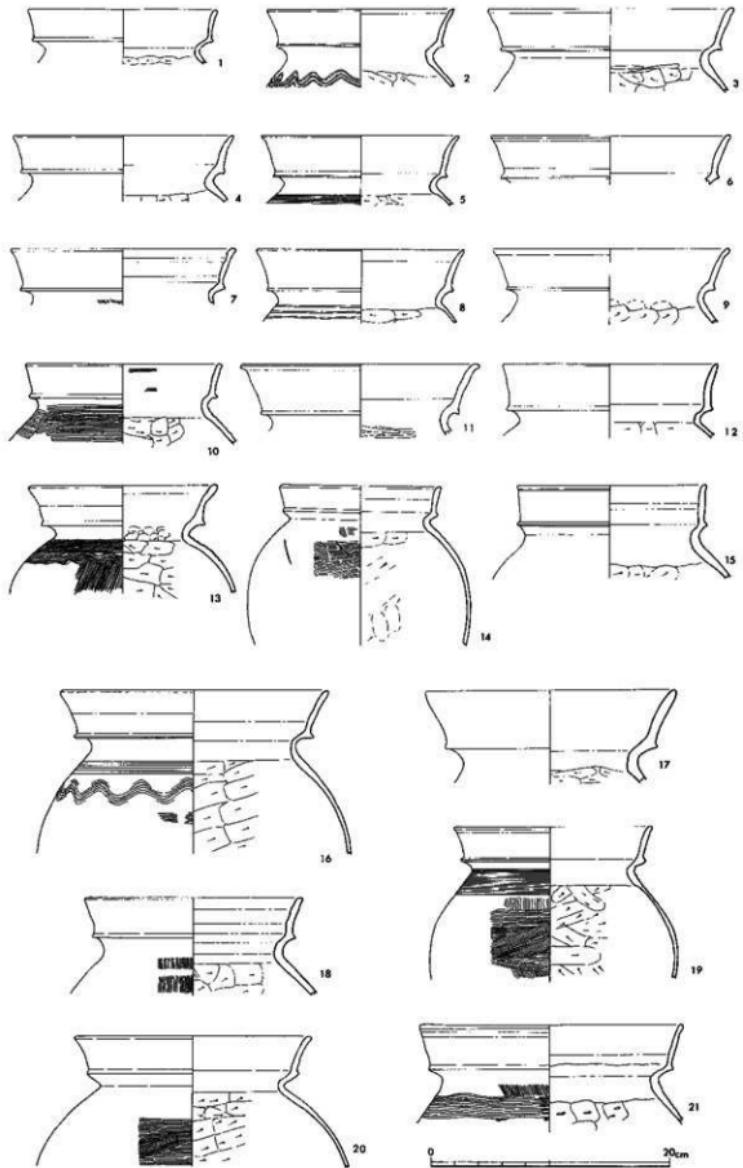
第90図 B · BW区10 b 層出土土器実測図(1)



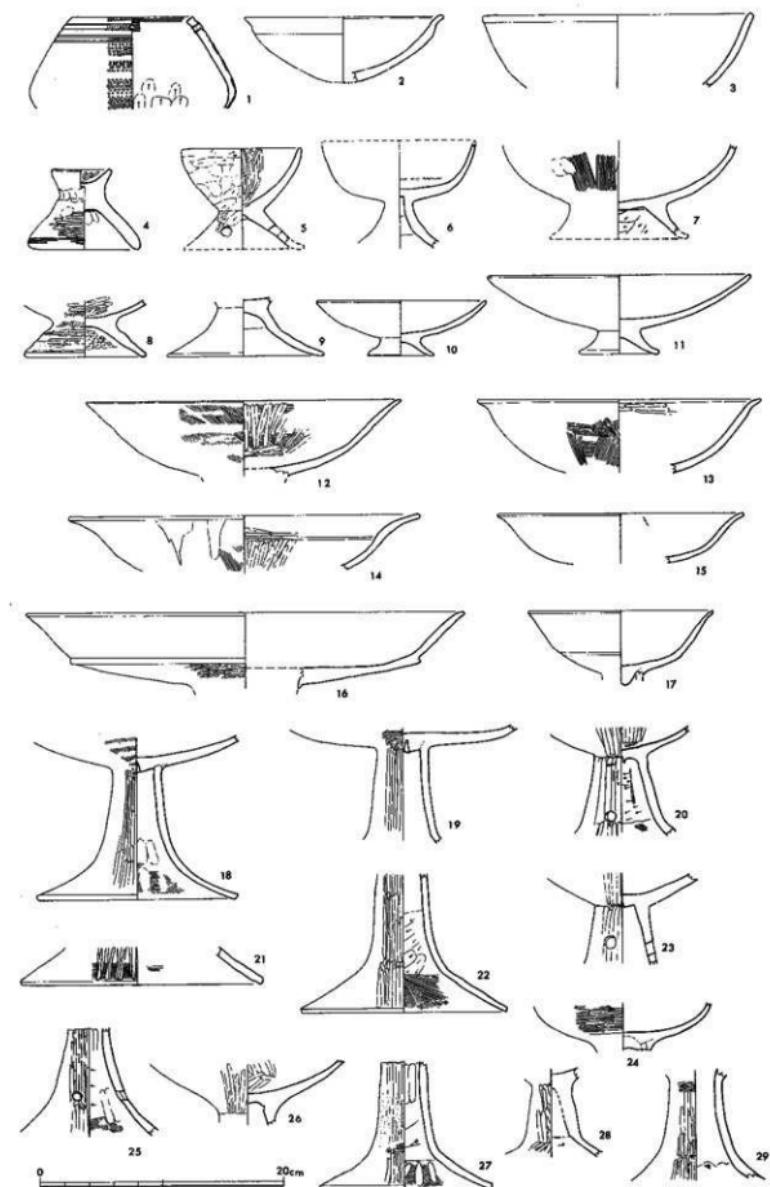
第91図 B・BW区10b層出土土器実測図(2)



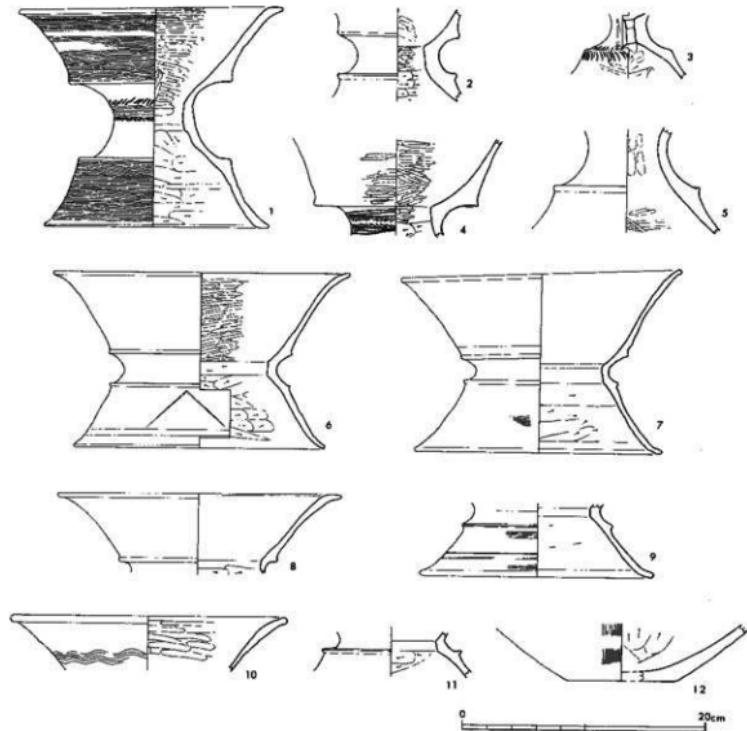
第92図 B・BW区10b層出土土器実測図(3)



第93図 B・BW区10b層出土器実測図(4)



第94図 B · BWI層出土土器実測図(5)

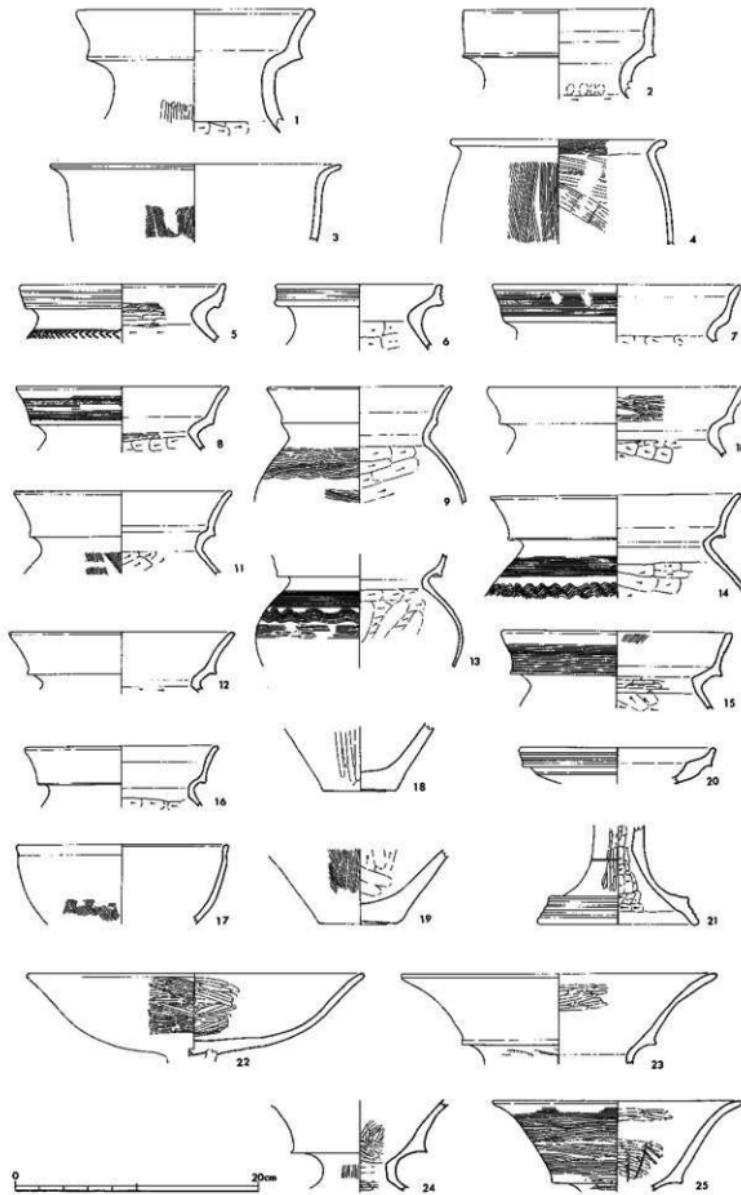


第95図 B・BW区10b層出土土器実測図(6)

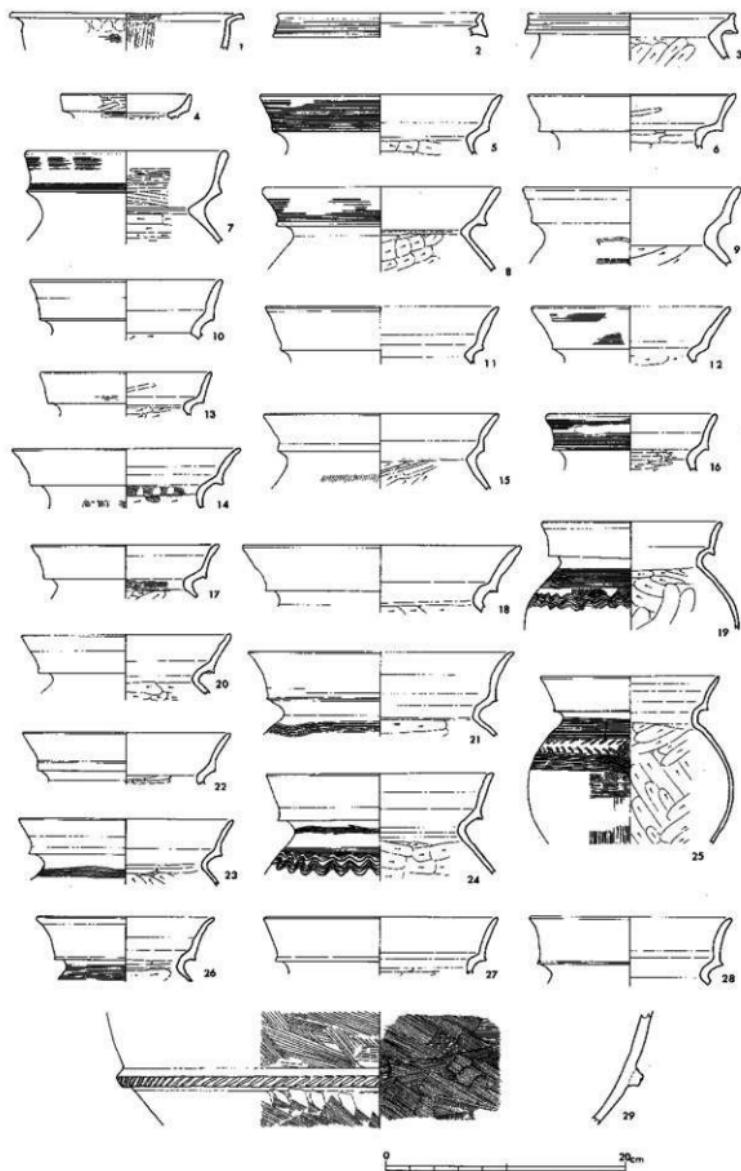
壺形土器（第90図1～4、第91図1～11）は、胴部が第90図1や4のように球形に近いものもあるが多くは壺形土器と同様に倒卵形を呈しており、壺形土器との違いは頸部が大きくくびれたり、縱方向に若干長くなる程度である。1は大きく外に沿って口縁の外面に貝殻腹縁による多条平行沈線文がはいり、第91図3には半截竹管状の工具による2本線の波状文が施されているが、その他は横ナデ調整のみである。草田4期から草田6期の土器が多いが一部7期に相当すると思われる土器も含まれている。第90図3は、外面刷毛目調整後、胴部の最大に張ったところから少し下の部位に断面台形の突帯を巡らした、九州系の土器である。突帯上面には斜めの刺突文が加えられている。

第90図12は瓶形土器である。器高73.0cm、口縁部径8.9cm、下端部径40.0cmを測り、体部上端と下端にそれぞれ一对の把手を貼り付けている。把手の向きは上端が横向き、下端が縱向きである。外面刷毛目調整、内面はヘラ削りで、薄手の精巧な作りの土器である。同図11・12は広口の壺形ないし鉢形の土器である。この手の土器の口縁はいずれも垂直に近く立ち上がり、端部に平坦面を作り出すという特徴がある。肩部には貝殻腹縁による平行沈線文や刺突文が施されている。

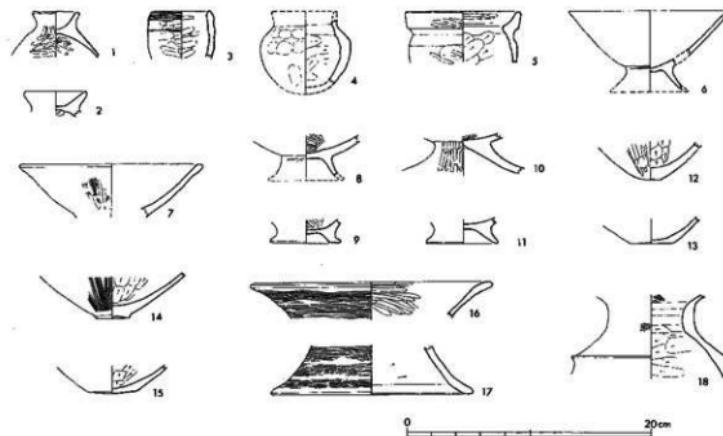
壺形土器は複合口縁化した口縁外面に凹線文を施す後期初頭の土器（第91図13・14）や、口縁外



第96図 B・BW13・14層出土土器実測図



第97図 BW区貝塚出土土器実測図(1)



第98図 BW区貝塚出土土器実測図(2)

面に貝殻腹縁による多条平行沈線文を施す後期中葉頃の土器(同図16~21)も若干含まれているが、大半は口縁外面に文様を施さなくなる草田4~6期の上器である。肩部にも貝殻腹縁の平行沈線文や波状文、刺突文を加えた例も散見される。また、貝殻の代わりに刷毛目原体で文様を描いたもの(第92図11・12)もある。第92図9の底部には小穴が観察された。直径約6mmで焼成後に外側から穿孔されている。

第94図は小形の鉢や壺、高环類である。1は弥生中期後葉の無頸壺で、全体は算盤玉のような形になる。外面口縁下に沈線で区画した刺突文が2段に廻り、その下に櫛状工具による刺突文列が4段に細かく施されている。2は口縁端部が短く外側へ折り曲げられた丸底の鉢で、軟質ではあるが内外面にナデのちヘラ磨きを施している。5・6・9は脚付壺、3・7・8は大型の低脚壺で、草田4~5期、10・11はいわゆる小谷式の範疇にはいる典型的な低脚壺である。高环には壺内部面に屈曲の痕跡を留めるもの(14)と外側に突起状の段を有するもの(16)、内外面ともに何もないもの(12・13・15)の3種類があり、脚柱部では筒部が細長いものとそうでないものがある。いずれも草田4期から6期の土器である。なお、17は近畿系の高环で草田7期の土器と思われる。

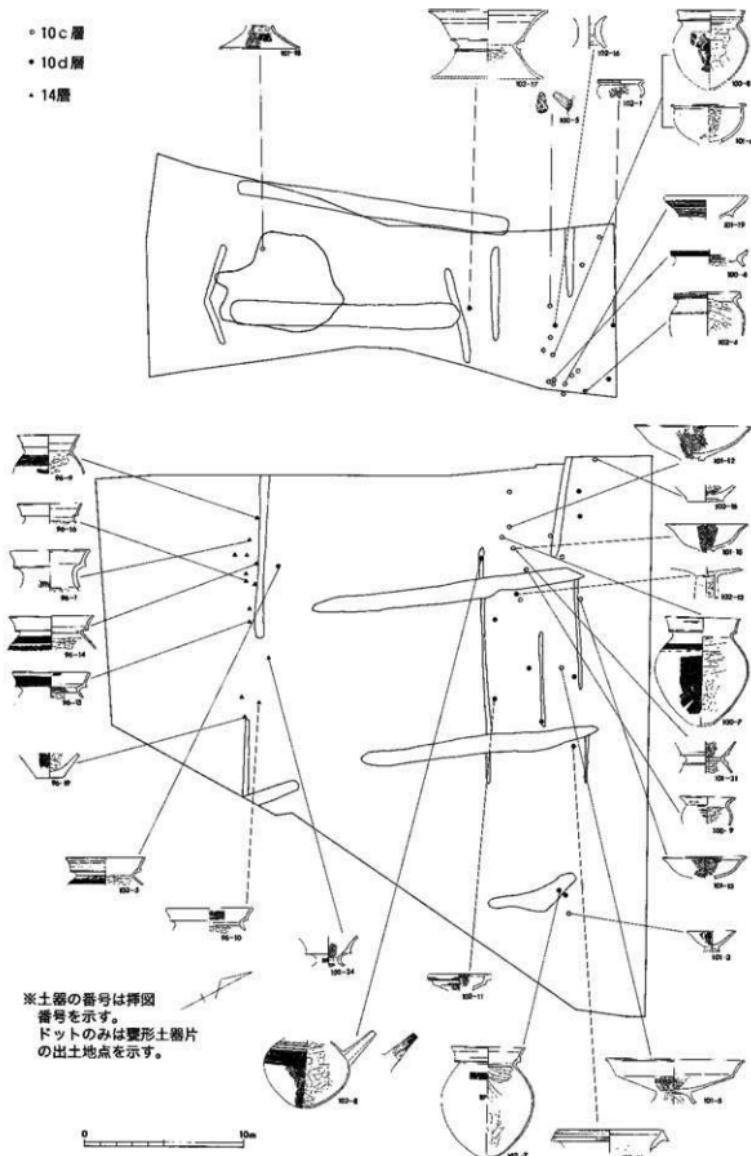
第95図は鼓形器台である。1~5は草田3期の器台で、1には外面に貝殻腹縁による平行沈線文がびっしりと施されており、1と4の筒部には平行沈線文と貝殻腹縁の刺突文が廻る。6・7は草田4~5期、8~11は草田6~7期の土器である。6には脚台部外面にまっすぐな沈線で描かれた山形文が確認された。12は壺か鉢の底部であろう。

以上のように、10b層からは弥生時代中期後葉から古墳時代前期までの土器が出土しているが、圧倒的に多いのは弥生時代後葉から終末にかけて(草田4~6期)の土器である。

13・14層出土土器(第96図、図版58)

13・14層は南西岸から流れ込んだ10b層につながる層である。主体を占める土器群は10b層と変わらないが、その他に若干時期の異なった土器が含まれている。第96図3・4は如意形口縁をもつ壺

- 10c層
- 10d層
- 14層

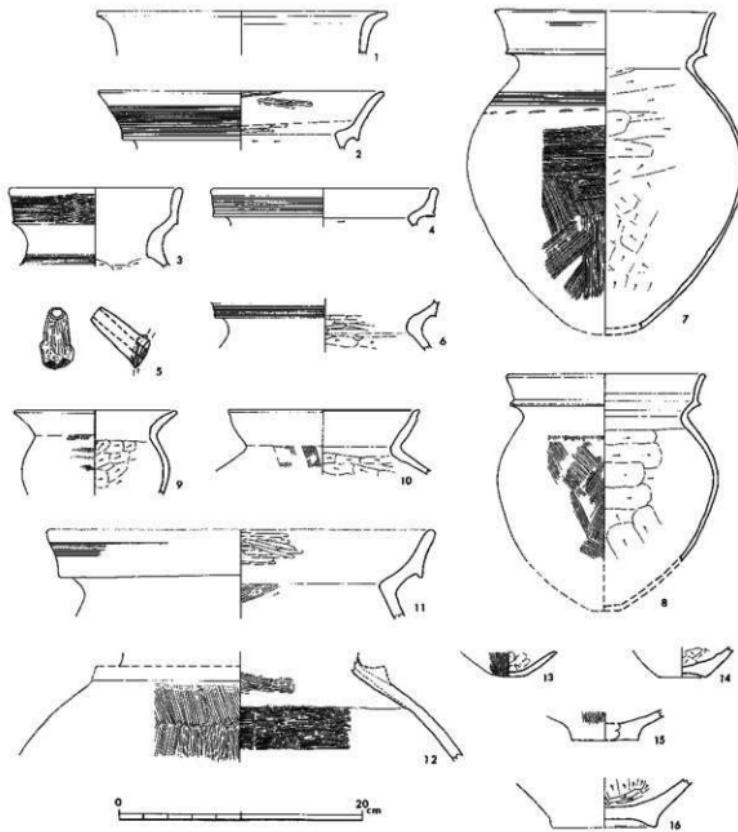


第99図 B・BW区10c・10d・14層土器出土状況

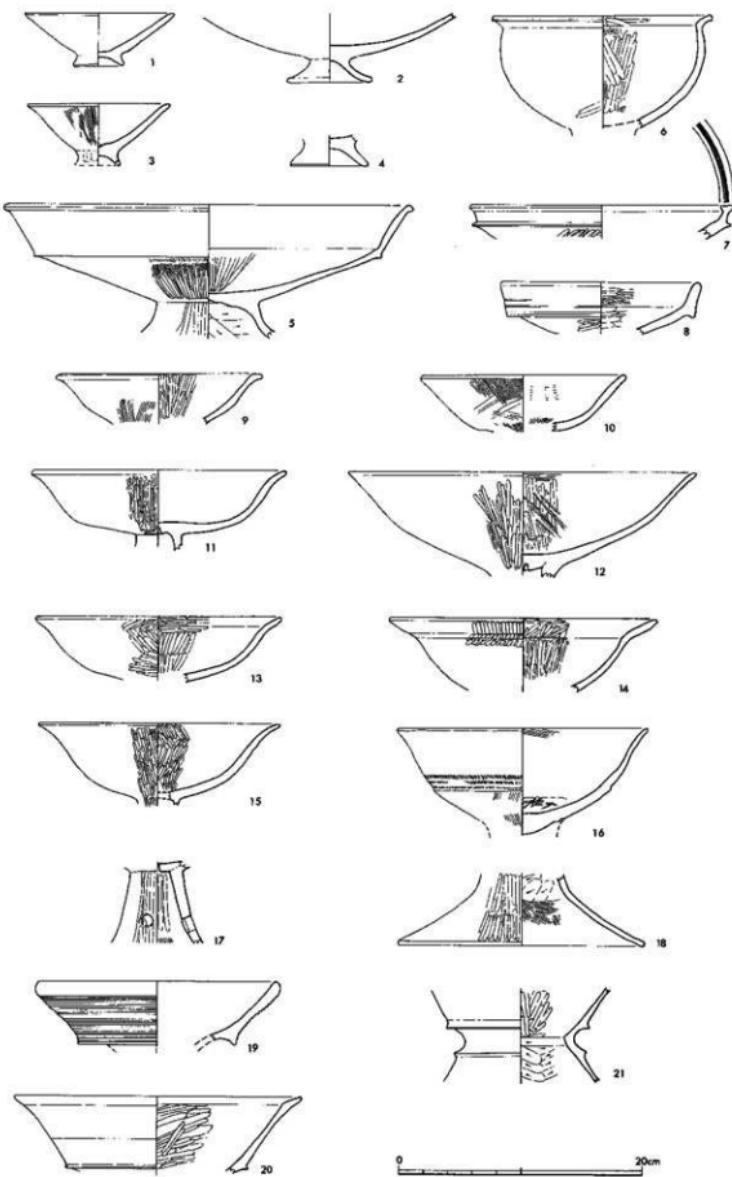
形土器で、弥生時代前期の土器である。4には口縁内面にも刷毛目調整が加えられている。18・19も中期までの壺か甌の底部である。20は後期初頭草田1期、21は後期前葉草田2期の高坏で、口縁や裾部に凹線文を巡らすものである。

貝塚出土土器（第97・98図、図版59）

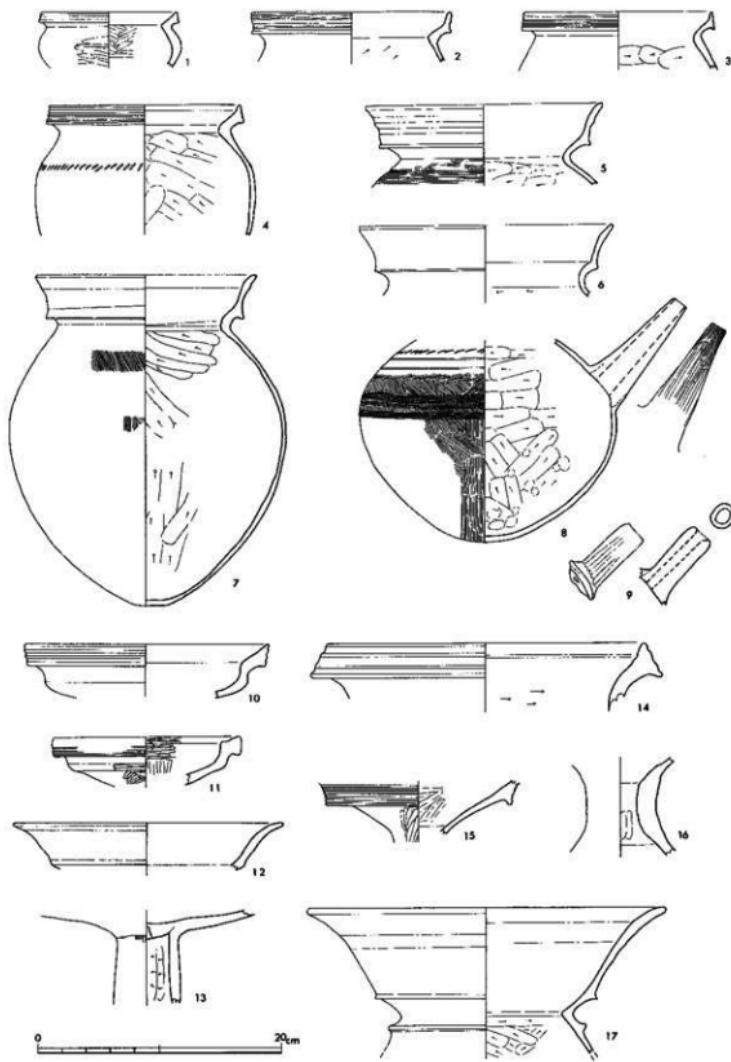
貝塚は南西岸の10b層下半に堆積しており、レベル的にはB区14層とほとんど同じである。貝塚から出土した土器はその他の出土土器と比べて堅さの面で遺存状態が良好であったものの、細片がかなり多いことが特徴である。主体を占める土器群は13・14層同様草田4～6期の土器である。第97図1は弥生中期の高坏の口縁部である。深い半球状の坏を持つ高坏で、内面には縱方向のヘラ磨きが施されている。同図29は内外面に刷毛目調整を施した胸部の下半に断面M字形の突帯を貼り付けたもので、突帯上面に斜めの刻み目を加えている。やや大形の土器で、九州の西新式の壺形土器



第100図 B・BW区10c層出土土器実測図(1)



第101図 B · BW区10c層出土土器実測図(2)



第102図 B・BW区10d層出土土器実測図

と考えられる。第98図1・2は蓋のつまみ部、3～5はミニチュア土器である。3は内外面をヘラで磨き上げたきれいな土器で、口縁部にわずかに文様帯を作り出し、平行沈線文で飾っている。後期初頭頃の土器であろう。4は手捏ねの壺形土器であるが、古墳時代前期頃のものであろうか。

6・7は体部が直線的に開く低脚坏で、草田4～5期のものと考えられる。

10c層出土土器（第100～101図、図版60）

10c層は河道北東岸から流れ込んでいる層で、10b層下半に相当すると思われる。北東岸の護岸施設が何本も走っているため、10b層とのつながりがわかりにくくなっているが、土器は第99図のように上流から下流まで広い範囲で出土しており、特に高坏や器台が目立っている。第100図3・4・11は複合口縁が直立し、外面には四線文（4）と擬四線文が施されている。2は大きく外反した口縁に貝殻腹縁の平行沈線文を施した上器で、前三者は草田2期、後者は草田3期に相当する。9は畿内の庄内系土器と思われるが、胴部外面は刷毛目のち横ナデ調整を行う。10は布留式系の壺形土器であるが5世紀代のもので、大溝出現後の氾濫原に起因する混入品と考えられる。12は壺形土器の肩部片で、頸部との境に突帯を貼り付けた跡が残っている。胴部外面に粗い刷毛目調整痕、内面にそれよりも幅の狭い刷毛目調整痕が残っているのはこれまでに報告してきた九州系土器と同じなので、この土器も九州の西新式併行の土器と思われる。第101図1・3の低脚坏は体部が直線的に開くもので、草田の4～5期、2は草田6～7期に相当する。5は脚付きの大形の坏である。口縁が複合口縁のように段になり、脚は太く大きく開いている。高坏類のうち、6は弥生中期の半球形になる高坏、7は口縁が直立し、肥厚させた端部上面に凹線を巡らせた高坏である。7は後期初頭の吉備系の土器と思われる。高坏で最も多く出土したのは緩やかに湾曲しながら立ち上がる草田4～6期のもの（9～13・15・16）である。15は口縁が屈折して外反するものであるが、時期的には同じ頃のものと考えられる。16は深い坏部をもつもので、外面の段の上に半截竹管状の工具による連続爪形文が施されている。この土器も混入品と考えられる。

以上のように、10c層出土土器は弥生後期前半代の土器も含んでいるが、中心はやはり草田4～6期頃と言えよう。

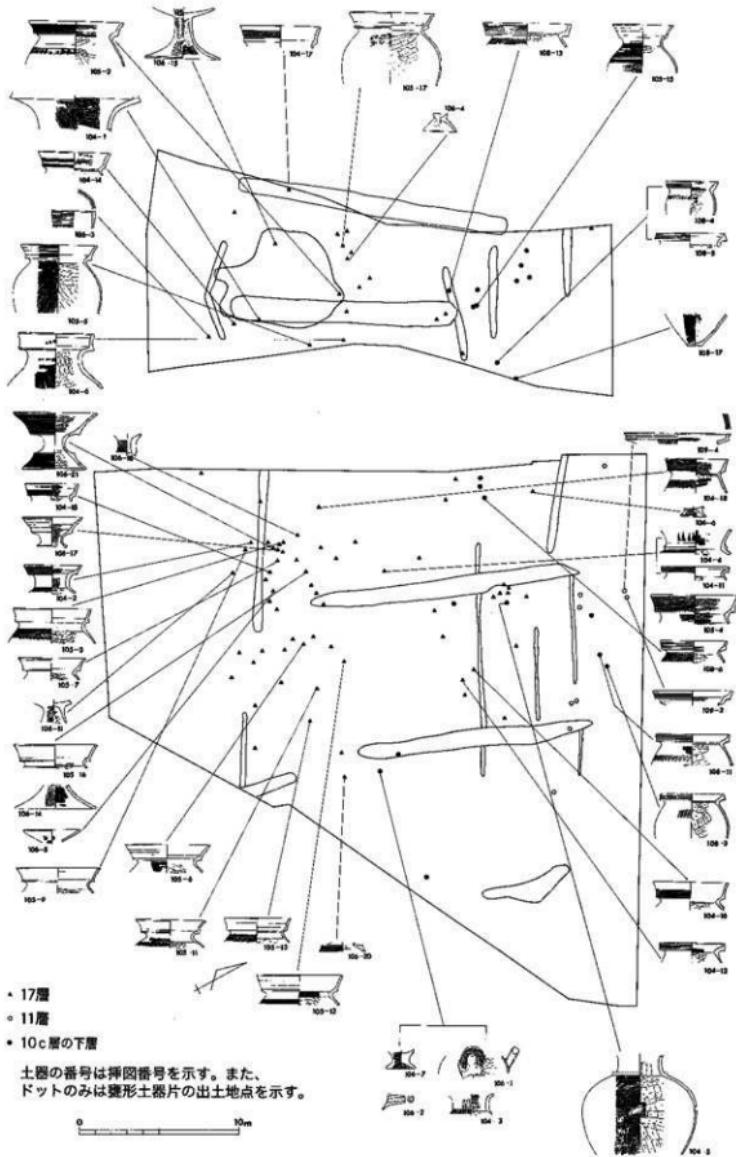
10d層出土土器（第102図、図版61）

10d層は10c層よりも下位に位置し、10b層よりも下層に堆積した層である。基本的に橋や護岸杭列よりも下位にくる層であるが、河道埋没期も水の流路に当たっていたため土器の混入が多く、出土土器は10b層や10c層と同じ時期のものも少くない。もちろん、出土土器数が少ないため、それでも四線文を施した土器が目につく。第102図1は小形の鉢形土器で内外面へラ磨きを行っている。壺形上器2～4の口縁外面も四線文である。10・11は坏部の浅い高坏で、14は大形の壺形土器、15は器台と思われる。いずれも後期初頭、草田1期の段階である。8は長さ9cmの注口が付いた注口土器である。丸底で球形に近い胴部の肩部に胴部の大きさから言えば少々大き目の注口が付いている。外面刷毛目調整で注口と同じ部位に2本単位の平行沈線文と刺突文が施されている。

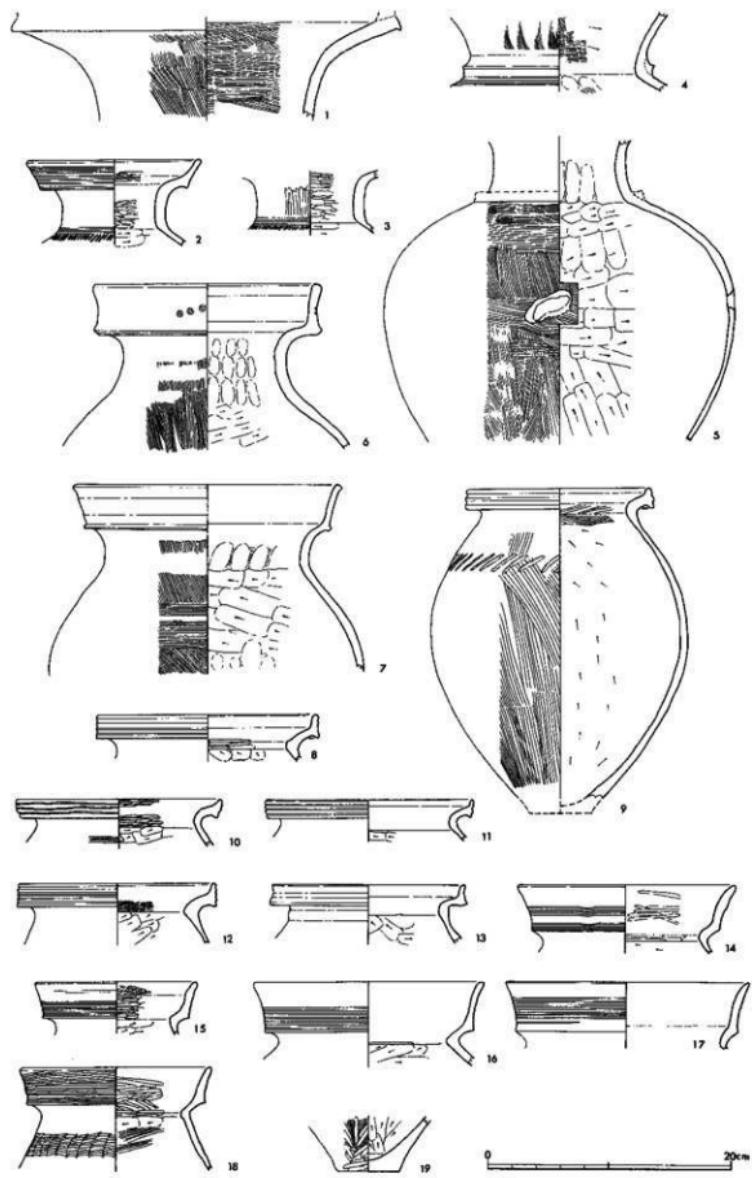
17層出土土器（第104～106図、図版62・63）

17層は自然河道の最下部に位置する層で、橋や護岸施設よりも下に堆積している層である。土器は河道全体に万遍なく出土しているが、B区6号杭列の周辺に集中して出土している感がある。

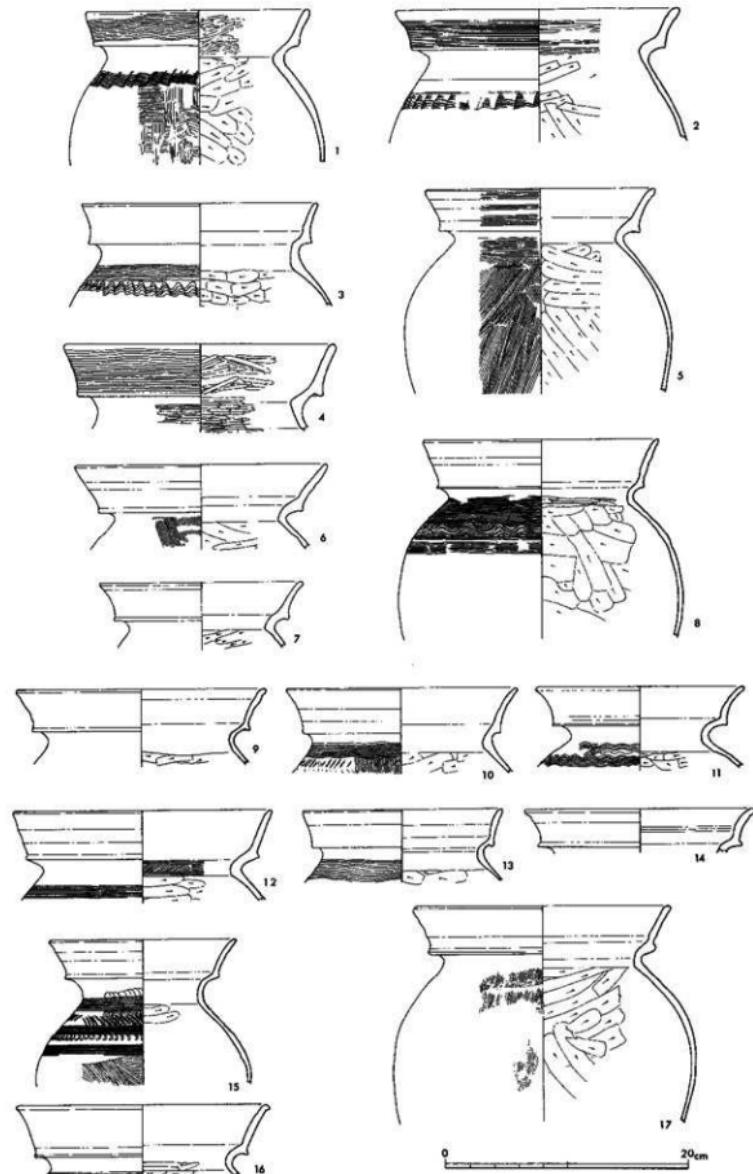
壺形土器は数が少なく、第104図1は11縁が大きく開口する大型品で端部上面に粘土の接合痕が残る。刷毛目調整痕が著しく、弥生中期の土器であろう。4は頸部の断面三角形の突帯を張り付け、その下に溝の深い平行沈線文を入れている。時期不明。6も頸部に突帯を貼り付けた跡が残る土器で、胴部内面はヘラ削り、外面は刷毛目調整である。胴の最も張ったところに大きな穿孔が認められる。半所遺跡の溝状遺構や白枝荒神遺跡から張り付け突帯をもつ壺形土器が出土しており、その



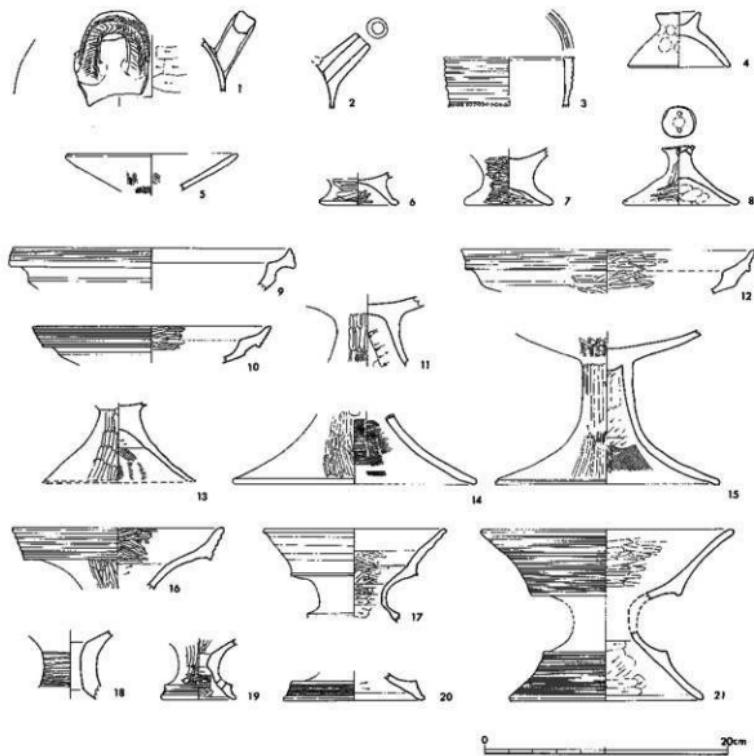
第103図 B・BW区17・11層土器出土状況



第104図 B・BW区17層出土土器実測図(1)



第105図 B・BW区17層出土土器実測図(2)



第106図 B・BW区17層出土土器実測図(3)

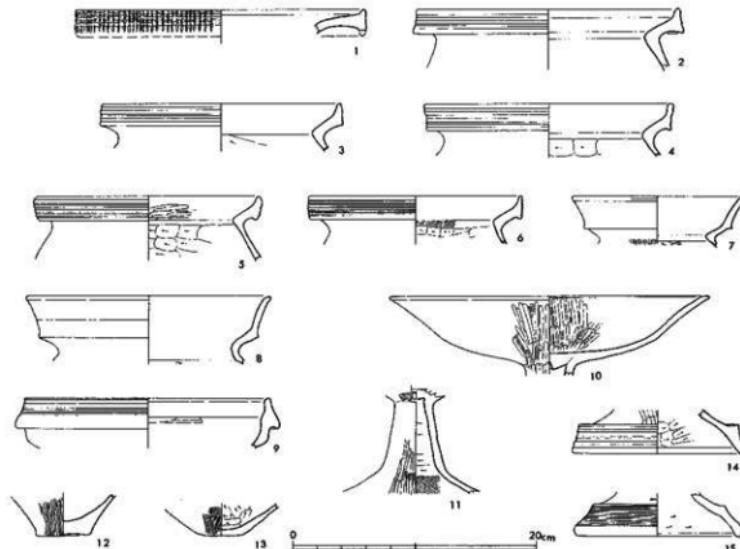
時期はおよそ草田3期と5期に相当すると考えられるので、この土器もそのくらいの年代に当たはると考えたい。2は内外面丹塗りの壺で、口縁外面には凹線文を施す。3は口縁端を欠くがほぼ同じ時期で、草田2期併行である。6は直立する口縁の外面に円形竹管文が3個並んだ土器で、安養寺1号墓から近似した土器が出土しており、松本編年V-4様式に当たられている。7もその時期であろう。

甕形土器は口縁端部を上下に拡張してそこに凹線文を入れた中期後葉の土器（第104図9）から、草田6期相当の土器まで幅広く出土しているが、草田4～6期の土器が一番多く、次に草田3期相当の土器が多いように見受けられる。草田3期相当の土器の口縁部文様はすべて二枚貝の腹縁を用いており、第104図18や第105図1・2の肩部には貝殻腹縁を使って連續押引文が施されている。また、多くの場合、口縁内面には横方向にヘラ磨きが施されている。文様で変わったものとしては第105図15のように、肩部を縦方向にヘラ磨きしたあと、柳描平行沈線文と貝殻腹縁の刺突文を入れ、半月形の刺突には半截竹管を用いるといった凝ったものもある。

第106図1は把手付きの壺形土器で、注口土器になる可能性もある。把手の端面と下面に貝殻腹縁による刃状の刺突文を密に施している。中期後葉と思われる直口壺で、口縁外面と端部を凹線文で飾り、頸部付近には刺突文も巡らせていている。4・8は蓋、5～7は低脚壺である。小形でしかもヘラ磨きなどを丁寧に仕上げており、8のつまみ上面には一对の穿孔が認められる。年代的にははっきりしないが草田2～3期に同様の土器類がみられる。9・10・12は複合口縁状に口縁が屈曲し、外向きの端面に凹線文が施された高杯で、後期初頭の土器の特徴を示す。16は受け部の立ち上がりが短く、外面には凹線文が入った器台、20は平行沈線文が施された脚台部の裾である。どちらも草田2期、かつての九重式の範疇にはいる上器である。一方17・18は、受け部の立ち上がりが長くなり、その一方で筒部の長さが短くなる傾向が看取され、前の土器に続く草田3期の特徴をもつ上器である。21もこれらと同じ時期のものである。また、19は裾の外面に凹線文がはいり、筒部に2個の穿孔が認められる土器で、全面ヘラ磨きの精巧な土器である。小形品ながら草田2期の器台と思われる。なお、9・12・16・20・21は丹塗りあるいは赤色顔料が施された土器である。

1・2号橋木組下出土土器（第107図、図版64-1）

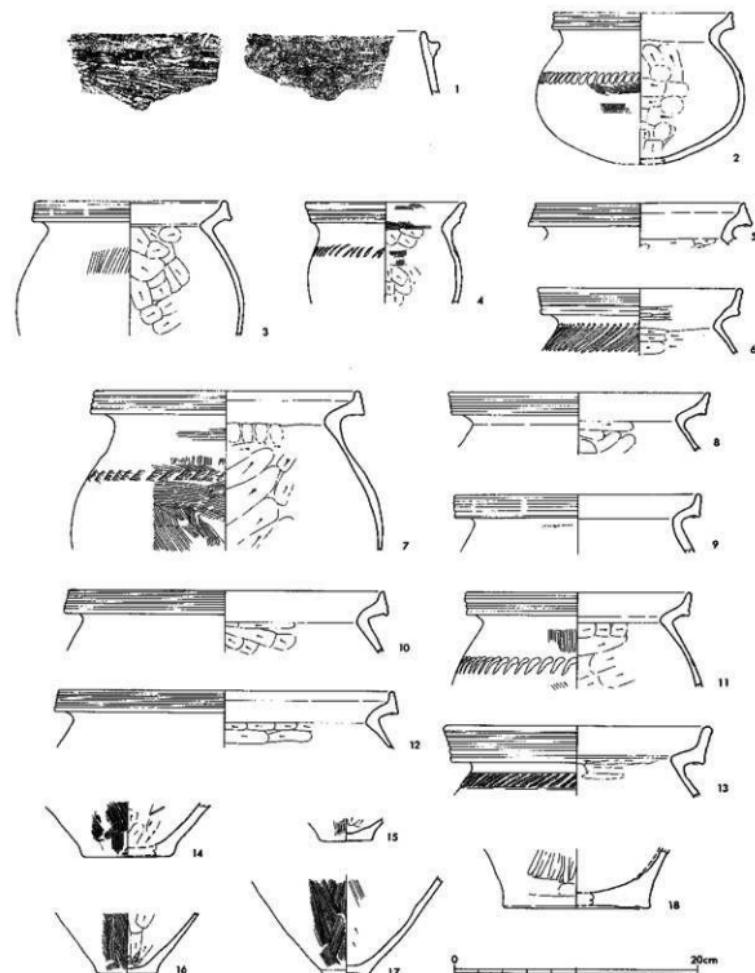
17層は前述したように、B・BW区の各遺構の下に堆積した層に当たるが、見てきたように土器にかなりの時期幅が存在している。よって、ここでは特に1・2号橋を解体している際に出土した土器群を報告しておく。第107図1は、口縁端部に沈線を廻らせた上に、縦の短沈線を刻み目風に重ねた中期の壺形土器である。壺形土器のうち、2・3・5・6は複合口縁化した口縁外面に凹線文を施した後期初頭の上器、4は立ち上がりが長くなった草田2期の土器である。7・8は口縁外



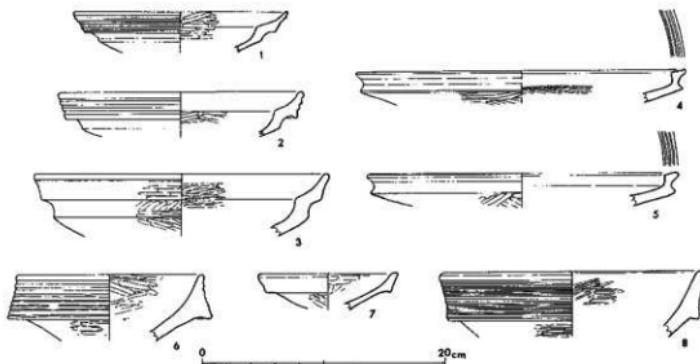
第107図 B区1・2号橋木組下出土土器実測図

面下端に稜線ができるタイプの土器で草田4期ないし5期の土器である。高坏では、9は短縮された複合口縁の外面に凹線文を入れたもので後期初頭、10・11ははつきりとは言えないが草田4～5期と思われるものである。14・15は草田2期と思われる。9・10は丹塗り土器の可能性もある。

このように、1・2号橋の下層で出土する土器の中で最も新しいものは草田4～5期の土器で、1・2号橋の構築は少なくともこの時期以降と考えられる。



第108図 B・BW区11層出土土器実測図(1)



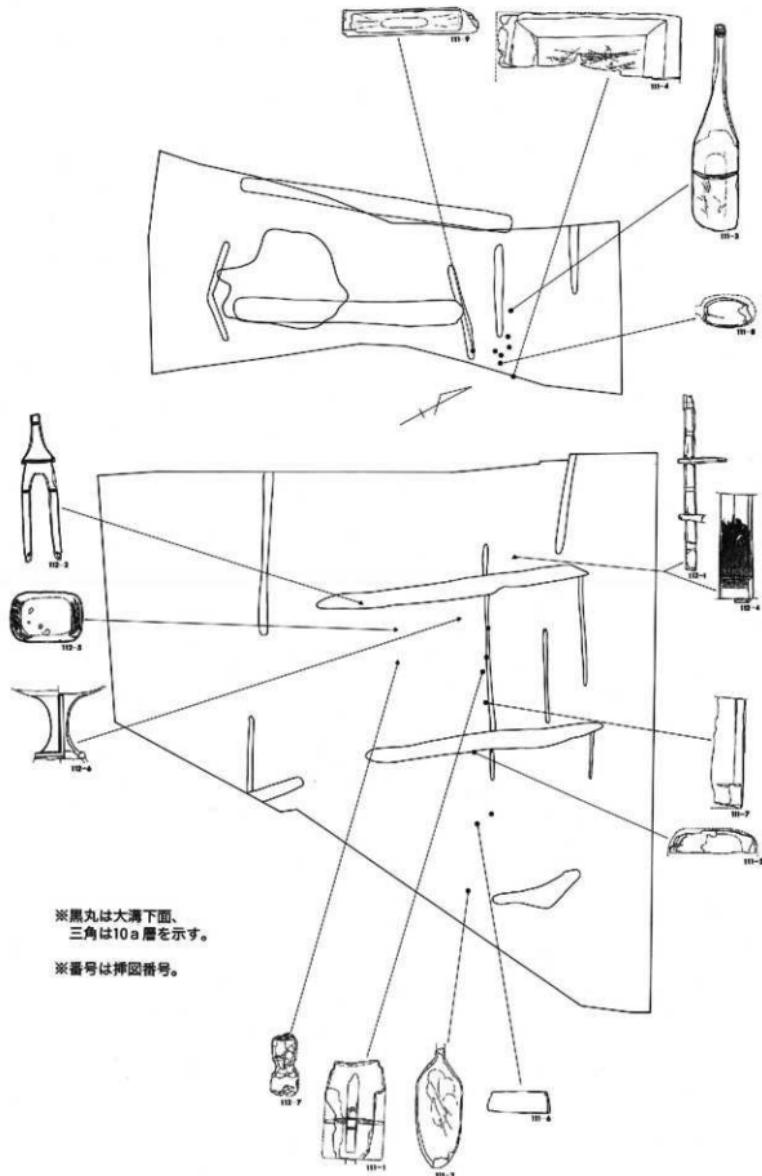
第109図 B・BW区11層出土土器実測図(2)

11層出土土器（第108・109図、図版64-2・65）

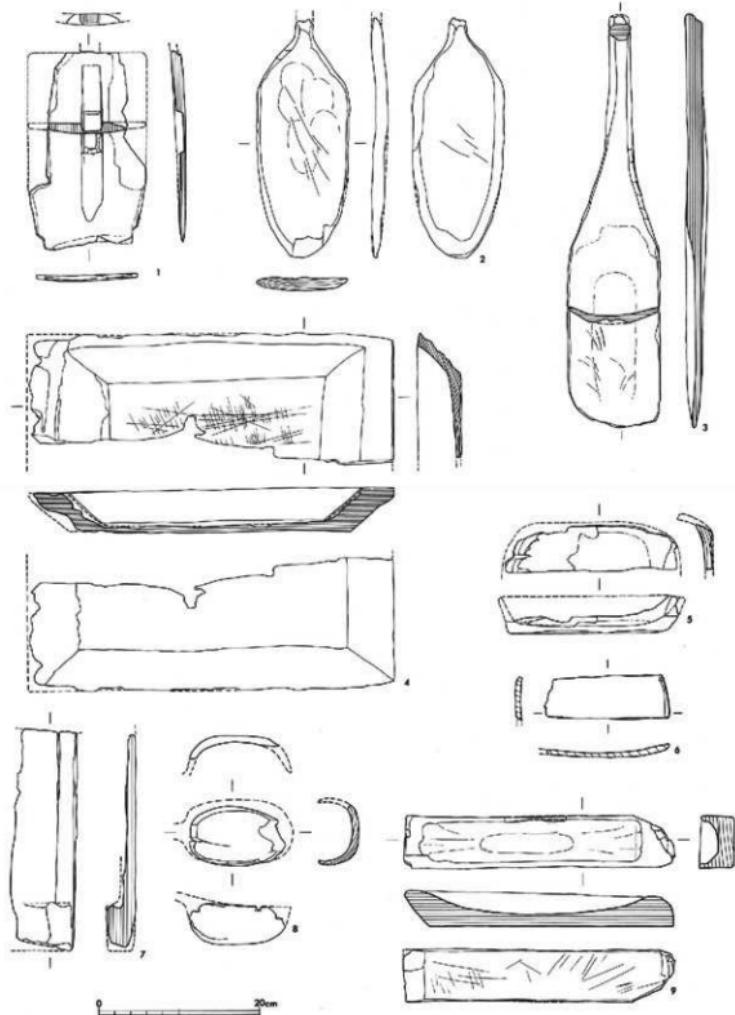
11層は北西岸側からの堆積層で、包含層の最下層に位置する。河道の肩に近いほうでは10c層や10d層と明瞭に層が分かれているが、河道中央寄りすなわち護岸杭列周辺になると続ぎ具合が不明瞭になり、17層との関係に至っては全然確認できていない。B区1・2号橋周辺の河道斜面で多く出土している。

第108図1は縄文時代晩期の突帯文土器である。やや内傾する口縁外面の端部からやや下がったところに、断面方形に近い突帯を貼り付けたもので、内面と突帯の上はナデ、外面は二枚貝の条痕調整である。西隣の歳小路西遺跡でも、今回の出雲バイパス関係調査で刻み日がない突帯文土器が炉跡とともに出土しており、出雲市三田谷I遺跡や飯石郡頼原町板屋II遺跡出土品などとの比較から突帯文土器の最終末と考えられている。時期的にはすでに弥生土器が出現する段階で、当資料も同じ時期のものと考えられる。A区でも刻み目突帯文土器の破片が出土していたり、B区でも弥生時代前期の土器が若干出土しているので、当遺跡の調査区周辺でも縄文晩期から弥生時代前期の集落跡が存在している可能性がある。同図2～13は口縁外面に凹線文を施す土器群である。2は鉢形土器で、肩部に刷毛目工具を押し当てた小豆形の刺突文を廻らしている。壺形土器は口縁端部の文様帶を作り出すもの（3・5）とほぼ複合口縁化しかけているもの（6～12）、そして完全に複合口縁化して口縁が外に開くもの（13）の3種類があり、前二者は後期初頭、松本編年V-1様式に相当するが、最後の13は一形式新しくなる可能性がある。4は小形の壺形土器で、口縁端部を幅広くしないまま、凹線を施したものである。第109図1～5は後期初頭の高坏類で、1～3は複合口縁状に崩曲した口縁の外面に凹線文を施す。4・5は水平に近く開いた体部から口縁が直立するもので、口縁外面は内湾し、上面には数条の凹線文がはいる。6は口縁外面に擬凹線、8は貝殻腹縁を用いた平行沈線文を施す器台で、7は外縁へラ磨きを行う小形の器台である。いずれも松本編年V-2様式（草田2期）に相当する。

以上のように、11層は弥生後期初頭の土器を中心として、一部後期前葉の土器を含んだ包含層で、中期以前の土器もごく少量含んだ層である。



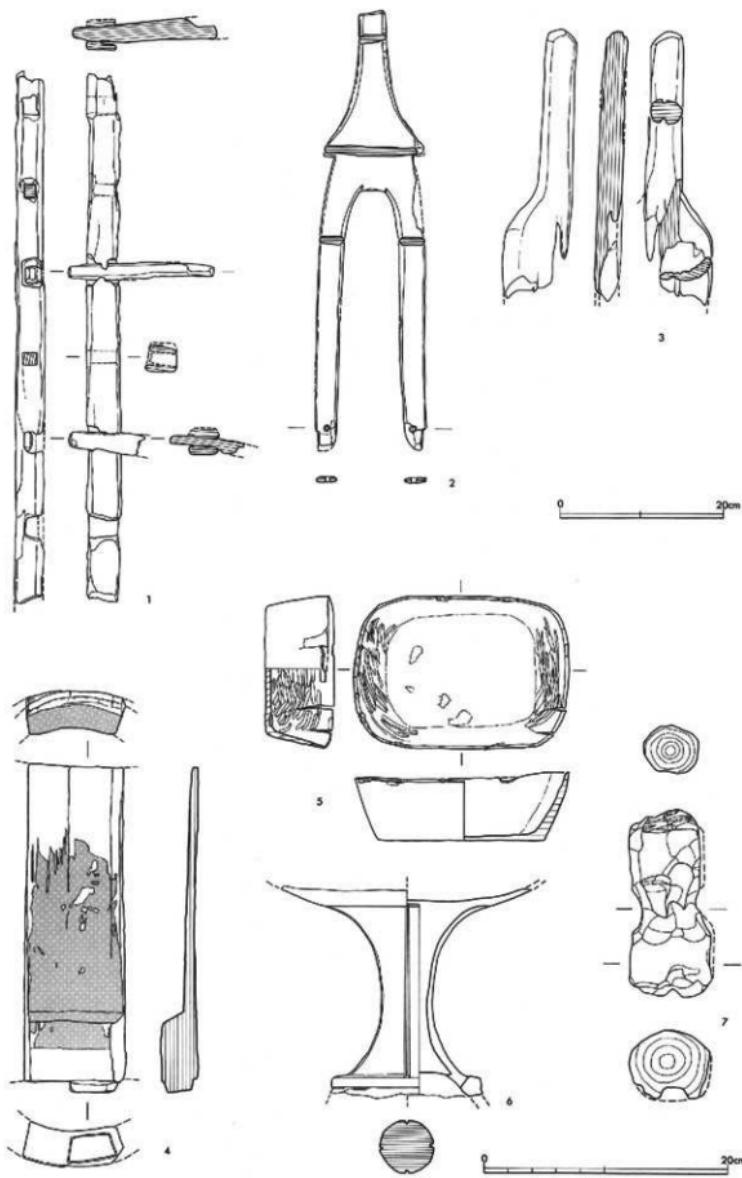
第110図 B・BW区大溝下面及び10a層木製品出土状況



第111図 B・BW区大溝下面出土木製品実測図

②木製品

今回B・BW区の自然河道から出土した木製品は、木橋や杭列など、遺構を築くために転用された品々を除いても、2か年の調査で約400点にのぼる。また、調査中に何らかの加工痕があると認めた木片は550点を上回っている。遺構を構成していた部材も含め、加工痕のある遺物は一旦調査事務所に持ち帰ったうえ、保存するかどうかの選別を行った。木橋や杭列を構成していた杭や横木



第112図 B・BW区10a層出土木製品実測図

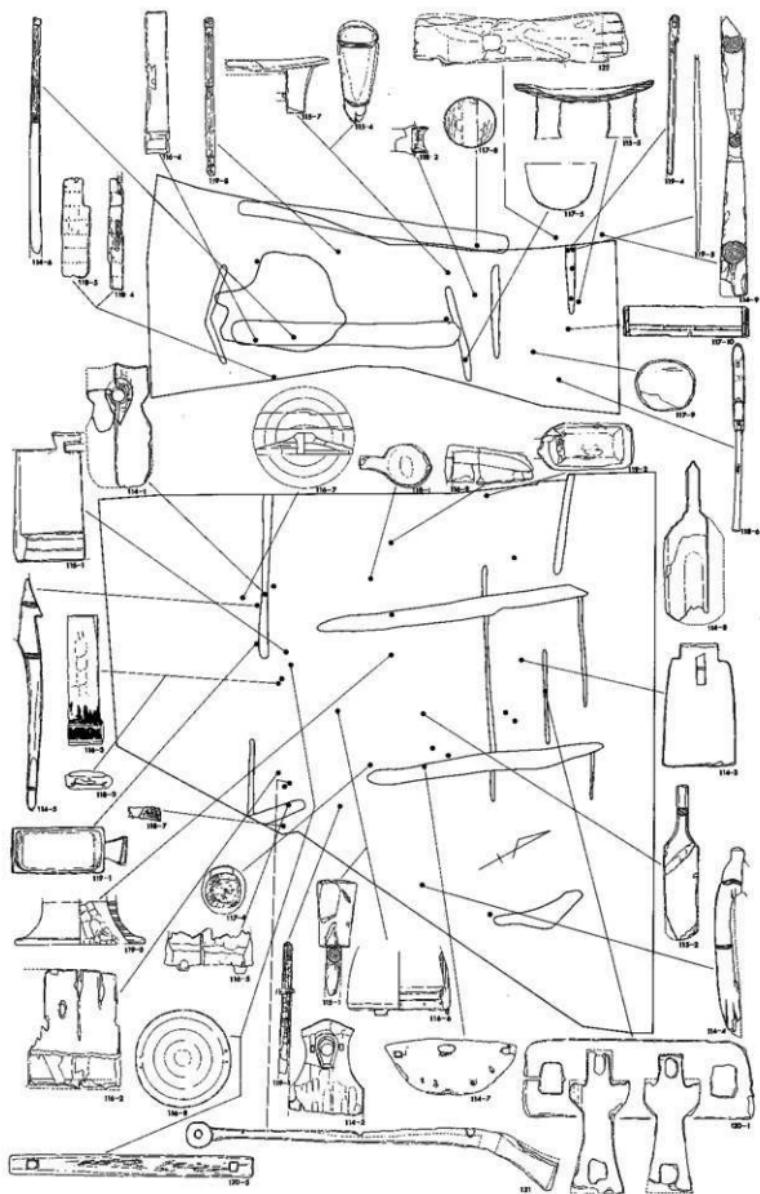
材、転用部材は基本的に写真や所見メモ等の記録をとったあと、一部を切り取って持ち帰るに留めた。以下に報告するのは、遺構に使われたもの以外の木製品である。

大溝下面出土木製品（第111図）

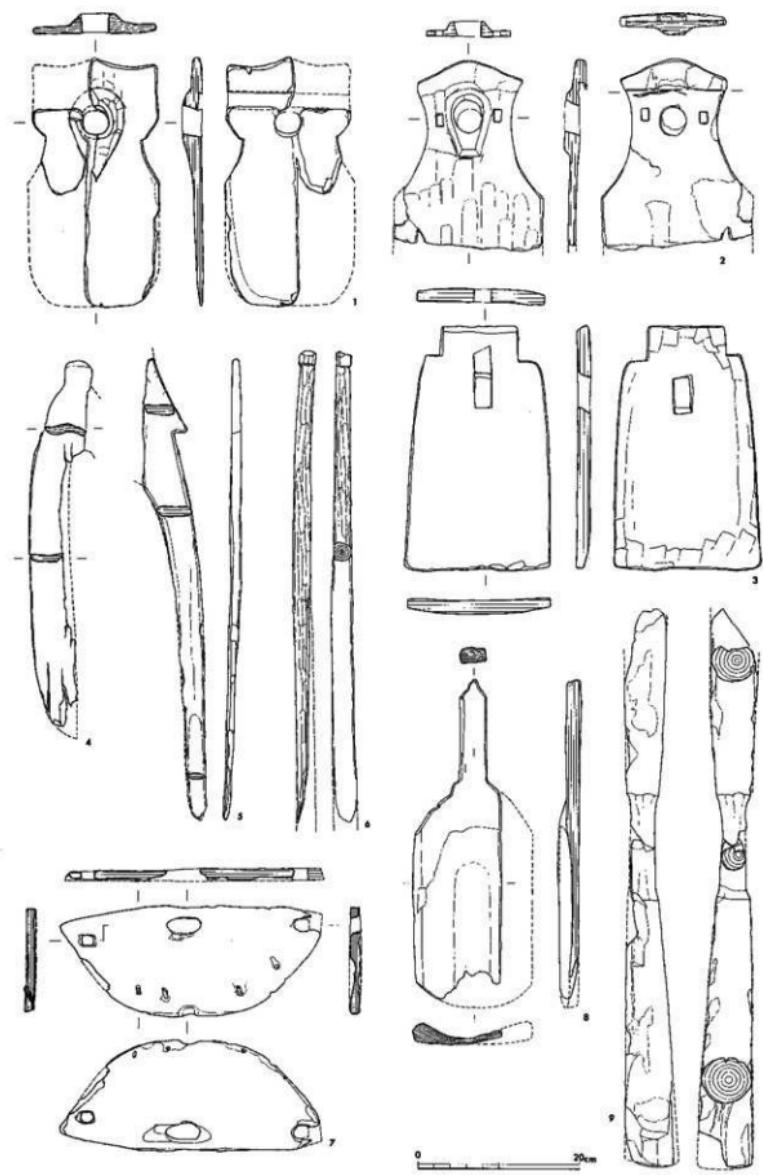
土器と同様に大溝下面とその周辺にあって時期の特定が難しいと判断される木製品類である。第111図1は直柄式平鉗である。クワ属の柵目材を用いた長方形の鉗で、若干先細りになった鉗先には鉄製鉗先を嵌め込むための縫り込みが設けられている。全長24.2cm、復元幅14.7cm、身厚1.3cm、鉗先の縫り込みの幅は11.1cmである。鉗先は鉄製品に差し込みやすくするため、前後両面から細く削って尖らせてあり、先端のラインはやや内反りになっている。柄を差し込むための幅は幅2.6cmで、柄穴は貫通しておらず、2.1cm×5.2cmの長方形を呈している。肩部の欠損が大きく、着柄軸も根元のところから折れている。2は柵と思われる木製品で、現存長29.3cm、身の長さ27.3cmである。最大幅は11.4cmあって中央付近はやや窪んでおり、身の最大厚は1.6cmである。3は身の形状は2に近いが、上面の湾曲の度合いが大きく、杓子形木製品といえる。身の平面形は長方形で幅11.3cm、柄の長さは16.5cmで、全長51.8cmを測る。4～7は容器類で、4はスギの板材を用いた割り抜き式の方形盤である。長さ45.0cm、高さ5.5cmを測る。内面には細い刃物痕跡が多数残っており、俎板代わりに使われていたこともあったかもしれない。5はスギ製の長梢円形の鉢の破片と思われるもので、内面の加工は丁寧である。6はカヤ製の皿で、II線外側から内面にかけて丹が施されている。7は割り抜き式の桶の一部である。8は横杓子の身であるが、やや厚手の作りで、厚さ7～9mmを測る。加工は丁寧で、底部が平坦になっている。9は舟形木製品と思われるものである。平面長方形を呈し、全長33.4cm、幅6.6cm、高さ4.4cmである。岡面左側の端面は斜めに粗いカットを加えただけで、右端は端面が垂直になる。中の割り抜きも平面長方形であるが、内部は船底状に丸く仕上げている。いわゆる舟形の祭祀具と考えられる。

10a層出土木製品（第112図）

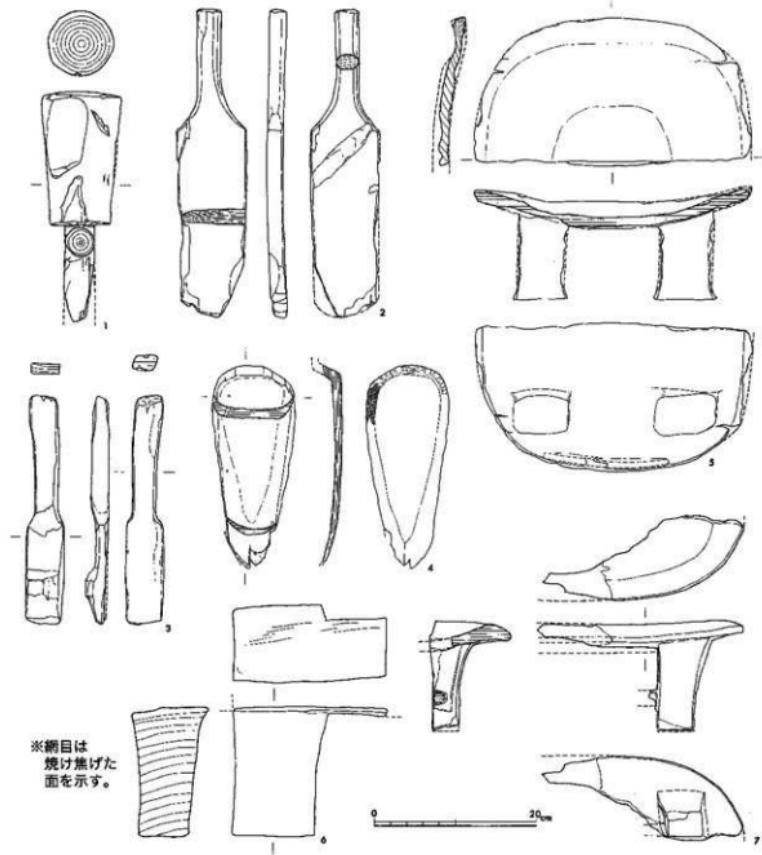
10a層からの出土点数は少なく、しかも河道の中央付近から集中して出土している（第110図）。製品には農耕具や容器が多い。第112図1は棒型の田下駄と思われるものである。雑棒と考えられる部材は両端を欠損していて現存長は65.0cm、断面は一辺3.0～3.5cmのほぼ方形を呈している。横桟を差し込むためのほぞ穴が6個残っており、そのうち2個に桟が刺さったまま出土している。桟が抜け落ちてしまったほぞ穴は朽ちて穴自体が大きくなってしまっているが、遺存している桟のはぞの大きさは1.4cm×1.7cmで、復元できる穴と穴との間隔はちょうど8cmである。また、横桟の大きさはほぞの部分よりかなり大きくなって2.0cm×2.5cmである。スギ製と思われる。2は曲柄又鉗で、軸頭部分が欠損しているが、奈良国立文化財研究所発行の木器集成図録近畿原始篇の分類の曲柄又鉗D式に相当する。現存長57.3cm、刃部先端の幅は13.5cmである。二股の刃部の先端両側にそれぞれ5mmの幅で縫り込みがあり、その内側に小穴が開けられていることから、鉄製の刃先をここに装着、固定したものと推定される。3は杓子形木製品、4は剖物桶である。桶の内面には黒漆が塗られているが、底板の上面の位置で止まっている。底面には高さ1cm、断面台形の低い脚がつく。5は黒色の方形鉢である。立ち上がりは直線的であるが、口縁の四隅は丸く仕上げている。内面両短辺にはヤリガンナ痕が明瞭に残っている。漆塗りの可能性がある。6は高壺である。轆轤整形を思わせるような精巧品だが、壺部や脚端部を欠いている。脚柱部には貫通した幅3mmの透かしが4箇所、線状にはいる。7はやや大形だがつちのことと思われる。



第113図 B · BW区10 b層木製品出土状況



第114図 B・BW区10b層出土木製品実測図(1)



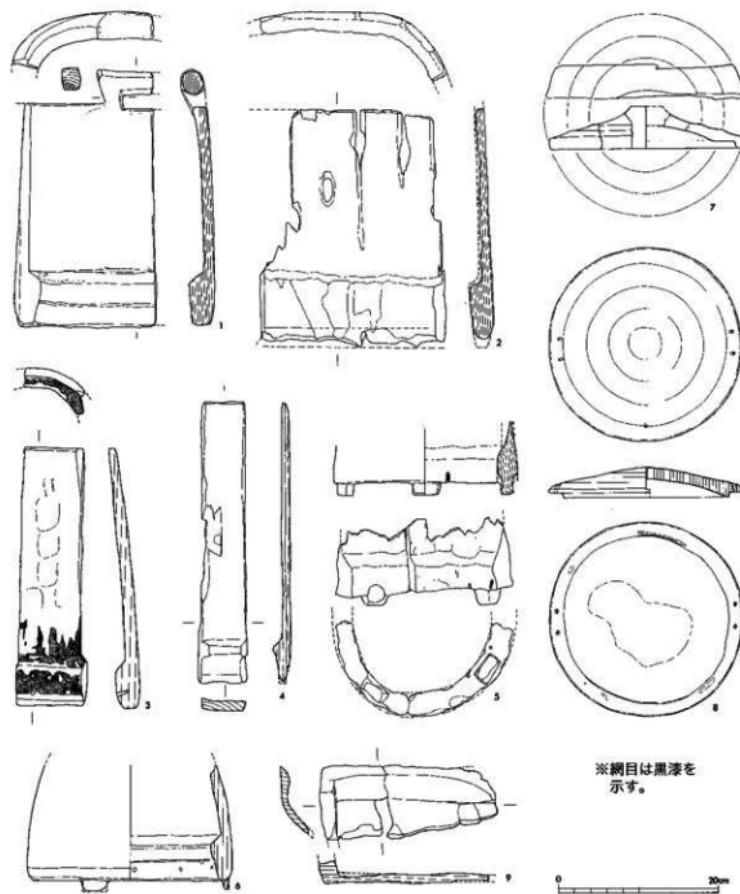
第115図 B・BW区10b層出土木製品実測図(2)

10b層出土木製品（第114～122図）

10b層からは土器と同様に多数の木製品が出土している。また、この層は木橋や護岸施設が埋没していく時期に相当しているので、遺構に絡まるようにして出土した木製品も多い。製品の種類としては農工具類から食器、容器類、腰掛などの日用雑具類、武器類と幅広く出土している。

第114図1・2は直柄平鉗で、アカガシ亜属の木を使ったものである。1は後面に舟形隆起が付き、前面には柄孔の上部に泥よけを組み合わせるための溝が掘り込まれている。全長30.5cm、現存幅15.5cmである。2にも後面に舟形隆起が付いているが、前面の泥よけを装着するための溝ではなく、その代わりに溝に当たるところに泥よけを受けるための段差と、横ずれを防止するためと考えられるぼぞ孔が段中央部に作られている。北陸地方から出土する平鉗によく似ている。柄孔の両側の方

形の小穴は泥よけの装着に關係するものと推定される。同図3は直柄平鍔で、アカガシ亜属製である。柄孔の上部の突出は柄を装着するには幅広すぎるが、身の肩というふうでもない。全長30.0cm、刃部幅17.9cm、厚さ1.9cmを測る。4・5は二股の曲柄又鍔である。6は剣物の底板を転用した泥よけと思われる。半円形の板の弦のほうに3個の方形の孔が開いており、中央の大きな孔が柄孔と思われる。円弧の周縁には少し離れて4個の木釘が斜めに打ち込まれているが、これが底板と桶とを接合していた木釘と考えられる。6は弓の欠損品、8は杓子形木製品、9は堅杵、第115図1は横槌である。第115図2は板目材を使った杓子形木製品であるが、反りが若干あるものの身の部分に窪みがなく、厚さは均等である。握り部は面取りを丁寧に行って丸みをつけており、羽子板状の



第116図 B・BW区10b層出土木製品実測図(3)